

いいだじょうかまちいせき  
飯田城下町遺跡

2001. 3

長野県飯田市教育委員会

いいだじょうかまちいせき  
飯田城下町遺跡

2001. 3

長野県飯田市教育委員会

磁器 仏飯器



同小坏・小碗

同中碗・うがい茶碗



同うがい茶碗

卷頭 2



磁器 小皿



同五寸皿



同中盤



磁器 中鉢



同猪口



同蓋物



同蓋物



水神

卷頭 4



磁器 合子蓋



同神酒德利



陶器 小碗



同中碗



陶器 中碗



同小皿



同小皿

## 序

私たちの飯田市は、美しい自然に恵まれ、長い歴史と尊い伝統文化につつまれた人情豊かなまちとして知られており、市民憲章では「伝統を生かし、文化の香り高い飯田市をつくります」と宣言しています。かつて小京都といわれた飯田の町は、昭和22年の飯田大火で旧市街地の大半を焼失し城下町の面影が失われてしまいました。この未曾有の火災にめげず市民が一丸となって復興を成し遂げてきたわけですが、近年市街地が郊外に拡散し旧市街地が空洞化する中で、中心市街地の再開発が大きな課題となっています。今回計画されました再開発事業は、こうした課題解決の第一歩となるもので、官民一体となって取り組んでいる公共性の高い事業です。

中心市街地周辺は、大火によって町並みや文化財が多く失われ、城下町以前の姿は断片的に把握されているのみですが、旧石器時代末以来連綿とした人々の営みがあったことがうかがえます。このような歴史・文化を物語る埋蔵文化財はじめ多くの文化財を、できるかぎり現状の姿のままで後世に残し伝えるのが私たちの務めですが、今次のような公共性の高い事業の場合、次善の策として事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることもやむを得ないものといえましょう。

以上のような経過で今回の発掘調査が実施された結果、城下町が被ってきた大火や満水の歴史、町屋の変遷や生活の様子、物資の流通事情などが明らかになり、また、新たに弥生時代の墓域の一画が把握されるなど、大きな成果がありました。同時に、多層にわたる面的な調査が課題として浮かび上がっており、城下町遺跡の継続的な調査が重要であることを改めて痛感させられました。

今後、本書が広く活用されるとともに、更に調査地点周辺の旧市街地でも文化財保護に意を尽くし、城下町飯田の姿を明らかにすることが、文化の香り高い飯田市をつくるために必要かと思います。

最後になりましたが、文化財保護の本旨にご理解を賜りご協力いただきました飯田市橋南市街地再開発組合の皆様、ならびに発掘調査に従事された関係者の方々に深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞いたします。

平成13年3月

飯田市教育委員会

教育長 富 田 泰 啓

## 例　　言

1. 本書は飯田市橋南第一地区市街地再開発事業に先立って実施された、飯田市本町飯田城下町遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市橋南第一地区市街地再開発組合 理事長 赤羽栄一からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成11年度に現地作業および整理作業の一部、平成12年度に残りの整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施に当たり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。また、遺物写真撮影を西大寺フォト、焼塙壺の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託実施した。
5. 発掘作業・整理作業に当たり、遺跡略号として I JM を一貫して用いた。
6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。

方形周溝墓	- SM	溝址・溝状址	- SD
井戸	- SE	地下室・土坑・便所等	- SK
不明	- ZZ Z		

7. 出土遺物の分類・計測方法については、新宿区内藤町遺跡調査会 1992 『内藤町遺跡』を、また陶磁器類の年代については、同書および東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報』2 を参照した。
8. 本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。
9. 土層の色調については、『新版標準土色帖』1998年版の表示に基づいて示した。
10. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により藤原直人・馬場保之が行なった。
11. 本書の執筆は馬場が、編集は馬場・藤原が行なった。
12. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
13. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

# 本文目次

序

例言

目次

第Ⅰ章 経過	1	(3) その他	44
第1節 調査に至るまでの経過	1	第4節 出土遺物	44
第2節 調査の経過	1	1. 近世・近代	44
第3節 調査組織	1	(1) 磁器	44
第Ⅱ章 遺跡の環境	3	(2) 陶器	51
第1節 自然環境	3	(3) 灰器	59
第2節 歴史環境	5	(4) 土器	60
第Ⅲ章 調査結果	11	(5) 瓦類	62
第1節 調査区の設定	11	(6) 土製品	62
第2節 基本層序	11	(7) 金属製品	62
第3節 調査遺構	11	(8) 木製品	63
1. 近世・近代	11	(9) 骨角製品	63
1) 地下室	12	(10) 石製品	63
2) 井戸	15	(11) 動物遺存体	64
3) 廊	15	2. その他の時代	65
4) 木戸	16	(1) 繩文時代	65
5) 鹿芥投棄坑	16	(2) 弥生時代	65
6) 大火灰焼き坑	17	(3) 古墳～平安時代	65
7) その他	21	第IV章 総括	66
2. その他の時代	43	引用参考文献	75
(1) 弥生時代	43	付編 飯田城下町出土焼塙壺の胎土分析	
1) 方形周溝墓	43	一パリノ・サーヴェイ株式会社一	147
2) 平安時代後期	44	報告書抄録	151

# 挿図目次

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	4	挿図7 SK07、SK09・SK44	29
挿図2 調査地点および周辺図	9	挿図8 SK13、SK27、SK30	30
挿図3 基準メッシュ図区画 調査位置	10	挿図9 SK14・SK23	31
挿図4 遺構全体図	13・14	挿図10 SK16、SK18・SK21、 SK28	32
挿図5 SK01～SK04、SK08、 SK11	27	挿図11 SK17	33・34
挿図6 SK06・SK10・SK26、 SK12、SK15	28	挿図12 SK19・SK34、SK32、 SK35	35

挿図13	S K20・S K37・S K38、 S K36、S K39 .....	36	挿図18	S D03・S D04・A I 43 P 1 ・A J42 P 1・A J43 P 1 .....	41
挿図14	S K22、S K24・S K25、 S K41、S K48、S K49 .....	37	挿図19	S D07、S D08、S D09・ S D10、S D11、S E01 .....	42
挿図15	S K29、S K31・S K33、 S K40・S K52 .....	38	挿図20	S M01 .....	43
挿図16	S K42・S K45～S K47、 S K53 .....	39	挿図21	周辺柱穴平面図 .....	45・46
挿図17	S K43・S K50・S K51、 S D01・S D02、S D05・ S D06 .....	40	挿図22	家並帳 .....	68

## 図版目次

第1図	遺構出土遺物（1） .....	81	第13図	遺構出土遺物（13） .....	93
第2図	遺構出土遺物（2） .....	82	第14図	遺構出土遺物（14） .....	94
第3図	遺構出土遺物（3） .....	83	第15図	遺構出土遺物（15） .....	95
第4図	遺構出土遺物（4） .....	84	第16図	遺構出土遺物（16） .....	96
第5図	遺構出土遺物（5） .....	85	第17図	遺構出土遺物（17） .....	97
第6図	遺構出土遺物（6） .....	86	第18図	遺構出土遺物（18） .....	98
第7図	遺構出土遺物（7） .....	87	第19図	遺構出土遺物（19） .....	99
第8図	遺構出土遺物（8） .....	88	第20図	遺構出土遺物（20） .....	100
第9図	遺構出土遺物（9） .....	89	第21図	遺構出土遺物（21） .....	101
第10図	遺構出土遺物（10） .....	90	第22図	遺構出土遺物（22） .....	102
第11図	遺構出土遺物（11） .....	91	第23図	遺構および遺構外出土遺物 .....	103
第12図	遺構出土遺物（12） .....	92			

## 表目次

表1	土層観察表（1） .....	104	表8	陶磁器観察表（4） .....	110
表2	土層観察表（2） .....	105	表9	陶磁器観察表（5） .....	111
表3	土層観察表（3） .....	106	表10	陶磁器観察表（6） .....	112
表4	木製品観察表 .....	106	表11	土器観察表（1） .....	113
表5	陶磁器観察表（1） .....	107	表12	土器観察表（2） .....	114
表6	陶磁器観察表（2） .....	108	表13	金属製品観察表 .....	114
表7	陶磁器観察表（3） .....	109	表14	石製品観察表 .....	114

## 写真図版目次

卷頭1 磁器仏飯器 同小坏・小碗、 同中碗・うがい茶碗 うがい茶碗	図版15 S K01 S K10 ..... 131
卷頭2 磁器小皿 同五寸皿 同中鉢	図版16 S K10 S K18 ..... 132
卷頭3 磁器中鉢 同猪口 同蓋物 水神	図版17 S K16 ..... 133
卷頭4 磁器合子 同神酒徳利 陶器小碗 同中碗	図版18 S K20 S K22 ..... 134
卷頭5 陶器中碗蓋 同小皿	図版19 S K23 S K27 S K34 ..... 135
図版1 調査区全景(南東半・北西半) ..... 117	図版20 S K42 S K48 S K02陶器花生 ..... 136
図版2 S K14 S K17 ..... 118	図版21 S K07 S K08 S K26 S K39不明石製品 S K35 ..... 137
図版3 S K14 S K17 ..... 119	図版22 陶器小坏 同中碗印 同小皿 ..... 138
図版4 S K31・S K33 S K33 S D02・S D03 ..... 120	図版23 陶器極小皿 同灯明皿 同仏飯器 同小鉢 同中鉢 ..... 139
図版5 S K13 同断面 同遺物出土状態 ..... 121	図版24 陶器大鉢 同盃洗 同蓋物 同合子 同擂鉢 ..... 140
図版6 S K10 S K10・S K26 S K16 ..... 122	図版25 陶器練鉢 同捏鉢 同香炉 ..... 141
図版7 S K20 S K23 S K27 ..... 123	図版26 陶器灰吹 同中臺蓋 同小壺・中壺 同中瓶・大瓶 同燐徳利 ..... 142
図版8 S K42 S K02 S K07 ..... 124	図版27 陶器土鍋 同水滴 同仏花瓶 同秉燭 同灯明受皿 ..... 143
図版9 S K11 S K21 S K24 ..... 125	図版28 土器灯明皿 同焼塙壺 ..... 144
図版10 S K25 S K26 S K28 ..... 126	図版29 土器焜炉 同柳川鍋 同不明瓦質製品 ..... 145
図版11 S K30 S K32 S K37 ..... 127	図版30 煙管 小束・環 磚石 茶臼 ..... 146
図版12 S K44 S D05・S D06 S M01 ..... 128	
図版13 6トレンチ小柱穴 重機作業 風景 発掘作業風景 ..... 129	
図版14 S K13 S K03 ..... 130	

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

平成10年10月、飯田市本町1丁目13-1他における市街地再開発計画が提示された。当該計画地は埋蔵文化財包蔵地飯田城下町遺跡の一画に位置する。本遺跡は、近世城下町とそれに引き続く市街地化の中でこれまでほとんど発掘調査は実施されておらず、遺跡の具体的な状況は不明な点が多くあった。そこで、飯田市橋南第一地区市街地再開発組合・飯田市まちづくり推進室・飯田市教育委員会の三者で保護協議を行い、とりあえず試掘調査を実施し、その結果に基づいて改めて協議することとなった。

平成11年12月24日、飯田市橋南第一地区市街地再開発組合 理事長 赤羽栄一と飯田市長 田中秀典との間に飯田市橋南地区における埋蔵文化財保護に関する協定書および平成11年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、同12年1月17日に試掘調査に着手した。その結果、昭和22年の飯田大火とそれに引き続く市街地復興のため破壊をされている部分がある一方で、近世の地下室・廁等の諸造構や弥生時代以降の遺物が良好に遺存する部分もあり、部分的な発掘調査実施が不可欠であると判断された。

## 第2節 調査の経過

諸協議に基づいて、1月24日、本発掘調査に着手した。まず、重機を入れて舗装の除去・表土剥ぎを行い、続いて1月26日より作業員を入れて造構検出作業を行い、確認された造構から順次掘り下げ、精査した。そして、全景写真・個別造構写真の撮影、実測等の作業を行い、現地での作業を2月10日終了した。なお、基準点設置を株式会社ジャステックに委託実施した。その後、飯田市考古資料館において、現地で記録された図面・写真類の整理、出土遺物の水洗・注記作業等を行い、概要報告の作成にあたった。

平成12年度は、引き続き、飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記作業、遺物の拓本とり、造構図等の作成・トレース作業、版組み等を行い、本報告書作成作業にあたった。なお、出土遺物写真撮影を西大寺フォト、焼塙壺産地同定のための胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託実施した。

## 第3節 調査組織

### (1) 調査団

- 調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助（～平成11年12月）  
富田泰啓（平成11年12月～）
- 調査担当者 馬場保之・藤原直人（財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターより派遣、平成11・12年度）
- 調査員 佐々木嘉和・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・福澤好晃・坂井勇雄

作業員 新井幸子・伊藤和恵・伊藤孝人・伊東裕子・井上恵資・岡田直人・尾曾ちぶき  
北川 彰・北沢一嘉・北澤兼男・吉地武虎・木下貞子・熊崎三代吉・小島康夫  
小林定雄・榎山修三・佐々木一平・斯波幸枝・清水三郎・代田和登・杉山春樹  
高橋セキ子・竹本常子・田中 薫・中村地香子・中山敏子・服部光男・久田 試  
樋本宣子・藤本 宏・牧ノ内昭吉・正木実重子・松井明治・松下成司・松下博子  
三浦照烈・森山昭吉・柳沢謙二  
新井ゆり子・池田幸子・金井照子・金子裕子・唐沢古千代・木下早苗・木下玲子  
小池千津子・小平まなみ・小林千枝・斎藤徳子・佐々木真奈美・佐藤知代子  
関島真由美・高木純子・橘 千賀子・筒井千恵子・中沢温子・中田 恵・中平けい子  
林勢紀子・林ひとみ・原 昭子・平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・牧内喜久子  
牧内八代・福沢育子・福沢幸子・松本恭子・三浦厚子・宮内真理子・森藤美知子  
森山律子・吉川悦子・吉川紀美子

#### (2) 指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課、(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター、  
東京大学埋蔵文化財調査室、(財)東京都生涯学習文化財団 東京都埋蔵文化財センター  
原 祐一(東京大学埋蔵文化財調査室助手)、原川雄二(東京都埋蔵文化財センター主任調査研究員)、  
小林 謙一、小川 望

#### (3) 事務局 飯田市教育委員会

関口和雄 (教育次長、~平成12年3月)  
久保田裕久 ("、平成12年4月~)  
小畠伊之助(博物館課長、~平成12年3月)  
米山照実 ("、平成12年4月~)  
小林正春(博物館課埋蔵文化財係長)  
馬場保之 (" 埋蔵文化財係)  
渋谷恵美子 (" )  
吉川金利 (" )  
福澤好晃 (" )  
伊藤尚志 (" )  
下平博行 (" )  
坂井勇雄 (" )  
麦島博晴 (" 庶務係長、~平成12年3月)  
今村 進 (" "、平成12年4月~)  
牧内 功 (" 庶務係、~平成12年4月)  
松山登代子 (" "、平成12年4月~)

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

飯田市本町は飯田市街地の一画に位置する。

飯田市は伊那山脈と木曽山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

本書に関連する飯田市街地が立地する場所は、南を飯田松川により、また北側を野底川により区切られた段丘上に立地する。この段丘上には、風越山麓から扇状地が発達し、東端の段丘端部（標高500m）から風越山麓（標高600m）までの比高差100mの間が緩やかな傾斜で一連の面となっている。

地形・地質の概観は、『伝馬町遺跡』（下伊那教育会 1988）によると、

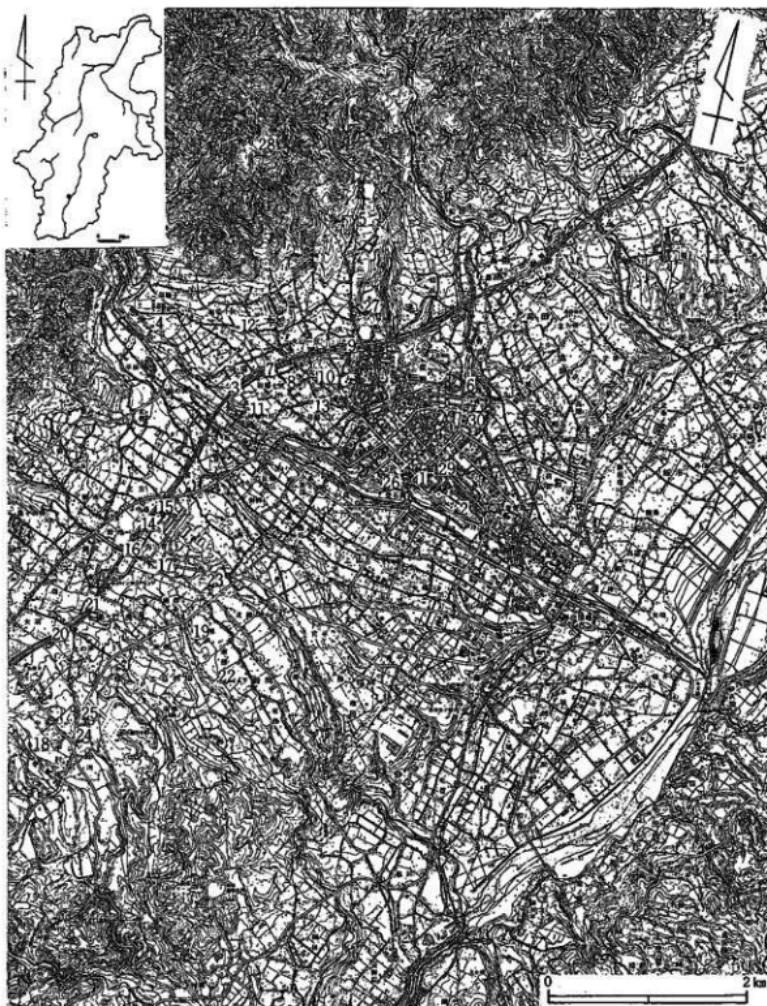
「段丘は2つの疊層と、最上段に重なる火山灰層からできている。最上部の火山灰層は飯田城二之丸跡で約3mの厚さを持つ。火山灰の給源は御岳火山で、その新期テフラ層を主体にしたものであり、約2万年前から4万年前の地層である。

火山灰層の下にある疊層が段丘疊層である。段丘疊層は花崗岩疊層を主体とする疊層で、飯田松川または野底川によって運搬・堆積した疊層である。愛宕神社では3～4mの厚さを持ち、飯田城二之丸では4～5mの厚さを持つ。疊は白く新鮮で、風化が進んでいないので、崖上に突出した地層をつくっている。疊の大きさは20～30cm大を主とし、ときには1.5m大の巨疊も含んでいる。疊の間は粗い花崗岩質の砂によって充填されている。この疊は支流に古い扇状地を浸食していくときの疊層で、飯田市街地の開拓段丘をつくったときの地層である。

飯田市街地の段丘の主体を占める疊層は段丘疊層の下にみられる。両者は不整合関係である。下位の疊層は“伊那層群”的一員で、その最上部にある“柳沢疊層”相当層である。古くから、通称『伊那層』と呼ばれている。伊那層は愛宕神社で30m余、飯田城址で40m余が露出しているものの、下限は不明であるから、飯田市付近では数10mから100mの厚さを有すると推定される。この疊層は東鼎の低地部でもボーリングによって数m下に存在し、松川を越えた一色・名古熊段丘に連続している。つまり10数万年より以前の中期更新世までは、飯田市街地から一色・名古熊まで一続きの扇状地が広く盆地を埋積していたのである。そのときの扇状地は天竜川に沿って、主として天竜川の堆積による疊層が広く分布していた。

伊那層は茶褐色を示し、花崗岩疊やホルンフェルス疊が全ぐさり状態に風化している。チャート疊のみが堅いままで残っている。疊種は天竜川の河床疊と同じようで、赤石山地から運ばれてきた緑色岩類やチャートを含んだり、諏訪方面から供給された安山岩疊が含まれている。疊は数cm大のものを主体とし、わずかに10cmから10数cmのものを含んでいる。少ないが薄い砂層もはまれている。

飯田市街地の段丘は、“伊那層”によって構成されている。しかし、その疊層は段丘をつくったときの疊層ではなく、段丘時代より一時代前の大扇状地時代のものである。伊那谷が段丘時代にはいると、松



1. 飯田城下町遺跡 2. 飯田城跡 3. 梅光院前（湯池）遺跡 4. 正永寺原遺跡 5. 押羽遺跡 6. 大門町遺跡  
 7. さつみ遺跡 8. 羽堤跡 9. 古原垣外遺跡 10. 丸山遺跡 11. 方角東遺跡 12. 木戸脇古墳  
 13. 井が塚古墳 14. 三豊南遺跡 15. 上の金谷遺跡 16. 小垣外遺跡 17. 八幡面遺跡 18. 中村中平遺跡  
 19. 中島平遺跡 20. 六反田遺跡 21. 湯屋前遺跡 22. 公文所前遺跡 23. 須坂遺跡 24. 中川遺跡  
 25. 三日市場大原遺跡 26. 爰宕城跡 27. 城山城跡 28. 虚空蔵寺跡 29. 伝馬町 30. 屋越窓跡

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

川や野底川が扇状地を浸食して扇状地開析段丘をつくってきた。川沿いで深く掘りこみ、扇状地は分断され、扇状地の上も削りこまれて何段もの段差をもつ複雑な段丘地形が形成されたのである。」

こうした地形の中で、飯田城下町遺跡は、段丘端部に築城された飯田城の西側前面、すなわち扇状地の末端付近に位置する。

## 第2節 歴史環境

飯伊地方唯一の近世都市であるという点が、最も本遺跡を特徴づけるものであるが、城下町から引き続く市街地化の過程で、これに先立つ時代の様相が不明瞭になったということもまた、本遺跡の大きな特徴といえる。これまで調査地点周辺では、飯田市美術博物館建設に先立つ飯田城跡発掘調査以外具体的な調査はなく、断片的な知見が得られている程度であるが、周辺地区を含めた考古学的事実から、本遺跡周辺・旧市地区の歴史環境を通観する。

旧石器時代については、市内では石子原遺跡の調査以外に特筆されるものはなく、断片的に遺物が出土している程度で、この時代の様相を詳述できる材料がないのが現状である。本地区でも、美術博物館建設に先立つ発掘調査で細石刃核が出土したのみである。

縄文時代早期では湯渡（権現堂前）遺跡・正永寺原遺跡・押洞遺跡等で押型文土器の破片が見つかっている（八幡 1972）。中期になると正永寺原遺跡・権現堂前遺跡・押洞遺跡・大門町遺跡（飯田高校考古学研究会 1975）・飯田城下町遺跡と山麓から台地先端にいたる広範な地域に遺跡が分布するようになり、遺物も多く見られるようになる。

続く、水稻栽培を経済基盤とする弥生文化の下伊那への波及は縄文時代晚期終末のことであり、美濃・尾張・三河方面から東漸したものと考えられている。旧市内の代表的遺跡として、権現堂前遺跡・さつみ遺跡（以上方角東遺跡に含まれる。長野県教委 1971）、羽場曙遺跡・正永寺原遺跡・古屋垣外遺跡（同前）・丸山遺跡（飯田市教委 1988a）等があり、後期の遺跡が多く見られる。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期各地区に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。方角東遺跡・羽場曙遺跡では、堅穴住居址・方形周溝墓等が調査され、散在的な集落景観が把握されている。こうした状況は、他地区的高位段丘上に立地する遺跡と共通しており、風越山の裾部や扇状地扇端部付近で発達する湧水や、小河川沿いでの水田經營が随所にあったことが予想される。

古墳時代にはこの時代の最も特徴的な事象として古墳の築造があり、上飯田地区内にも数基の古墳が存在したことが伝えられているが、現在は市街地化の進行により残存するものは木戸脇古墳・杵が塚古墳のみである。また、寛政年間に松平楽翁が著した『集古十種』銅器一の部の古鏡図によって本遺跡内にも古墳があったことが知られる（下伊那誌編纂會 1955）。該期の集落は丸山遺跡で調査されており、相当規模の集落の存在が考えられるが、なお断片的に把握されているにすぎない。同様な地形を呈する伊賀良地区の場合、該期の集落遺跡として、富の平遺跡（飯田市教委 1996a）・三壇湖遺跡（長野県教委 1973）・上の金谷遺跡（同前）・小堀外遺跡（飯田市教委 1988b）・八幡面遺跡（同前）・中村中平遺跡（飯田市教委 1994）・中島平遺跡（同前 1977）が調査されているが、前時代よりも集落数が激減することが指摘されているし、こうした状況は上郷・座光寺地区の上段でも概ね当てはまる。旧市地区においても同様のことが想定できよう。

続く奈良・平安時代の状況は全く不明であるが、前述の伊賀良地区では三壇溝遺跡・上の金谷遺跡・小垣外遺跡・八幡面遺跡といった古墳時代の集落が存続する一方で、平安時代には六反田遺跡（長野県教委 同前）・酒屋前遺跡（飯田市教委 1983）・公文所前遺跡（同前 1991）といった集落が登場してくるなど、高位段丘上の開発が進展したことが考えられる。この高位段丘上の諸開発を裏付けるものとして、殿原遺跡溝址3（同前 1987・1992）・中川遺跡溝址3（同前 1996b）。三日市場大原遺跡や方角東遺跡等で確認された溝址が挙げられよう。

中世に至って、それぞれの詳細な築城時期は不明ではあるが、飯田城・愛宕城・上飯田の城山・虚空藏山頂等に山城が造られ、一定の集団による活動があったことを推し計ることができる。未報告であるが、飯田城跡の発掘調査では、近世城郭に先立つ遺構として、空堀2本と小規模な方形の豈穴が約60軒検出されている。

近世の考古学的成果として、飯田城跡二之丸発掘・本丸発掘、伝馬町の発掘、風越窯址の調査がある。飯田城跡二之丸発掘。本丸発掘の大半についてはいずれも未報告であり、二之丸跡では、大通り跡・屋敷の礎石・柱穴・御用水・井戸・池・鍛冶施設・貯蔵施設・ゴミ捨ての大穴等の遺構・陶磁器類・土師質皿・焼塗壺・硯・石臼・煙管・簪・刀・漆器椀・焼物の玩具・碁石等の生活雑器の他、魚骨やサザエの貝殻等が見つかっている。また、住宅建設に先立つ調査では、空堀の出丸側石垣が把握され、サヤ鉢数点が出土したことから付近に飯田藩による官窯の存在した可能性が指摘されている（飯田市教委 1991b）。本丸跡では、池の一部が調査されている。伝馬町の発掘では、武家屋敷の主屋の一画が調査され、3期の遺構の変遷が把握されている（下伊那教育会 同前）。

風越窯址では2基の窯跡が調査・確認されている。この窯は嘉永年間に美濃から陶工を招いて窯器を焼かせたもので、飯田藩主堀親義のお庭焼・風越焼として知られている。わずか5年で廃止となったが、その後も雑器を焼いたと伝えられており、調査によって鉢・生焼の擂鉢の破片などが検出されてそれを裏付けた。風越窯は連房式登窯の本業窯で、30度を越す急斜面を利用して構築されている。遺物は完形品こそないが、染付けの磁器・青磁・白磁があり、優品が焼かれたことを示す好資料を得ている（飯田市教委 1979）。

飯田城の建築。遺構で現在残っているものは少なく、安土桃山時代の様式を伝える松尾木下家の門、上郷経藏寺の門・市立飯田中央図書館横の赤門、水の手から追手町へ登る坂の石垣外堀の一部、侍屋敷（佐々木 1995）といった程度である。

文献の面からみると、現在の飯田市街地は、古代には伊那郡麻績郷、中世には郡戸莊飯田郷に属している。この郡戸莊は、「吾妻鏡」文治2（1186）年3月12日の条に年貢未済の莊とみえ、6月9日後白河法皇が源頼朝に年貢を納めさせるように命じている。莊園の支配関係についてみると、暦応2（1339）年7月19日、近衛基嗣が郡戸莊を虎闘師練創建の山城櫻伽寺に寄進したとあり、また、至徳2（1385）年11月7日足利義満が櫻伽寺に所領安堵しており、領主の変遷が知られる。次に、地頭関係の記事を涉猟すると、文治3年、阿波の近藤六郎周家なる人物が、郡戸莊地頭に補せられ松原と称する場所に居館を置き、後に坂西と改称して愛宕に飯坂城を築いたという説があるが定かではない。「諏訪御符札之古書」の嘉暦3（1328）年の条にある地頭阿曾沼氏が諏訪上社に寄進した記事や、小山文書にみられる、觀応元（1350）年の「阿曾沼秀親所領注文」により、飯田郷の鎌倉時代から室町時代初期の地頭は阿曾沼氏であったことが知られる。また、享徳元（1452）年、長禄2（1458）年の同書では、飯田郷は信濃

国守小笠原氏配下の坂西康維が地頭として、諏訪上社神射山祭の頭役を勤めているし、天文2（1533）年には、山城醍醐寺理性院巖助が文永寺へ下向する途次に、飯田郷の坂西伊予守と弟民部少輔の居城を訪れたことが、「信州下向記」に記されている。これによって、南北朝期以降に、飯田郷地頭は阿曾沼氏から坂西氏と替わったと考えられる。

室町時代には小笠原氏が信濃國守護職に任せられたが、応永7（1400）年小笠原長秀に反発し、国人勢力が村上氏を盟主に結集して小笠原氏と争い、小笠原氏は大塔の古城址と塩崎城に籠もらざるをえなくなつた。この大塔合戦の際に、郡戸莊の国人は南に小笠原氏の拠点伊賀良莊を控えるといった地理的条件から、小笠原氏に従っている。大塔合戦を契機に守護権が衰退し、莊園領主の莊園支配や国領支配の崩壊が進んだ。また15世紀中葉の小笠原氏の内訌により、守護支配がいっそう有名無実化し、地元の小豪族が勢力を伸ばした。飯田郷地頭であった坂西氏は、永正6（1509）年白山社奥社本殿を建立するなど、相当な勢力を有していたことが窺われる。

1553年には、武田氏が小笠原氏を駆逐して伊那谷を支配し、郡代として秋山信友をはじめ高遠城、ついで飯田城に置き、それまで飯田城にいた坂西氏は武田氏に従った。これに際して、飯田城の拡張が行われている。天正10（1582）年、織田徳川連合軍が武田氏攻略に着手し、信長の先鋒織田信忠は飯田城を陥し、これによって坂西氏も滅んだ。

武田氏攻略後、信長は毛利秀頼に伊那郡を与えたが、同年本能寺の変により信長が倒れると、毛利氏は京都に上り、かわって徳川家康が配下としていた旧族の下条頼安を据えた。同12年に頼安が松尾氏に殺されると、菅沼定利が郡代として支配して15年までには飯田城に入った。定利は城下町作りに着手し、上級家臣を城下に集住させた。さらに、同18年徳川家康の関東移封とともに菅沼氏が関東に移ると、再び毛利秀頼が飯田に入り伊那全郡を支配した。秀頼は飯田城の拡張や、太閤検地を行い、三州街道に伝馬制を置いた。本町一・二丁目は城下町形成の初期、秀頼が飯田城主になった天正18（1590）年に作られたとされる（平沢 1972）。

文禄2（1593）年秀頼が病死し、その聲京極高知が跡を継いだ。京極氏は伊那街道の整備、城下町の整備を行い、番匠町・池田町・十王堂町・知久町・松尾町・田町・鍛冶町・大横町など商人町が整備され、京風の碁盤目状の町並となつた。

慶長5（1600）年京極氏は関ヶ原の軍功により加増されて丹後宮津（現京都府宮津市）に移り、下総古河（現茨城県古河市）から小笠原秀政が入り、同18年松本に移るまで在城した。小笠原氏は、三の丸を拡大して家臣を集めさせ、また、春日街道を開いたとされる。その後10年間、飯田領は幕府領となり小笠原氏の預りとなつた。

元和3（1617）年脇坂安元が伊予大洲（現愛媛県大洲市）から入り、播磨竜野（現兵庫県竜野市）に移るまで2代55年間で在城した。安元は文人としても知られ、桜町や伝馬町を作り、伝馬制度を整備した。この時期に中馬活動がはじまり、町内が繁盛した。また、城の惣堀（外堀）を構え、町内や近郷の寺院を町周辺部に集めて防備につとめた。

寛文12（1672）年、脇坂氏の後に堀親昌が下野烏山（現栃木県烏山町）から入り、以後明治維新まで12代約200年間にわたって堀氏が在城した。10代親富は、寺社奉行。若年寄・側用人・老中格と昇進し、天保の改革に関わっている。堀氏時代は知行高二万石で、近世中期頃から藩財政が窮乏したが、城下は中馬活動のいっそうの盛行とあいまって、商業都市や宿場として栄えた。

次に、城下の概略をみると、松川と谷川の間の台地は、先端から堀端（現銀座通り）までが山伏丸。本丸をはじめとする藩の中核部と重臣の武家屋敷があり、堀端をはさんで北に向かって知久町・鰐治町、本町・十王堂町・番匠町・池田町・田町・伊勢町・松尾町・峯高寺町などの町人町、それに武家屋敷のある下荒町・上荒町があった。本町は大手門を控えた目抜き通りにあたり、商業都市の中心として機能してきたといえる。町人町の周囲には武家屋敷が並び、さらにその周辺には、上述の通り龍翔寺・柏心寺・長源寺・峯高寺・真光寺・正念寺・本覚寺が配置されている。

飯田は、古くから大火が多く、江戸時代にも度重なる火災に見舞われている。大きな火災として寛永21（1644）年・宝永8（1711）年・享保元（1716）年・宝曆12（1762）年・天明3（1783）年・寛政11（1799）年・文政6（1823）年・天保2（1831）年・明治元（1868）年・明治6（1873）年・大正11（1922）年等がある。その中で天明3年2月晦日の火事は『池田町角淀屋半六借家庄之介出火し田町・番匠・松尾二三・本町一二・知久二三・七百五軒焼失』（高田 1966）とあり、寛政11年6月11日の火事は、『本町一丁目松屋安兵衛出火・本一・本二・番匠・知久一・知久二・松一を焼失。領主より松材・繩米被下、十二日には火災跡の火消に、焼残りの町より人足出る。』（同前）との記録がある。寛政9年の家並帳からすると、火元は今次調査地点の一画に位置する。また、大正11年5月4日の火事は358戸が焼失する大火で、愛宕坂中程から出火し扇町・知久町1丁目・本町1丁目の半分・常盤町・広小路・追手町・主税町まで罹災した。さらに、昭和22年の大火は市街の8割を焼き、本町周辺も多く灰燼に帰したが、土蔵の幾つかはその難をまぬがれて、江戸時代の面影をとどめている。

今次調査地点は、上述の通り飯田城の大手門から延びる当時の中心市街地に位置しており、上級商家の家並や生活の様子の一部が明らかにするといえる。

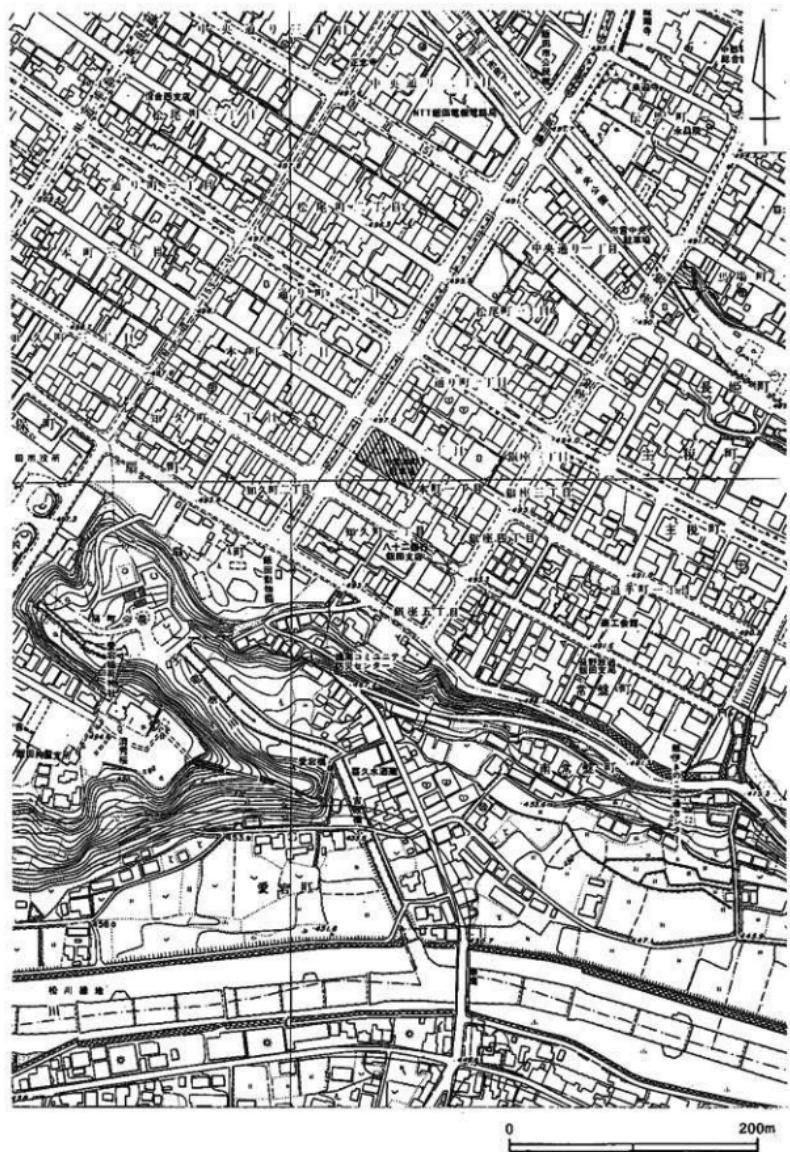
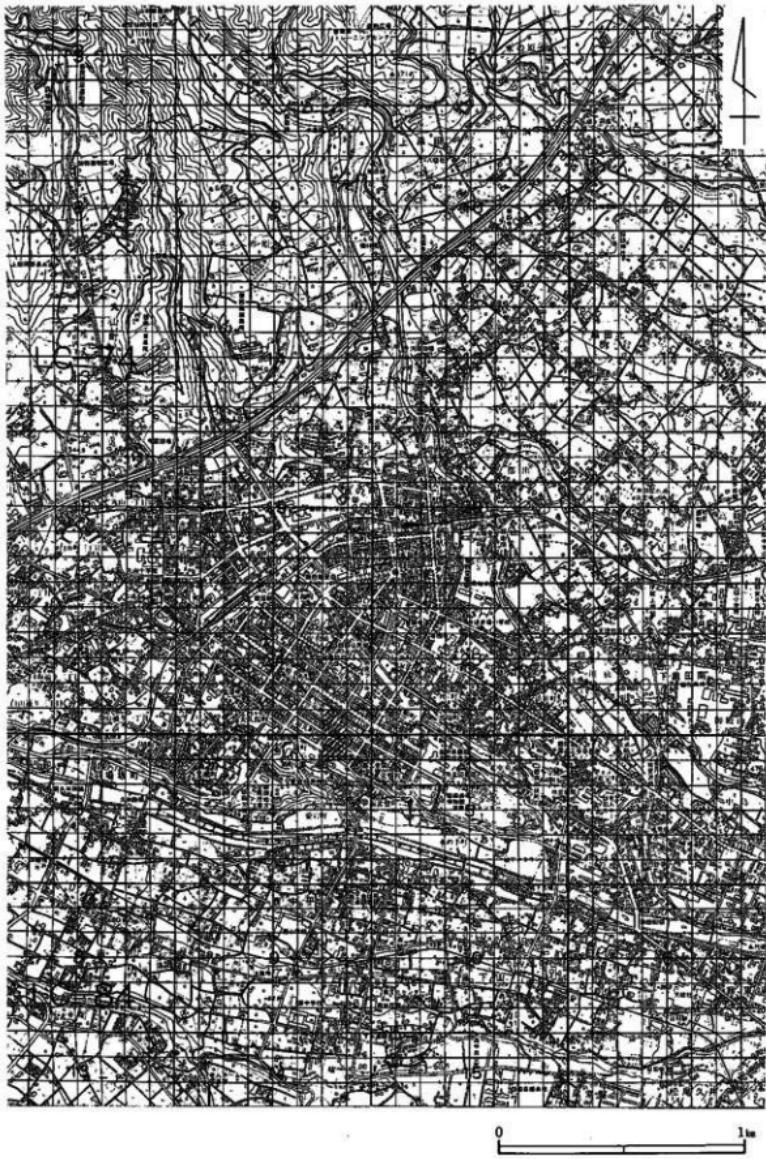


図2 調査地点および周辺図



挿図3 基準メッシュ図区画 調査位置

# 第Ⅲ章 調査結果

## 第1節 調査区の設定（挿図3）

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については、飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』他参照）。今次調査地点は、LC-74 24-47、LC-84 4-7 内に位置する。

## 第2節 基本層序

本調査部分では造構の重複や市営駐車場基礎の搅乱等のため、良好に基本層序を把握できた部分がない。そのため、試掘時の1トレンチのSE01（挿図19）・SK52（挿図15）付近の断面を使用する。なお、SE01断面図・SK52断面図のI～IV層は同一層、SE01断面図のV層はSK52断面図のV層を掘り込む造構の上に被る。

II層は飯田大火層である。SK52断面図の搅乱北側にはIV層を掘り込む造構が複数ある。埋土に炭・焼土が多く含まれることから、大火で埋まったものであろう。III層はこの大火に伴う整地層と考えられる。IV層は炭・焼土・灰がIII層よりも多く含まれ、同じく大火層と考えられる。SE01はIII層を掘り込んでおり、後述のように内部に飯田大火以前の炭・焼土が入っていた。こうした状況からすると少なくとも今次調査地点周辺では4度の大火があったことになる。各層の遺物から層の年代観を把握していないのでいささか乱暴であるが、大火の記事と照らし合わせるとIV層が天明3（1783）年の大火（以下「天明大火」と略す。）、III層が寛政11（1799）年の大火（以下「寛政大火」と略す。）、SE01埋土が大正11年の大火（以下「大正大火」と略す。）、そしてII層が飯田大火に対応する。

## 第3節 調査遺構

### 1. 近世・近代

本遺跡の造構は、主に近世になって城下町が形成されて以降、新築・増改築・取壊し・被災といった建造物がたどった歴史の断片としての痕跡であり、昭和22年の飯田大火で城下町の大部分が焼失するまで基本的にはその機能が継続していたと考えられるものである。今次調査で造構として捉えたものの中には、明らかに飯田大火の灰焼き坑として掘り込まれ、短期間に機能を失ったものが含まれる。しかし、そこから出土する遺物については、近世から継続使用されたものが大半であり、近世以前の造構と同様の取り扱いが不可欠であった。また、こうした遺物の使用状況から造構の設営年代や廃絶年代は不明な点が多く、特に設営年代についてはほとんど把握できない状況にある。こうした中で、上述の天明大火・寛政大火・大正大火・飯田大火は造構の年代観把握の定点になるものといえる。

## 1) 地下室

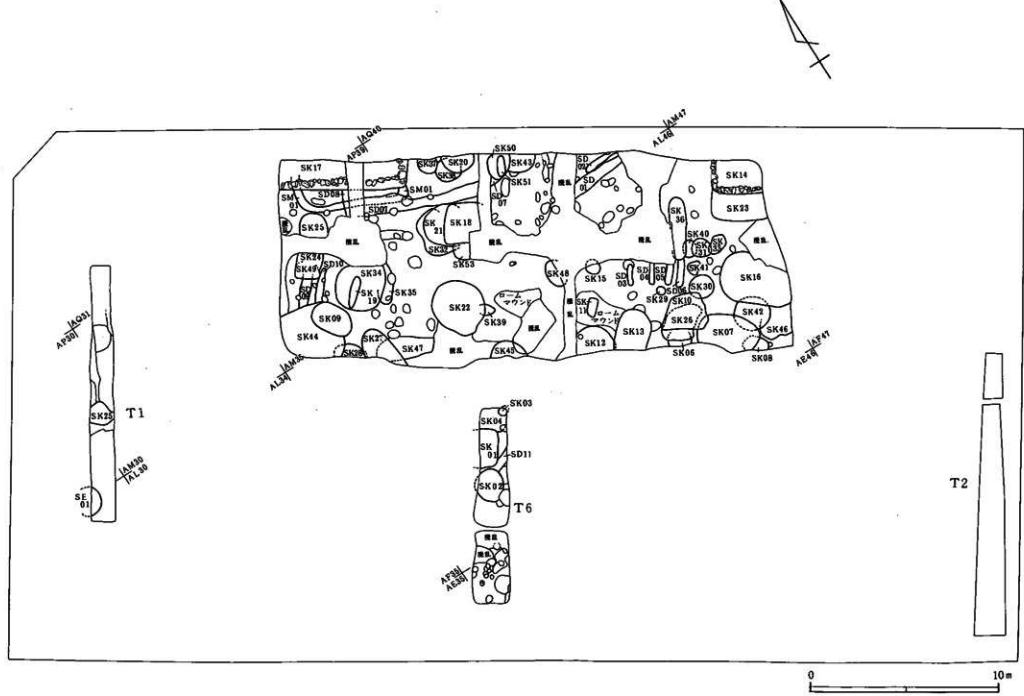
地面を掘り込んで作られた室である。

### ①SK14(挿図9)

【検出位置】AK46 【規模】 $- \times - \times 132\text{cm}$  【形態】長方形? 【主軸】- 【重複】SK23を切る  
【調査所見】20~40cm程度の円礫・割石が掘り方に添って乱層積みされ、裏込めの礫はない。西面、  
続いて南面が石積みされ、漆喰で石の間を目詰めしている。石積みや底面は火を受けた痕跡がなく、内  
部からの炭・焼土の出土もない。底面は土間であるが、南面の石積みに並行して礫が並んでおり、区画  
等何らかの構造物があったことが窺われる。昇降施設は調査範囲内では検出されなかった。埋土の下部  
は薄層が水平堆積しており、中位の2層は洪水起源の砂で、その後上部を砂・礫で一気に埋め立ててい  
る。下部最上層の2a層も洪水起源の砂と考えられるが、2層とは性状を異にし、SK07の上位で試掘  
時に確認された細砂と類似している。【出土遺物】磁器…中碗・薄手酒杯・極小皿・瓶・陶器…中碗・  
小皿?・中瓶・土鍋?・金属製品…平頭釘・不明銅製品 【時期】遺物には18世紀以降の磁器半筒形中  
碗、19世紀以降の瀬戸系磁器薄手酒杯があるが、火災に遭った痕跡はない。このことから、設営時期は  
19世紀以降、廃絶時期は大正大火以前と考えられる。

### ②SK17(挿図11)

【検出位置】AP38 【規模】(720) $\times - \times 154\text{cm}$  【形態】長方形 【主軸】N57°W 【重複】SM01、SD08を切る  
【調査所見】掘り方から20cm程度離して20~80cmの円礫および割石が乱層積みさ  
れ、10~20cm程度の円礫が裏込めされる。東面・西面が先に積まれ、続いて南面が積まれている。底面  
は土間であり、三段に分けられる。段の縁部分は平板な礫を据えている。安全確保のため北側は掘り進  
めることができず、縁石が北へ延びるか否かは確認できなかった。またこの縁石は石積み際にあること  
から、上屋を支える柱の礫石の役割を果たしていたことが考えられる。石積みや底面は火を受けた痕跡  
はなく、埋土中にも炭・焼土は含まれていない。埋土は西側では山砂で一気に埋まり、東側は20~40cm  
程度の礫が投げ込まれている。その前後関係については市営駐車場基礎で分断され判断がつかない部分  
があるが、西側の東端で砂の上に礫が乗ることから、おそらく東側の埋土が上に乗ると考えられる。遺  
物は使用時のものでなく、廃絶時に混入したものと考えられる。本址からは「水神」と朱書きされた円  
礫が出土しているが、出土位置は南西隅で底面から50cm浮いた位置の山砂中である。【出土遺物】磁器…  
小杯・小碗・中碗・中皿・大鉢・蓋物・神酒徳利・陶器…中碗・小皿・播鉢・花生?・土器…焜炉・炬  
燭炉・瓦類…軒棟瓦・金属製品…火打金?・煙管雁首・石製品…水神 【時期】遺物は17世紀後半以降  
の磁器色絵中碗、19世紀以降の瀬戸系磁器神酒徳利があり、設営時期は19世紀以降、また、廃絶時期は  
火災に遭っていないことから大正大火以前と考えられる。【備考】輸入磁器と考えられる磁器がある。  
弥生後期壺片が出土しており、重複するSM01からの混入と考えられる。



插図4 這構全体図

## 2) 井戸

### ① S E01 (挿図19)

【検出位置】 A L28 [規模]  $- \times (154) \times (130)$  cm [形態] 円形 [主軸] N 0° E [重複] -  
【調査所見】 1トレンチで確認されたが、精査していない。50cm前後の円礫・割石が乱層積みされ、掘り方と石積みの間は埋め戻されている。内部は多量の炭・焼土等が詰まっており、蓋石された直上にも大火層が被る。この蓋石の上下で大火の年代差があることから、内部の炭・焼土は大正大火に起因するもの、また、上部の大火層が飯田大火のものと考えられる。本址の掘り込みはⅢ層上面からである。

【出土遺物】 確認のみのため、遺物の取り上げはない [時期] 設営時期は寛政大火以降であり、廃絶は埋土の状況から大正大火時と考えられる [備考] 明治23年前後および飯田大火直前の家並帳ではこの付近に水産関係の店があり、それらとの関係を考慮する必要がある。

## 3) 廁

### ① S K29 (挿図15)

【検出位置】 A I 43 [規模]  $46 \times 43 \times 5$  cm [形態] 円形 [主軸] N89° E [重複] - [調査所見] 底面に塙分の沈着があり、遺構と認定した。小便槽の底部と考えられる [出土遺物] なし [時期] S K31・S K33との関連も考え得ることから近世としたが、詳細は不明である。

### ② S K31 (挿図15)

【検出位置】 A I 44 [規模]  $102 \times 96 \times 32$  cm [形態] 不整円形 [主軸] N22° E [重複] S K33・S K40を切る [調査所見] 遺構検出の際、新旧関係が把握された。便壺痕のある S K33と重複すること、底面の中央部が一段くぼんでおり S K33と類似することから、廁跡と判断した。内部のくぼみは便壺を据えるための掘り方と考えられ、無高台斐が便壺として設置され、廃絶時に抜き取られたと考えられる [出土遺物] なし [時期] S K33が複数遺構の重複と判明したが、遺物の出土位置が不明なことから、近世とは考えられるが詳細時期は不明である。

### ③ S K33 (挿図15)

【検出位置】 A I 45 [規模]  $(120) \times 74 \times 21$  cm [形態] 不整形 [主軸] N80° E [重複] S K31に切られる [調査所見] 遺構検出時には1つの遺構として捉えたが、プランや底面の状況から2つの遺構の重複と考えられる。西側は一段深く、底面中央に陶器甕高台跡があり、便壺が据えられていたと考えられる。便壺は抜き取られ、遺存していない。遺物の出土位置については東側か、あるいは便壺側であるか把握していない [出土遺物] 磁器…小壺 [時期] 2つの遺構のうちどちらか一方は、磁器小壺から17世紀以降と考えられるが、詳細は不明である。

### ④ S K52 (挿図15)

【検出位置】 A N 30 [規模]  $- \times 122 \times -$  cm [形態] 円形 [主軸] N57° W [重複] - [調査所見] 1トレンチで検出され、便壺の下部が確認された。V層を掘り込み、埋土に多くの炭・焼土が入

る。掘り方の南東端に陶器大甕が据えられている　【出土遺物】確認のみで、遺物の取り上げは行っていない　【時期】掘り込み面が天明大火の下部であることから、それ以前の遺構で、廃絶は天明大火時と考えられる　【備考】試掘時には未命名であり、整理作業時に遺構名を付した。

#### 4) 木戸（挿図18）

S D03・S D04および小柱穴からなる。S D03・S D04は根太およびその掘り方で、上部をロームで埋め固められていた。小柱穴はS D03の両端とS D04の両端が検出され、S D03・S D04の根太に連続する。小柱穴はS D03・S D04の中央側に傾いており、内転びに柱が立てられたと考えられる。内部から腐朽した木片および平頭釘が出土しており、根太に釘打ちされ土中に埋め込まれたものであろう。斜位の柱により上部を支えることから、何らかの上部構造があったことは疑いない。S D03・S D04の間隔は105cm(3.5尺)で、木戸跡ではないかと考えられる。また、S D04・A J43P 1から棟瓦が出土し、瓦葺きであったと考えられる。詳細時期は不明であるが、A J42P 1・A J43P 1から平頭釘が出土していることから明治20年以前に作られ、廃絶時期はS D04から熔けた板ガラス・煉瓦が出土していることから大正大火時と考えられる。なお、板ガラスの国内生産が明治42年に旭硝子株式会社の尼崎工場はじめり、これ以前は輸入板ガラスに拘っていたとされる（東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985）。

##### ① S D03

【検出位置】 A I 43 【規模】 (83) ×17×34cm 【形態】 直線状 【主軸】 N34° E 【重複】 -  
【出土遺物】 なし

##### ② S D04

【検出位置】 A I 43 【規模】 (105) ×12×32cm 【形態】 直線状 【主軸】 N34° E 【重複】 -  
【出土遺物】 木片、瓦類…棟瓦、熔けた板ガラス、煉瓦

##### ③ A I 43 P 1

【出土遺物】 木片

##### ④ A J42 P 1

【出土遺物】 金属製品…平頭釘、木片

##### ⑤ A J43 P 1

【出土遺物】 陶器…中碗(灰釉)、瓦類…棟瓦、金属製品…平頭釘、木片

#### 5) 麻芥投棄坑

明確に麻芥投棄坑であるのはSK13だけであるが、SK10底部でイタヤガイ・ハマグリが集中出土している。SK10は当初麻芥投棄坑として掘られた可能性もある。

##### ① SK13(挿図8)

【検出位置】 AH42 【規模】 - ×180×130cm 【形態】 - 【主軸】 N45° E 【重複】 SK12を切る  
【検出状況等】 埋土はレンズ状の堆積で、上部では西側からの埋没が卓越している。出土した漆器類に完形品がないことから廃棄されたと判断し、木片等もあることから本址を麻芥投棄坑と考えた

【出土遺物】 磁器…小碗・中碗・仏飯器・蓋物・香炉・青磁花生・陶器…中碗・小皿・五寸皿・中皿・大皿・灯明皿・小鉢・中鉢・大鉢・擂鉢・捏鉢・水鉢・香炉・大壺・中壺・炻器…擂鉢・大壺・土器…灯明皿・土製品…人形・金属製品…平頭釘・鉄滓・銅製仏花瓶・煙管雁首・煙管吸口・小束(鉄芯銅装)・不明銅錢、木製品…漆器・石製品…仕上延石 【時期】 陶器鉄絵大鉢等17世紀代に遡る遺物も多いが、磁器端反形小碗や捏鉢・水鉢から19世紀以降と考えられる 【備考】 埋土の堆積状況から、本遺構は屋敷地の東端付近にあった可能性が高い。磁器蓋物はSK23・SK36と接合した。遺構と遺物の年代観に開きがあり、陶器大鉢の優品や唐津系の皿・鉢等が多いことから収集されたものが含まれる可能性が考えられる。

#### 6) 大火灰焼き坑

調査された遺構のうち、性格のわかる遺構として最も数が多い。

##### ① SK01(挿図5)

【検出位置】 AH38 【規模】 210×-×80cm 【形態】 不整形 【主軸】 N40°E 【重複】 SK04を切る 【調査所見】 埋土に多量の焼土・炭や10~20cm程度の礫が入り、大火灰焼き坑である 【出土遺物】 磁器…小碗・中碗・極小皿・小皿・五寸皿・中皿・中鉢・大鉢・段重?・小瓶・大瓶・徳利・中碗蓋・蓋・青磁中碗・香炉・陶器…小碗・中碗・小皿・中皿・灯明皿・中鉢・大鉢・擂鉢・練鉢・捏鉢・植木鉢・火鉢・中壺・中壺・小瓶・中水注・急須・土瓶・土鍋・灯明受皿・土瓶蓋・土器…焜炉・七匣・炬燵炉・金属製品…平頭釘 【時期】 埋土の性状から飯田大火時のものである。遺物は磁器筒形碗・くらわんか碗・菊散らし文/五弁花小皿や陶器五郎八茶碗といった18世紀代のもの、磁器端反小碗や陶器捏鉢・植木鉢・急須等19世紀以降のものがある。

##### ② SK03(挿図5)

【検出位置】 AI39 【規模】 46×40×-cm 【形態】 不整形 【主軸】 N7°W 【重複】 SK04を切る 【調査所見】 6トレンチ端で確認され、一部を調査したのみである。焼土が多量に入り、大火灰焼き坑である 【出土遺物】 陶器…盃洗・乗燭 【時期】 埋土の性状からの飯田大火時のものと考えられる。陶器盃洗は19世紀以降の年代観が与えられる。

##### ③ SK10(挿図6)

【検出位置】 AH43 【規模】 200×190×83cm 【形態】 不整形 【主軸】 N68°W 【重複】 SK07・SK26を切る 【調査所見】 焼土・炭が多量に含まれ、灰焼き坑と考えられる。底部付近で動物遺存体が集中出土しており、当初は鹿苑投棄坑として掘り込まれたことが考えられる。側壁は下部が裏に掘り込まれ、袋状となっている 【出土遺物】 磁器…小碗・中碗・仏飯器・小皿・五寸皿・中鉢・猪口・盃洗・小瓶・中碗蓋・青磁仏花瓶・陶器…小碗・中碗・中皿・大皿・小鉢・大鉢・捏鉢・植木鉢・灰吹・火入・中壺?・中壺・瓶・燐徳利・花生・土瓶・土鍋・灯明受皿・炻器…碗・擂鉢・花生?・土器…火鉢・七匣・炬燵炉・腰板・瓦類…軒桟瓦・棟瓦・熨斗瓦・石製品…茶臼・搗き臼・動物遺存体…イタヤガイ・ハマグリ 【時期】 埋土の状況から飯田大火時のものである。17世紀代まで遡る陶器仏飯器や18

世紀代と考えられる遺物、それに瀬戸系の磁器、端反形の磁器小碗や捏鉢。土鍋といった19世紀代の遺物が多く含まれる　【備考】海鼠壁の腰板や寸莎入り壁土が出土していることから、この付近に土蔵があったことが考えられる。

#### ④SK16（挿図10）

【検出位置】AH45　【規模】-×268×126cm　【形態】不整形　【主軸】N50°W　【重複】SK42を切る。SK46と重複する　【調査所見】検出の際には長楕円状の造構と把握したが、底面でみると北西側が一段深く掘りくぼむ。埋土は北西側と南西側とで差がなく、プランにも歪みがないことから、1つの造構と考えてよいと考えられる。炭・焼土が多量に含まれ、灰搔き坑である　【出土遺物】磁器…小壺。小碗。中碗。薄手酒杯。仏飯器。極小皿。小皿。五寸皿。小鉢。猪口。蓋物。小瓶。水滴。碗類蓋。合子蓋。蓋物蓋。壺蓋。青磁中碗。大碗？。中鉢。水盤。陶器…小壺。中碗。仏飯器。極小皿。小皿。中皿。大皿。灯明皿。小鉢。中鉢。合子。擂鉢。練鉢。捏鉢。蓋？。植木鉢。香炉。火入。火鉢。小壺。小甕。大甕。小瓶。大瓶。髪油壺？。燭台。仏花瓶。花生。中水注。土鍋。灯明受皿。合子蓋。中壺蓋。土瓶蓋。中水注蓋。蓋。炻器…擂鉢。大甕。土器…小皿。灯明皿。火鉢。焜炉。七厘。壺。炬燵炉。腰板。瓦類…丸瓦。金属製品…平頭釘。丸釘。鑓？。不明鉄製品。煙管雁首。煙管吸口。不明銅製品。寛永通宝（新寛永？）。不明銅錢。二銭銅貨。木製品…算盤玉。石製品…火打石。中砥石。仕上砥石　【時期】丸釘。二銭銅貨の出土や、埋土の状況から飯田大火時のものである　【備考】縄文中期土器片が混入出土している。

#### ⑤SK18（挿図10）

【検出位置】AM40　【規模】-×206×33cm　【形態】-　【主軸】N63°W　【重複】SK53、SK21を切る　【調査所見】埋土に炭・焼土が多量に含まれ、灰搔き坑である　【出土遺物】磁器…中碗。小皿。中皿。陶器…小碗。中碗。小皿。中皿。擂鉢。練鉢。捏鉢。壺？。甕。花生。土瓶。合子蓋。土器…植木鉢。炬燵炉。瓦類…丸瓦。金属製品…不明銅錢。石製品…硯。その他…漆喰片　【時期・性格等】埋土の状況や、SK22と接合関係が多いことから飯田大火時の灰搔き坑である。磁器墨弾きの小皿等17世紀に遡る可能性のものもあるが、陶器捏鉢等19世紀以降のものが多い。

#### ⑥SK20（挿図13）

【検出位置】AO40　【規模】174×-×-cm　【形態】-　【主軸】N63°W　【重複】SK38を切る　【調査所見】炭・焼土が多量に含まれ、灰搔き坑である。断面観察の結果、本址の上にロームが被せられ、内部には50~80cm大の礫が投げ込まれる。約1/2が区外にかかっており礫を取り外すことが困難であり、底面まで掘り下げられなかった　【出土遺物】磁器…中碗。陶器…捏鉢。中壺。中甕。小瓶。土瓶。金属製品…銅環　【時期】埋土の性状から飯田大火時のものである。磁器二重網目文の中碗等18世紀以降の遺物がある。

#### ⑦ S K22 (挿図14)

【検出位置】 A K38 【規模】 300×264×148cm 【形態】 不整形 【主軸】 N 0° E 【重複】 S K39を切る 【調査所見】 上部は炭・焼土が多量に含まれ、下部は礫が多く投げ込まれていた。底面は平坦でなく、おおむね中央に向かって段々に掘りくぼむ。埋土から大火灰焼き坑と考えられる 【出土遺物】 磁器…小壺・中碗（瀬戸系を含む）・極小皿・小皿・五寸皿・中皿・中鉢・大鉢・香炉・中瓶・蓋物蓋・陶器…小碗・中碗・小皿・大鉢・蓋物・擂鉢・練鉢・捏鉢・植木鉢・中壺・中甕・大瓶・中水注・水滴・土鍋・秉燭・合子蓋・土器…焼塩壺蓋・焼塩壺身・金属製品…平頭釘・不明銅製品・寛永通宝（古寛永・新寛永？）、石製品…硯 【時期】 検出状況や S K18と接合関係にあるものが多いことから飯田大火時のものと考えられる。遺物の中には磁器中皿（蛸唐草・五弁花・昆虫）や鉄絵灰釉の中碗・大瓶、焼塩壺等18世紀に遡る遺物、捏鉢等19世紀以降の遺物がある 【備考】 烧塩壺は18世紀前半の特徴を有し、生産から流通・消費・廃棄までの期間が他の焼物より短いとされることから、時代性に矛盾がある。

#### ⑧ S K23 (挿図9)

【検出位置】 A J46 【規模】 - × - × 79cm 【形態】 - 【主軸】 - 【重複】 S K14に切られる 【調査所見】 埋土中に炭・焼土が多量に含まれ、深さも検出面からかなりあるため、大火灰焼き坑と考えられる 【出土遺物】 磁器…小碗・中碗・小皿・中皿・猪口・中瓶・神酒徳利・蓋物蓋・青磁中皿・香炉・陶器…小碗・中碗・大碗・小皿・合子・擂鉢・練鉢・捏鉢・中壺・中甕・小瓶・大瓶・花生・灯明受皿・合子蓋・瓶類蓋・蓋・炻器…花生・土器…中壺・蓋・瓦類…残瓦・金属製品…平頭釘 【時期】 磁器広東形猪口・端反形中碗や捏鉢等19世紀代のものも若干あるが、磁器筒形香炉・「化年」銘・砂目高台・陶器口紅といった17世紀に遡る遺物、磁器波佐見系小碗・半筒形中碗・五弁花小皿・猪口等18世紀代と考えられる遺物が多い。19世紀代に設営された地下室 S K14に切られる灰焼き坑であることから、天明大火ないし寛政大火時のものと考えられる。

#### ⑨ S K27 (挿図8)

【検出位置】 A L36 【規模】 - × 140 × 50cm 【形態】 - 【主軸】 N 2° E 【重複】 S K28、S K47を切る 【調査所見】 埋土に炭・焼土を多量に含み、灰焼き坑である 【出土遺物】 磁器…中碗・小皿・中皿・陶器…中碗・小皿・鉢？・蓋物・合子・擂鉢・練鉢・水鉢・植木鉢・香炉・小壺・中壺・大甕・仏花瓶・土瓶・土器…焼塩壺身 【時期】 埋土の性状から、飯田大火時のものである。磁器半筒形中碗やくらわんか皿・練鉢・土瓶等18世紀以降のものがある 【備考】 S K22と同様、焼塩壺が出土しており、遺構の年代と遺物の年代観に矛盾がある。また、焼塩壺身のみの出土であり、S K22に蓋が多いことと合わせて特異といえる。

#### ⑩ S K34 (挿図12)

【検出位置】 AM36 【規模】 (250) × 246 × 94cm 【形態】 不整形 【主軸】 N 45° E 【重複】 S K19、S K35を切る 【調査所見】 埋土に多量の炭・焼土が入ることから、灰焼き坑である 【出土遺物】 磁器…中碗・薄手酒杯・陶器…小碗・中碗・仏飯器・小皿・中鉢・大鉢・擂鉢・香炉・小壺・中壺・

仏花瓶・壺、炻器…火鉢・中壺、土器…灯明皿、金属製品…煙管雁首、動物遺存体…鹿角（刀装具？）

【時期】埋土の性状から飯田大火時の造構である。17世紀に遡る陶器仏花瓶、18世紀代に位置づく陶器五郎八茶碗・腰張形碗・擂鉢、19世紀代の磁器薄手酒杯や陶器中碗（半筒形・端反形）がある。

#### ① S K42（挿図16）

【検出位置】A G15 【規模】190×(180)×106cm 【形態】おおむね円形を呈すると考えられる  
【主軸】N39° E 【重複】SK46を切り、SK07・SK16に切られる 【調査所見】上端は重複造構のため把握できない部分が多いが、底面はSK07・SK16より深く、これを基に形態を把握した。逆台形状に掘りくぼむ。炭・焼土が多量に入ることから灰焼き坑と考えられる 【出土遺物】磁器…小碗。中碗。小皿・中皿。陶器…小碗・中碗・小皿・中皿・小鉢・中鉢。大鉢・段重・擂鉢・蓋、炻器…火鉢、土器…灯明皿、金属製品…平頭釘・煙管雁首・煙管吸口・寛永通宝（古寛永） 【時期】古九谷様式、陶器半球形中碗や鉄絵大鉢等17・18世紀に遡る遺物があるが、磁器端反形小碗。陶器段重からは18世紀末以降が考えられる。19世紀以降と考えられるSK07に切られ、SK46を切ることから寛政大火時の灰焼き坑と考えられる。

#### ② S K47（挿図16）

【検出位置】A K37 【規模】-×125×-cm 【形態】長楕円形 【主軸】N63° W 【重複】SK27に切られる 【調査所見】調査範囲では一部検出したのみで、また、底面まで達しておらず、掘り上げていない。埋土には炭・焼土が多く入り、大火灰焼き坑と考えられる 【出土遺物】磁器…中碗。小皿、陶器…中碗・小鉢・石製品…仕上砥石 【時期】磁器小皿が銅版転写されることから明治以降と考えられ、また、飯田大火の灰焼き坑SK27に切られる。おそらく大正大火時のものと考えられる。

#### ③ S K48（挿図14）

【検出位置】A K41 【規模】145×-×50cm 【形態】- 【主軸】N5° E 【重複】- 【調査所見】埋土に炭・焼土が多量に含まれる。側壁が焼け締まっていることから、大火前に設営され、大火後に灰焼き坑に転用されたと考えられる。建物基礎にかかり規模等不明であるものの、炭・焼土の量から火を焚くための坑とは考え難い 【出土遺物】磁器…小皿・青磁中碗、陶器…中碗・小皿・中皿・大鉢・擂鉢、金属製品…不明鉄製品 【時期】埋土の性状から飯田大火の前後のものと考えられる。

#### ④ S K49（挿図14）

【検出位置】AN35 【規模】127×-×48cm 【形態】- 【主軸】N52° W 【重複】SD09・SK24を切る 【調査所見】埋土に炭・焼土が多量に含まれ、壁土が混じる。大火灰焼き坑と考えられる。当初本址をSK24としたが、底面で礫を埋土に含む別造構が検出され、これが建物基礎を挟んだ位置にあるSK25と関連があると判断されたことから、本址をSK49に、下部の造構をSK24に変更した 【出土遺物】なし 【時期】埋土の性状から飯田大火時のものである。

### ◎SK53（挿図16）

【検出位置】AM39 【規模】 $- \times - \times 26\text{cm}$  【形態】—【主軸】—【重複】SK18・SK21・SK3  
2と重複するが、新旧関係は不明である 【調査所見】SK18とともに埋土に炭・焼土が多量に含まれることから、現地調査では一つの造構として一緒に掘り下げたが、プランが歪むことや底面が分かれることから別造構と区別することとした。埋土から灰焼き坑と考えられる 【出土遺物】なし 【時期】  
遺物がなく詳細時期は不明であるが、大正大火ないし飯田大火時のものと考えられる 【備考】整理作業時に造構名を付した。

### 7) その他

性格不明の造構を一括する。

#### ①SK02（挿図5）

【検出位置】AG37 【規模】 $174 \times 136 \times 70\text{cm}$  【形態】不整円形 【主軸】N32°E 【重複】SD11と重複するが、新旧関係は不明である 【調査所見】埋土は暗褐色土と暗褐色粘質土がブロック状に入る 【出土遺物】磁器…小壺・中碗・小皿・中皿・猪口・植木鉢・蓋物蓋・陶器…中碗・小皿・大鉢・擂鉢・中壺・花生・灯明受皿・土器…焼塩壺身 【時期】焼塩壺からは18世紀前半、陶器植木鉢から18世紀後半以降の年代が与えられることから、18世紀後半以降と考えられる。

#### ②SK04（挿図5）

【検出位置】AH39 【規模】 $- \times - \times 46\text{cm}$  【形態】—【主軸】—【重複】SK01・SK03に切られる 【調査所見】上部にロームが貼られていたが、SK01を調査中に壁面で確認された 【出土遺物】磁器…小鉢・中鉢・陶器…中碗・灯明皿・捏鉢？・植木鉢・中壺・中壺・大壺？・中瓶・大瓶、炻類…擂鉢 【時期】廃絶時期は飯田大火以前であり、設営時期は陶器植木鉢等から18世紀後半以降と考えられる。

#### ③SK06（挿図6）

【検出位置】AH43 【規模】 $124 \times - \times 22\text{cm}$  【形態】—【主軸】N68°W 【重複】SK26を切る 【調査所見】新旧関係は試掘時の検出作業による。SK10の調査に引き続きSK26を調査したため、本址のプランは一部しか把握できなかった 【出土遺物】なし 【時期】切り合いから19世紀以後と考えられるが、出土遺物がなく、詳細時期は不明である。

#### ④SK07（挿図7）

【検出位置】AG44 【規模】 $336 \times - \times 107\text{cm}$  【形態】不整形 【主軸】N59°W 【重複】SK42・SK08を切る 【調査所見】30~80cm超の大きな円礎・角礎が多く乱雑に投げ込まれている。石積み用材礎よりサイズが大きいものが多く、地下室の石積みを壊したものとは考え難い。また、掘り方の形状も地下室のそれとは異なり不整形のプランで、底面は平坦ではない。SK14・SK17の埋め立てられ方をみると、地下室の廃絶状況を示すとも考え難い。ただし検出位置は母屋と土蔵の中間にあた

り、江戸遺跡における地下室構築位置と類似する。以上地下室とは考え難い状況から、庭の用材を投棄した可能性も考えられる。試掘時に確認したところでは、本址の上部には白色で均質な細砂等がレンズ状に堆積していた。この細砂層は大きく3つに分かれ、上層と中層の間には部分的に厚さ5cmの大火層を挟んでおり、さらに上層は上下2層に細分可能である。中層と下層の細砂の間には炭・焼土が混じった暗褐色土が分布する。【出土遺物】磁器…小壺・小碗・中碗・大碗・仏飯器・小皿・五寸皿・皿・中鉢・猪口・小瓶・中瓶・仏花瓶・青磁碗・仏飯器・蓋類・陶器…小壺・中碗・小皿・中鉢・大鉢・盃洗・合子・片口・擂鉢・練鉢・捏鉢・盤盤・植木鉢・香炉・中甕・甕・中瓶・中水注・秉燭・中臺蓋・蓋・炻器・擂鉢・甕(常滑系)・土器…灯明皿・小臺・金属製品…不明銅製品・石製品…硯・仕上砥石・動物遺存体…アカニシ・ハマグリ 【時期】陶器大鉢は17世紀代、陶器擂鉢は18世紀代まで遡るが、陶器練鉢・植木鉢等から19世紀以降と考えられる。一方で、SK16出土遺物と同一セットと考えられる陶器中瓶(「べこかん」形)があるが、飯田大火まで時期は下らないと考えられる。

#### ⑤ SK08(挿図5)

【検出位置】A F44 【規模】146×-×89cm 【形態】- 【主軸】N52°W 【重複】SK07に切られる 【調査所見】新旧関係は試掘時のプラン確認による。20~30cm大の礫を含む 【出土遺物】磁器…中碗・小皿・陶器…皿・大鉢・擂鉢・土瓶 【時期】陶器大鉢は17世紀代であるが、磁器腰張形中碗から18世紀後半以降と考えられる。

#### ⑥ SK09(挿図7)

【検出位置】AM35 【規模】220×150×127cm 【形態】不整梢円形 【主軸】N30°W 【重複】SK44を切る 【調査所見】SK44と同様、試掘調査の際大部分を重機で削平している。埋土は疊混じりの砂で、洪水により埋まつたと考えられる 【出土遺物】陶器…小壺・小碗・擂鉢・中瓶?・土器…火鉢? 【時期】陶器五郎八茶碗からは18世紀以降の年代観が与えられ、19世紀以降に設営されたと考えられる。また、埋土の共通性からSK14・SK17と同時期に廃絶したものと考えられる。

#### ⑦ SK11(挿図5)

【検出位置】A J41 【規模】106×48×10cm 【形態】長方形 【主軸】N43°E 【重複】- 【調査所見】埋土に炭・焼土、寸莎入りの壁土が入る 【出土遺物】磁器…中碗 【時期】磁器腰張形中碗から18世紀以降と考えられる。

#### ⑧ SK12(挿図6)

【検出位置】A I41 【規模】-×-×18cm 【形態】- 【主軸】- 【重複】SK13に切られる 【調査所見】浅い皿状の落ち込みで、調査区外等に掛かるため性格等については把握できなかった 【出土遺物】磁器…小皿・陶器…片口 【時期】近世以降であるが、詳細時期不明である。

⑨ S K15 (挿図6)

【検出位置】 A J42 【規模】  $76 \times - \times 35$ cm 【形態】 - 【主軸】 N90° E 【重複】 - 【出土遺物】 磁器…中碗、陶器…擂鉢・蓋 【時期】 近世以降であるが、時期の分かる遺物はなく、詳細時期不明である。

⑩ S K19 (挿図12)

【検出位置】 AM36 【規模】  $170 \times 46 \times 25$ cm 【形態】 長楕円形 【主軸】 N45° E 【重複】 S K34を切る 【出土遺物】 なし 【時期】 飯田大火の灰焼き坑 S K34を切ることからごく近々の遺構である。

⑪ S K21 (挿図10)

【検出位置】 AM39 【規模】  $- \times 222 \times 30$ cm 【形態】 - 【主軸】 N61° W 【重複】 S K32を切り、S K18に切られる 【調査所見】 ロームブロックを多量に含み、一気に埋め戻されたと考えられる 【出土遺物】 磁器…極小皿、陶器…擂鉢、瓦類…棟瓦、金属製品…不明鉄製品、骨角製品…鹿角、石製品…砥石 【時期】 陶器擂鉢から19世紀後半以降と考えられ、飯田大火の灰焼き坑 S K18に切られることから、廃絶は飯田大火以前である 【備考】 繩文時代後期と思われる土器片が混入出土した。

⑫ S K24 (挿図14)

【検出位置】 A O36 【規模】  $- \times 135 \times 54$ cm 【形態】 - 【主軸】 N37° E 【重複】 S K49に切られる 【調査所見】 S K49底面で確認された。緩やかに掘りくぼみ、図示しなかったが S K25と同様20~40cm程度の縁が含まれる 【出土遺物】 磁器…中碗・小皿、陶器…中碗・小皿・小壺 【時期】 S K25の遺物から19世紀以降の設営と考えられ、廃絶時期は飯田大火以前である 【備考】 S K25と遺物の接合関係やセット関係があり、1つの遺構と考えられる。

⑬ S K25 (挿図14)

【検出位置】 A P36 【規模】  $- \times 147 \times 37$ cm 【形態】 - 【主軸】 N37° E 【重複】 S M01を切る 【出土遺物】 磁器…小碗・蓋、陶器…小壺・中碗・大碗・小皿・擂鉢・中瓶? 【時期】 設営時期は陶器端反形中碗から19世紀以降、また廃絶時期は S K24の重複関係から飯田大火以前と考えられる 【備考】 S K24と遺物の接合関係があり同一遺構と考えられる。土師器裏片が混入出土した。

⑭ S K26 (挿図6)

【検出位置】 AH43 【規模】  $280 \times 176 \times 82$ cm 【形態】 不整形 【主軸】 N81° E 【重複】 S K06・S K10に切られる 【調査所見】 試掘時に S K05と把握したものであり、その際平面で S K06に切られることが確認されている。S K10調査時にその底面でプランが確認され、最終的に S K05と一続きであることが判明して S K05を欠番とした 【出土遺物】 磁器…小碗・中碗・小皿・水滴、陶器…小碗・中碗・小皿・光明皿・中鉢・擂鉢・中瓶・土瓶・土鍋・光明受皿、石製品…火打石 【時期】 18世紀代と考えられる陶器鉄絵中碗や土瓶、19世紀以降と考えられる磁器端反形中碗・盤形小皿や土鍋等があり、

設営時期は19世紀以降、廃絶は飯田大火以前である。

⑯ S K28 (挿図10)

【検出位置】 A L35 【規模】 174×-×61cm 【形態】 長楕円形 [主軸] N53° W [重複] S K44・S K27に切られる [出土遺物] 磁器…中碗、陶器…中碗・擂鉢・蓋 [時期] 濱戸系と考えられる磁器から19世紀以降と考えられる。

⑰ S K30 (挿図8)

【検出位置】 A H44 【規模】 (126) ×116×49cm 【形態】 円形 [主軸] N76° E [重複] S K1に切られる [調査所見] 僅かに炭を含んでいたため、造構として把握したが、掘り込みは浅く規模も小さい。性格等不明である [出土遺物] 磁器…小鉢、陶器…小碗・中碗・小鉢 [時期] 切り合い関係から廃絶時期の下限は飯田大火であるが、詳細は不明である。S K44とセットないし同一個体と考えられる中国産磁器小鉢がある。

⑲ S K32 (挿図12)

【検出位置】 A M39 【規模】 250×208×51cm 【形態】 不整楕円形 [主軸] N20° E [重複] S K21に切られる [出土遺物] なし [時期] 重複関係や埋土の性状から近世以降と考えられるが、詳細は不明である [備考] 弥生土器壺片が混入出土した。

⑳ S K35 (挿図12)

【検出位置】 A M37 【規模】 -×-×48cm [形態] - [主軸] - [重複] S K34に切られる [調査所見] S K34を調査中にS K34側壁で確認した。底面が北側に向かって低くなる。[出土遺物] 磁器…中碗、陶器…碗・皿・擂鉢・炻器…甕、土器…灯明皿・石製品…粉挽き上臼・粉挽き下臼 [時期] 設営時期は濱戸系磁器から19世紀以降と考えられ、また廃絶時期は飯田大火以前であるが、詳細時期は不明である [備考] 内耳土器（中世後半～近世）が出土しているが、おそらく混入と考えられる。

㉑ S K36 (挿図13)

【検出位置】 A J44 【規模】 329×84×22cm 【形態】 長楕円形 [主軸] N30° E [重複] S D06、S K40を切る [出土遺物] 磁器…中碗・小皿・皿、陶器…小皿・捏鉢・瓦類…瓦片。道具瓦?、金属製品…丸釘 [時期] 18世紀代の磁器小皿、19世紀以降の濱戸系磁器や陶器捏鉢、明治10年代以降の丸釘が出土しているが、スレート片があることから、ごく近々のものである。

㉒ S K37 (挿図13)

【検出位置】 A O40 【規模】 102×-×54cm 【形態】 不整楕円形 [主軸] N58° W [重複] S K38に切られる [調査所見] 埋土に壁土が混入する [出土遺物] なし [時期] 出土遺物はなく詳細時期は不明であるが、S K38が19世紀以降と考えられることから、19世紀中には廃絶したと考えられる。

### ◎ S K38 (挿図13)

【検出位置】 A O40 【規模】  $128\times-\times31\text{cm}$  【形態】 - 【主軸】 N10° E 【重複】 S K37を切り、S K20に切られる 【出土遺物】 陶器…土鍋 【時期】 土鍋から19世紀以降と考えられる 【備考】 土師器と思われる破片が混入出土した。

### ◎ S K39 (挿図13)

【検出位置】 A K39 【規模】  $- \times 62 \times 12\text{cm}$  【形態】 - 【主軸】 - 【重複】 S K22に切られる  
【調査所見】 造構検出中に石製品が出土したため、把握された 【出土遺物】 石製品…舟形状石製品  
【時期】 飯田大火以前に設営・廃絶したことは疑いないが、石製品以外に出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

### ◎ S K40 (挿図15)

【検出位置】 A J44 【規模】  $93\times-\times34\text{cm}$  【形態】 円形を呈すると考えられる 【主軸】 N38° E  
【重複】 S K31・S K36に切られる 【出土遺物】 なし 【時期】 S K31に切られることから近世以降  
と考えられるが、詳細時期は不明である。

### ◎ S K41 (挿図14)

【検出位置】 A I44 【規模】  $75\times61\times15\text{cm}$  【形態】 不整形 【主軸】 N58° E 【重複】 - 【出土  
遺物】 なし 【時期】 近世以降の造構が集中する一画で調査されたことから近世以降と考えたが、詳細  
時期は不明である。

### ◎ S K43 (挿図17)

【検出位置】 A N41 【規模】  $- \times - \times 73\text{cm}$  【形態】 不整円形 【主軸】 - 【重複】 S D07を切り、  
S K50・S K51に切られる 【調査所見】 現地では S K50・S K51は命名せず調査したが、S K43セク  
ションの絡みで整理作業時に番号を付したため、造構番号の順と新旧関係に逆転が起きている。平面形  
は歪み、底面も平坦ではないことから、2造構の可能性も考えられたが、セクションを検討した結果1  
つの造構と判断した 【出土遺物】 なし 【時期】 出土遺物がなく詳細時期は不明であるが、II層が飯  
田大火層であることから、これより古いことは疑いない。

### ◎ S K44 (挿図7)

【検出位置】 A M34 【規模】  $- \times - \times 102\text{cm}$  【形態】 - 【主軸】 - 【重複】 S K28を切り、S K0  
9に切られる 【調査所見】 試掘調査時にトレント掘削開始部分であったため、一部重機による掘削が及  
んでいる。埋土は北側から埋め立てられている。性格等不明である 【出土遺物】 磁器…小壺・中碗。  
小皿・小鉢・陶器…中碗・小皿・中皿・小鉢・擂鉢・炻器…不明、土器…七匣？ 【時期】 磁器型絵描  
の小皿から17世紀後半以降と考えられる。

#### ◎S K45（挿図16）

【検出位置】 A J 39 【規模】  $194 \times - \times 92\text{cm}$  【形態】 - 【主軸】 N $59^{\circ}$  W 【重複】 - 【出土遺物】 磁器…小壺・小碗・中碗・仏飯器・うがい茶碗・小皿・小鉢・猪口・中碗蓋・青磁中碗・鉢?・陶器…小碗・中碗・小皿・中皿・中鉢・擂鉢・餌擂鉢・練鉢・小壺・壺?・仏花瓶・小水注・秉燭・灯明受皿・土瓶蓋・蓋・土器…焼塙壺・壺?・焜炉・瓦類…残瓦 【時期】 18世紀前半まで遡る磁器中碗蓋（五弁花）・仏飯器（蛸唐草）・秉燭の他、18世紀後半以降の練鉢・土瓶・餌擂鉢等があり、18世紀後半以降と考えられる 【備考】 底面まで掘り下げていない。

#### ◎S K46（挿図16）

【検出位置】 AG 45 【規模】  $- \times - \times 20\text{cm}$  【形態】 - 【主軸】 - 【重複】 S K16・S K21・S K42に切られる 【調査所見】 S K42側壁で焼けた面が把握され、平面で慎重に検出を繰り返した結果、地山と僅かに性状の異なる黄色土が確認された。この壁土状の薄い層を掘り下げたところ、よく焼き締まり平坦な焼上面が現れ、さらに掘り下げる下部に小柱穴が確認された。検出面から底面まで浅く、他遺構との重複や調査区外に延びるため性格等は不明である 【出土遺物】 なし 【時期】 切り合い関係から天明大火時に廃絶したと考えられる。

#### ◎S K50（挿図17）

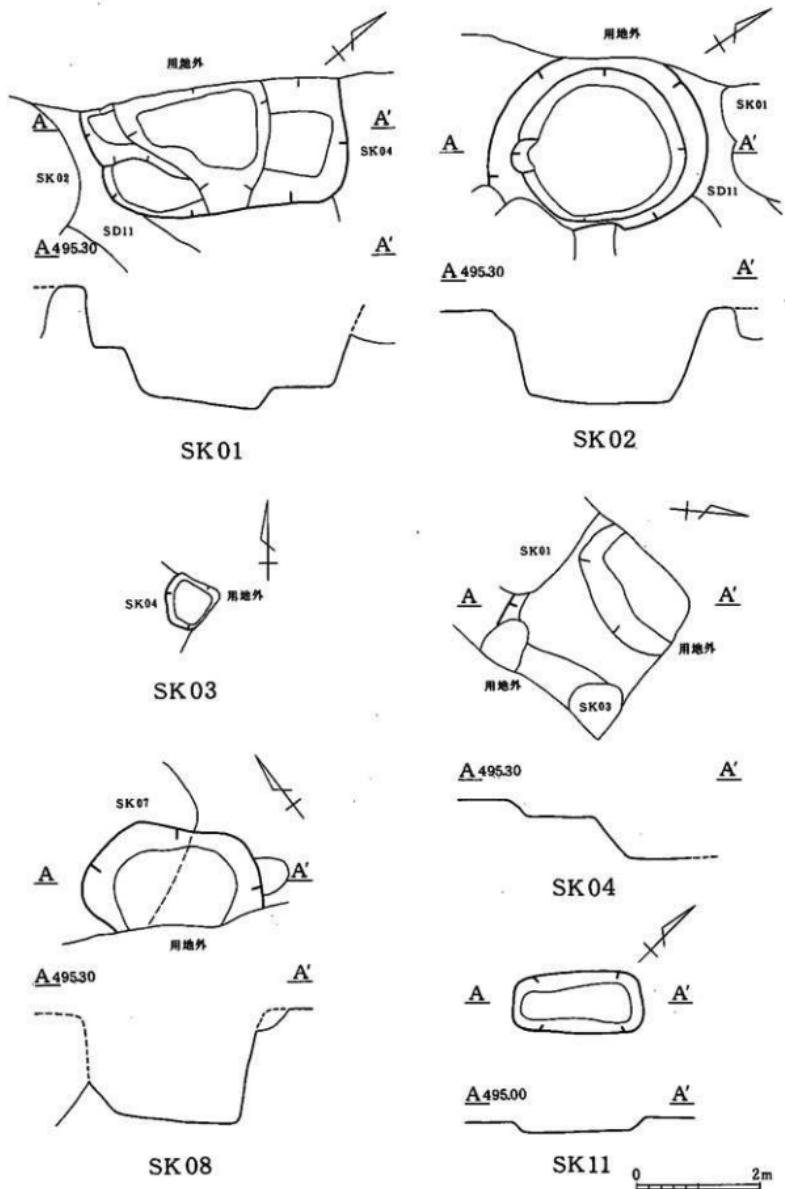
【検出位置】 A N 41 【規模】  $- \times - \times 40\text{cm}$  【形態】 - 【主軸】 - 【重複】 S K51・S K43・S D 07を切る 【調査所見】 検出時にはS K51は把握されなかったが、底面でプランを確認したため、新旧関係判断の根拠とした 【出土遺物】 なし 【時期】 飯田大火以前であるが、詳細時期は不明である 【備考】 整理作業時に遺構名を付した。

#### ◎S K51（挿図17）

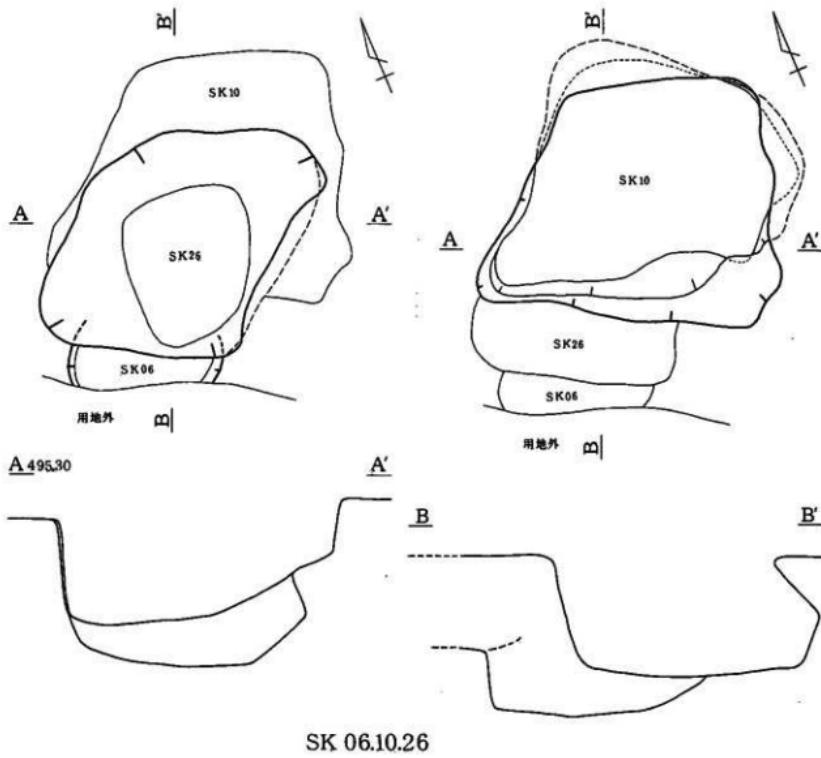
【検出位置】 A N 41 【規模】  $116 \times 40 \times 20\text{cm}$  【形態】 不整橢円形 【主軸】 N $24^{\circ}$  E 【重複】 S K43を切り、S K50に切られる 【調査所見】 通りに直交する方向に長軸が沿っていることから、屋敷割に関連するものである可能性がある 【出土遺物】 なし 【時期】 飯田大火以前であるが、詳細時期は不明である 【備考】 整理作業時に遺構名を付した。

#### ◎S D05（挿図17）

【検出位置】 A I 43 【規模】  $(106) \times 34 \times 27\text{cm}$  【形態】 直線状 【主軸】 N $40^{\circ}$  E 【重複】 - 【調査所見】 S D06と形態・規模が類似し、近接することから一体的に機能したと考えられる。また、通りと直交方向とほぼ並行する位置にあることから、S K51等と同様屋敷割に関連する可能性がある 【出土遺物】 磁器…蓋物・陶器…小皿・擂鉢 【時期】 近世

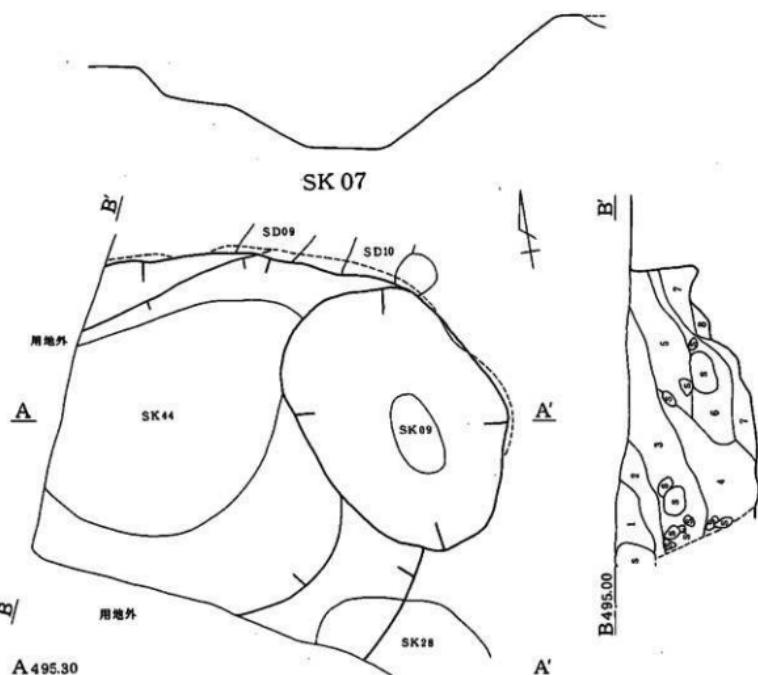
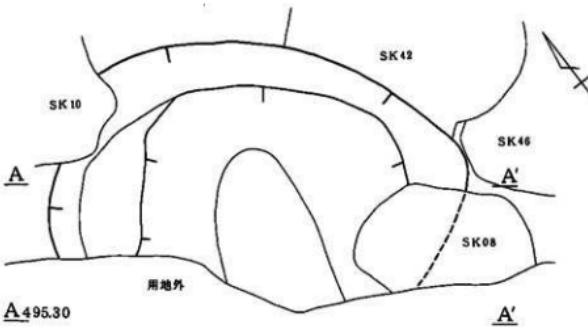


插図5 SK01～SK04, SK08, SK11



插図6 SK06・SK10・SK26, SK12, SK15





0 2m

插図7 SK07, SK09・SK44

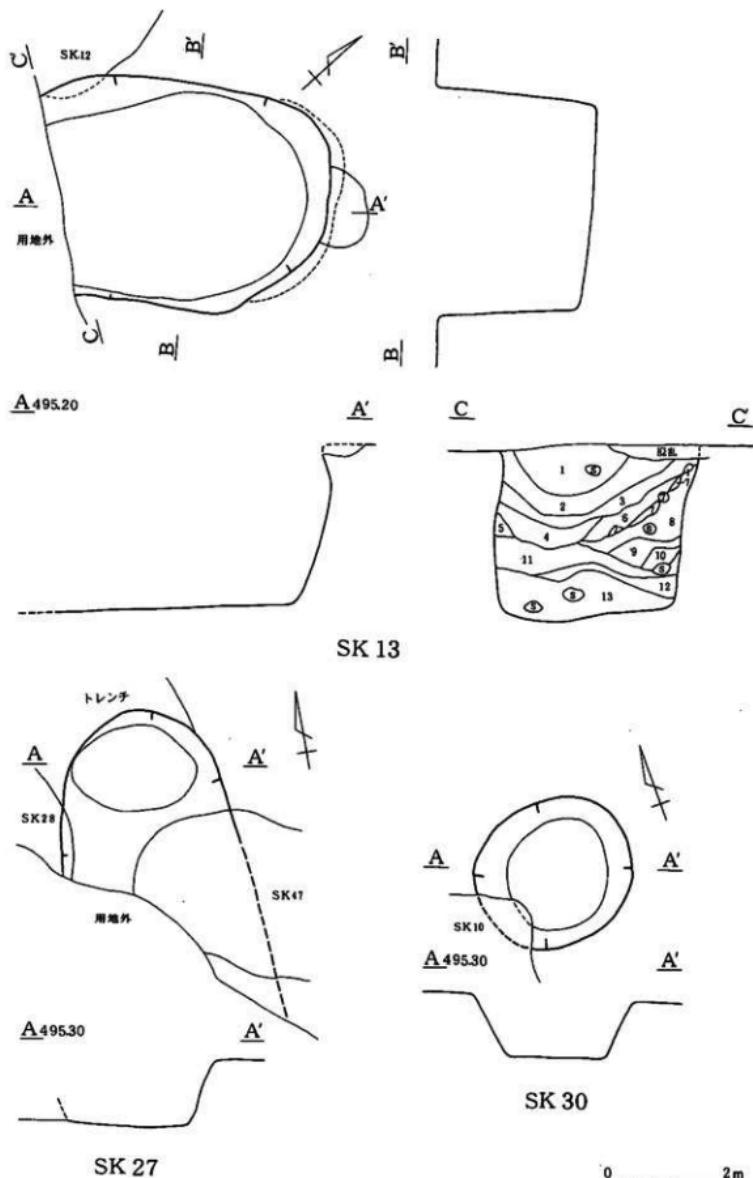
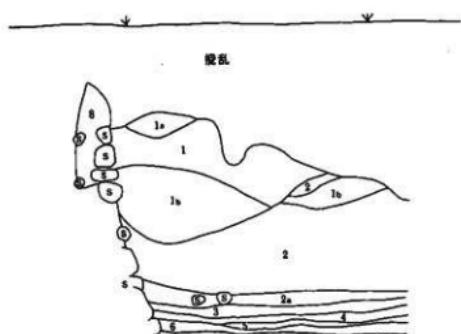


図8 SK13, SK27, SK30

A49630

A'



A

D

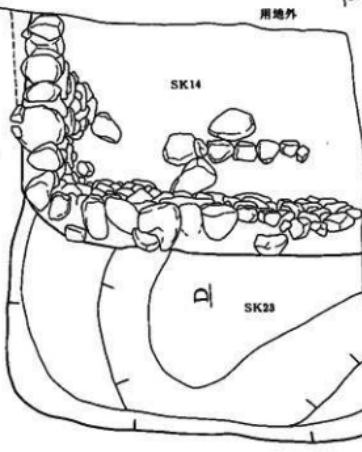
B

A'

用地外

SK14

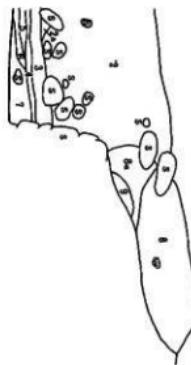
C



C

E

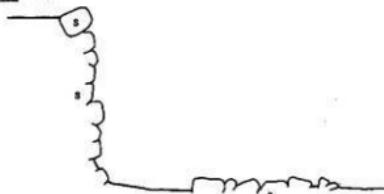
C



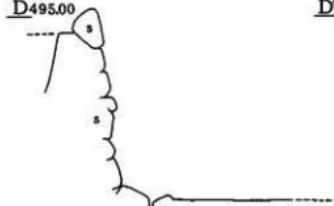
B49610

D

C495.00

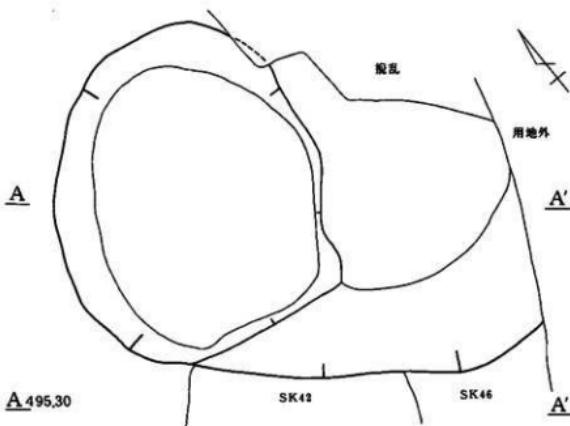


D495.00

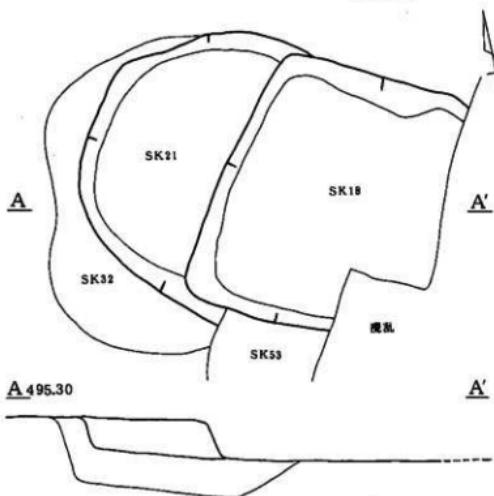


0 2m

SK14.23  
插圖9 SK14・SK23



SK 16



SK 18.21



0 2m

插図10 SK 16, SK 18・SK21, SK28

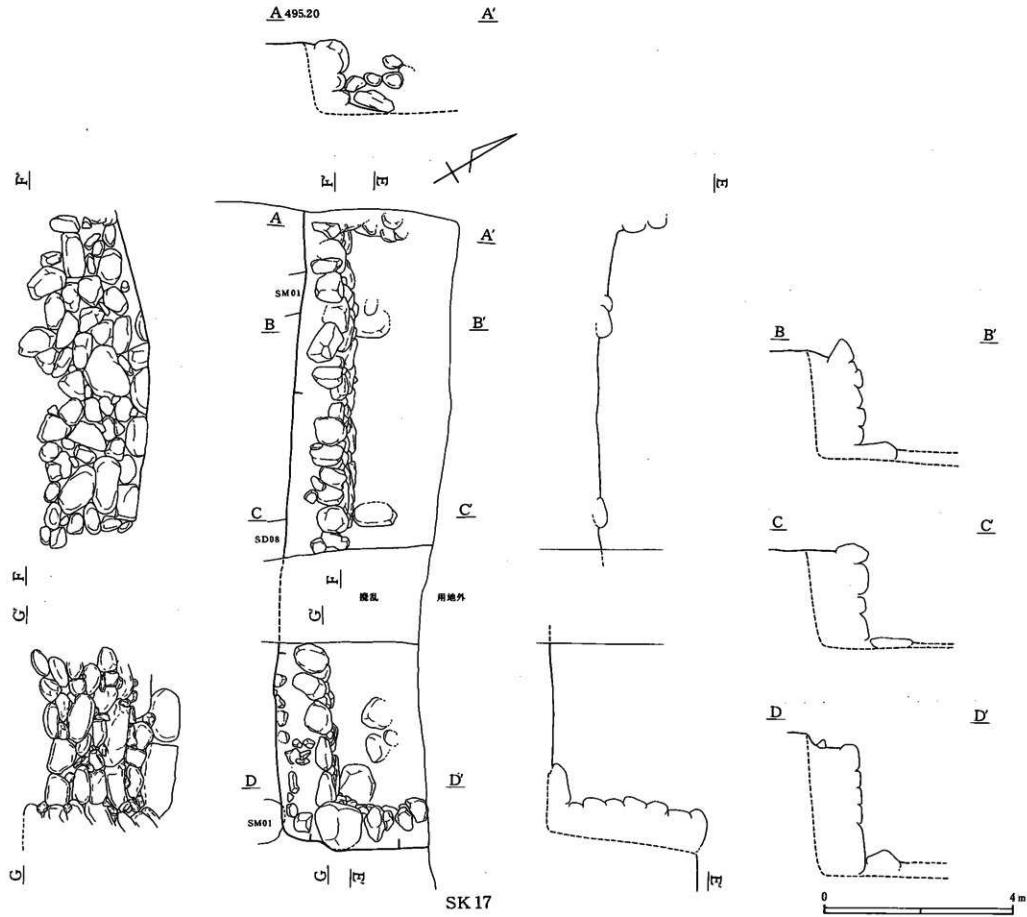
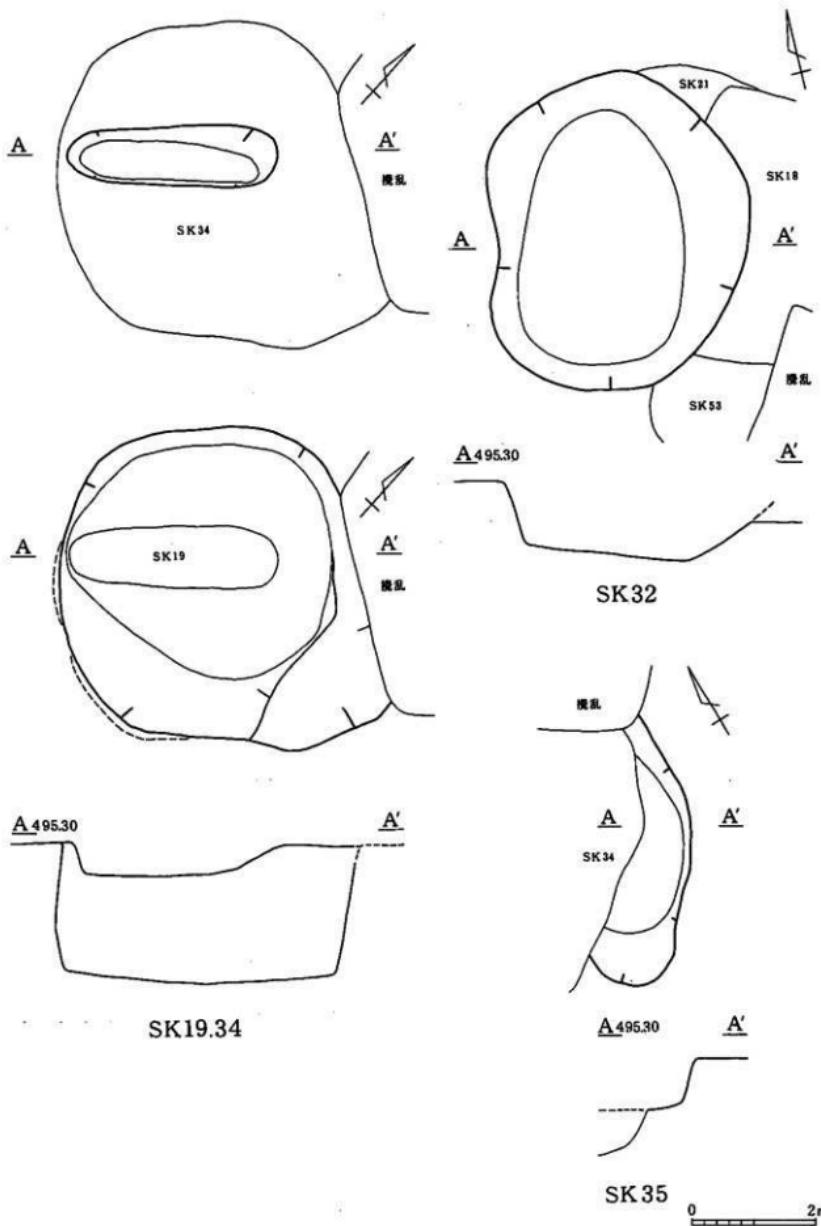
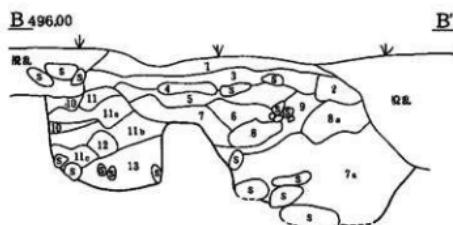
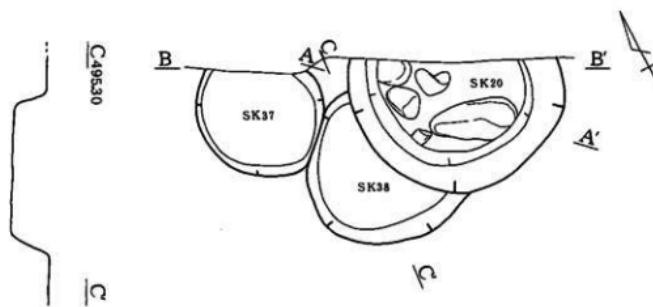


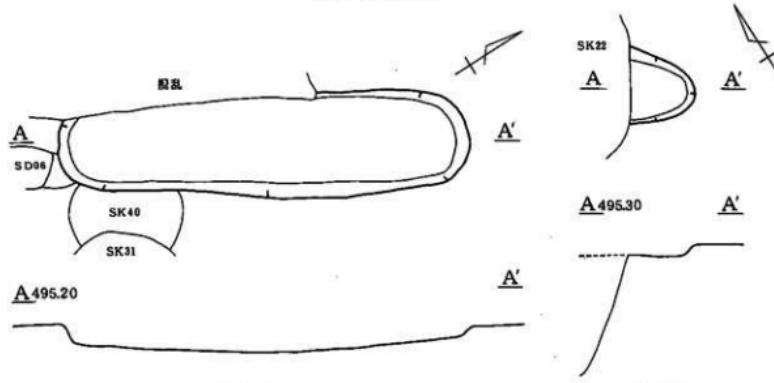
插圖11 SK17



插図12 SK19・SK34, SK32, SK35



SK 20.37.38



插図13 SK20・SK37・SK38, SK36, SK39

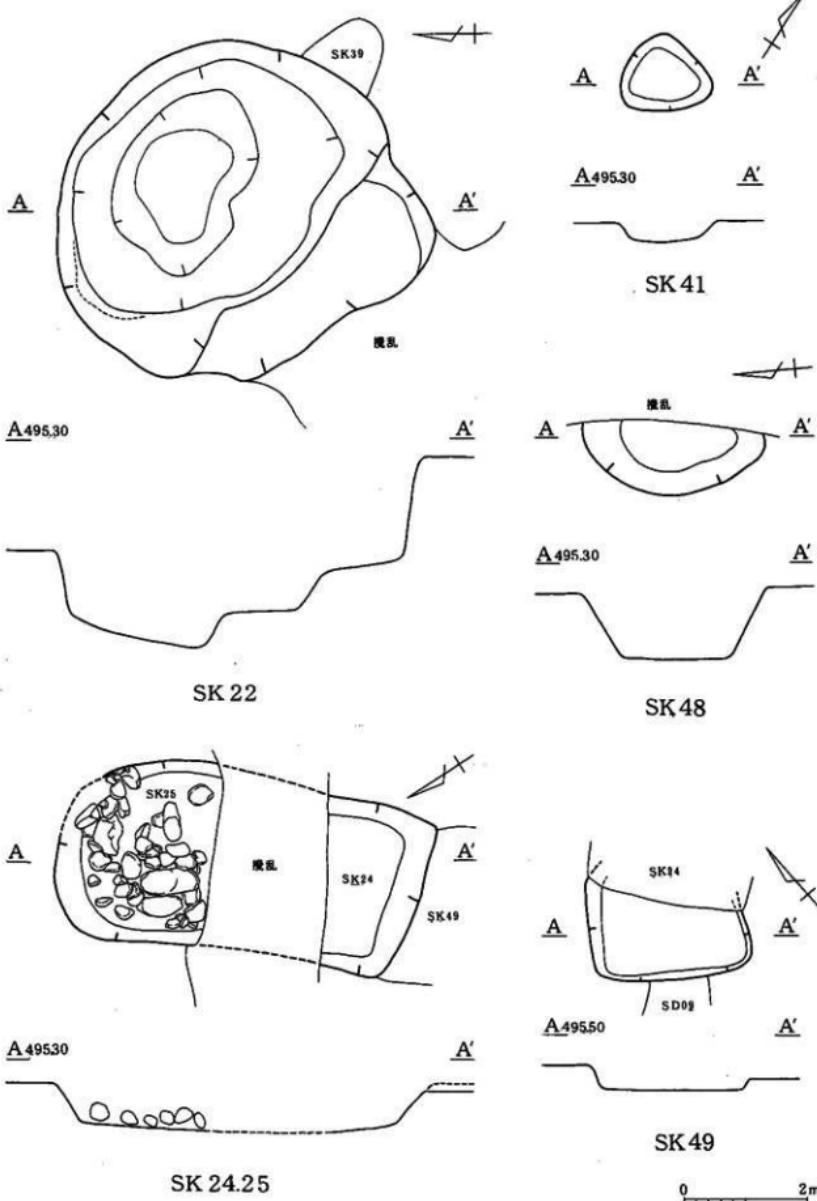
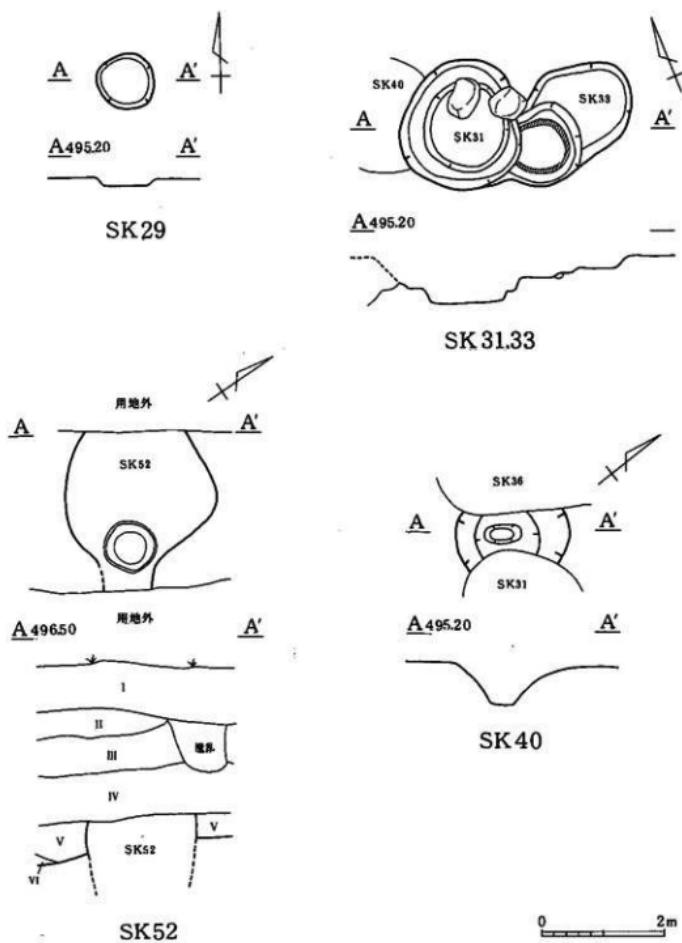


插圖14 SK22, SK24+SK25, SK41, SK48, SK49



挿図15 SK29, SK31・SK33, SK40, SK52

② S D06 (挿図17)

【検出位置】 A I 44 【規模】 (150) × 40 × 37cm [形態] 直線状 [主軸] N35° E [重複] S K36  
に切られる [出土遺物] 磁器…不明、陶器…不明、土器…焜炉?、金属製品…模?・丸釘 [時期]  
丸釘から明治10年代以降と考えられる。

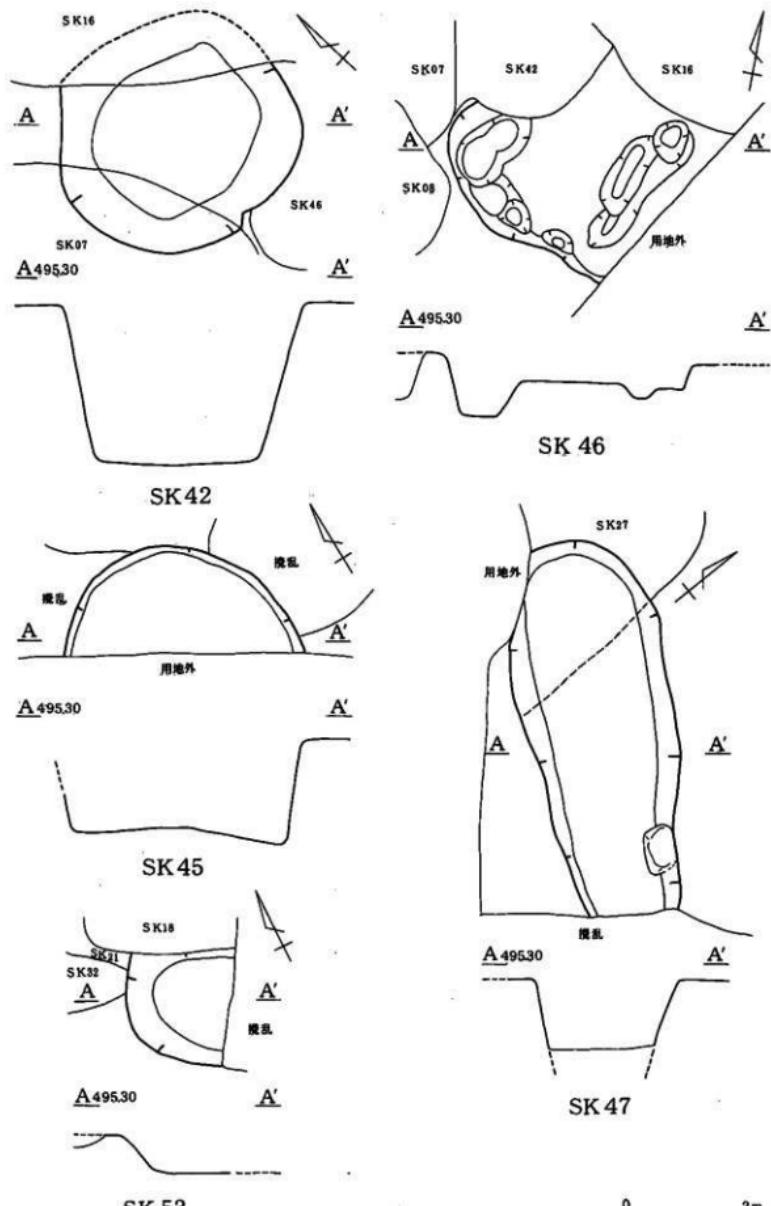
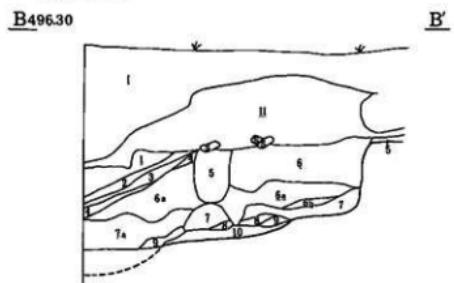
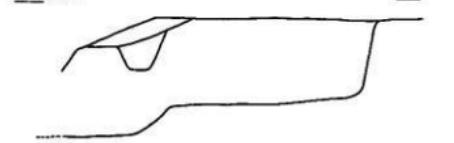
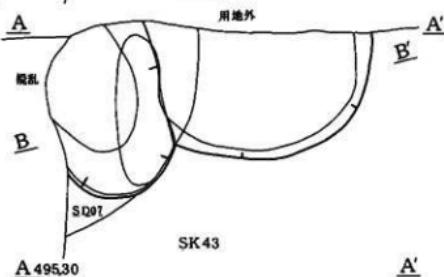
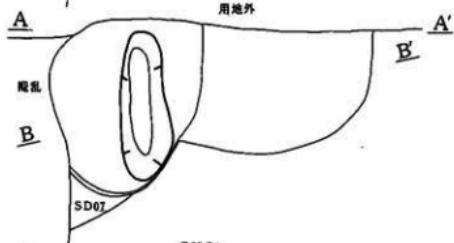
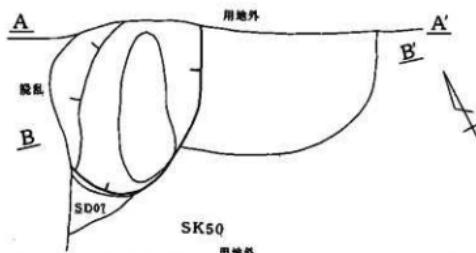
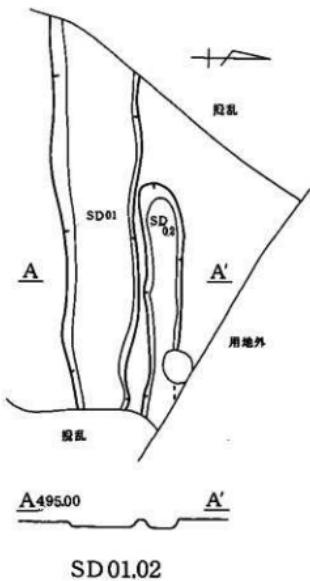


図16 SK42, SK45, SK46, SK47, SK53

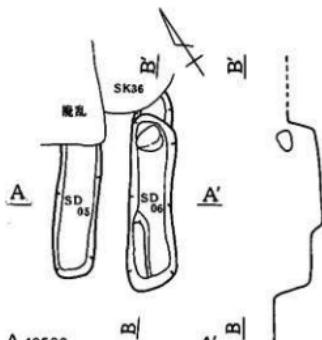
0 2m



SK 43.50.51



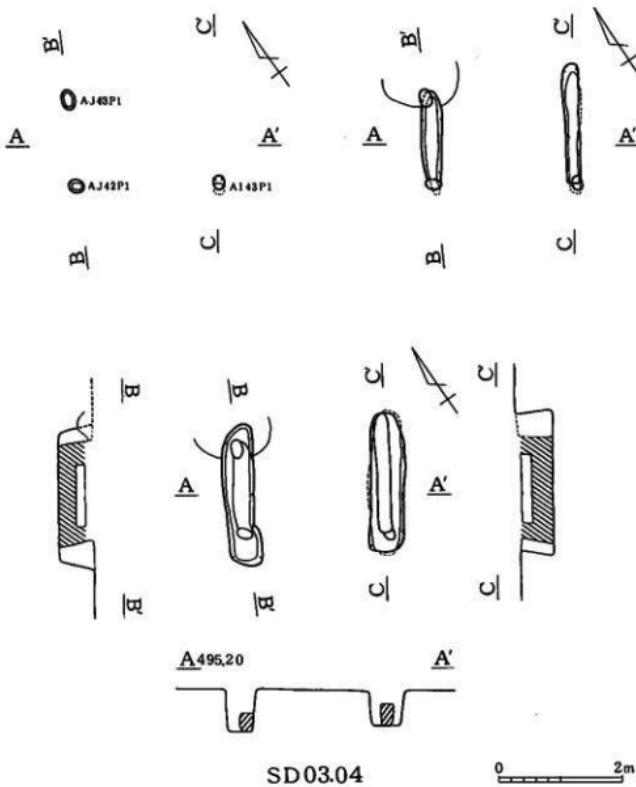
SD 01, 02



SD 05, 06

0 2m

插圖17 SK43・50・51, SD01, SD02, SD05・SD06



插図 18 SD03・SD04, AJ43P1・AJ42P1・AJ43P1

◎ S D09 (挿図19)

【検出位置】AN35 【規模】(148) × 60 × 20cm 【形態】直線状 【主軸】N42° E 【重複】SK44、SK49に切られる 【調査所見】検出面では把握できなかったが、SK44側壁で確認され、調査した。埋土の性状がSD10と同じで、近接し並行することから密接な関連を有すると考えられる 【出土遺物】磁器…小碗、陶器…中碗、瓦類…平瓦 【時期】近世以降 【備考】縄文土器片が混入出土した。

◎ S D10 (挿図19)

【検出位置】AN36 【規模】(185) × 40 × 8cm 【形態】直線状 【主軸】N36° E 【重複】SK09、SK44に切られる 【調査所見】SD09と同様の検出状況である 【出土遺物】なし

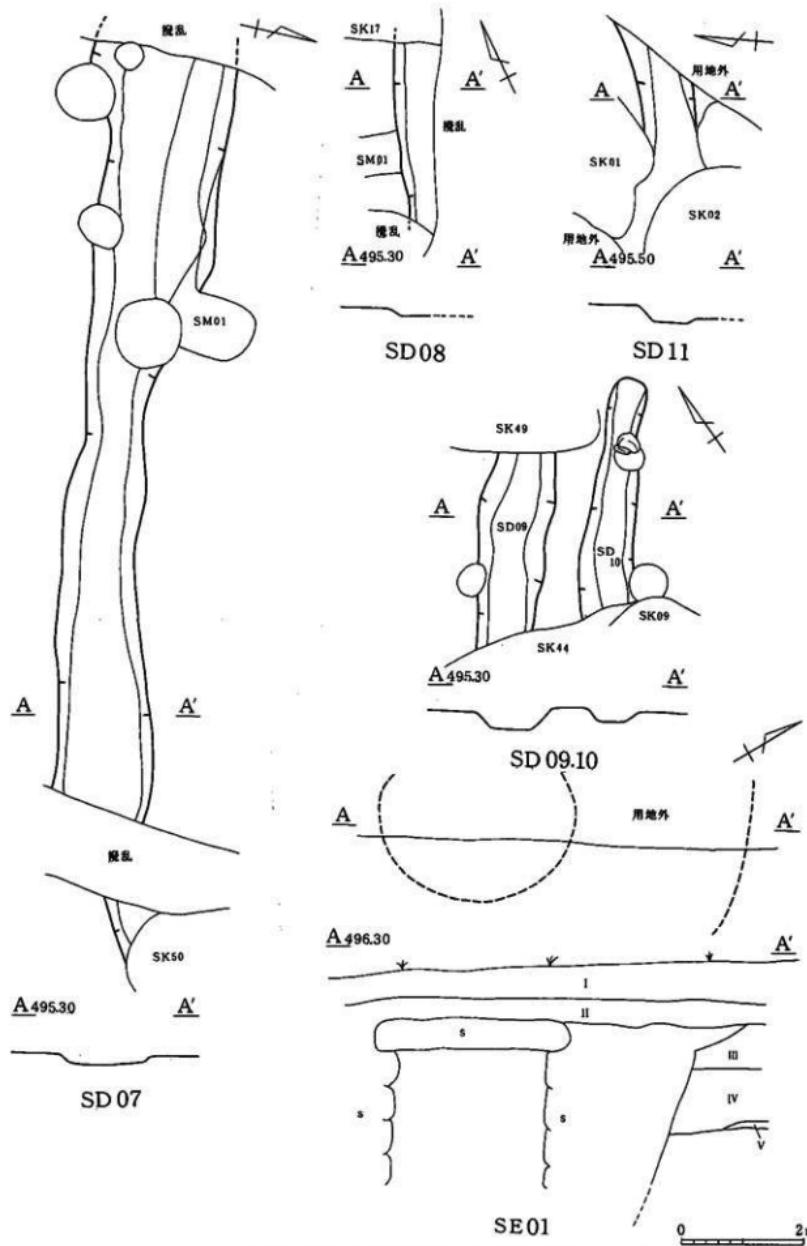
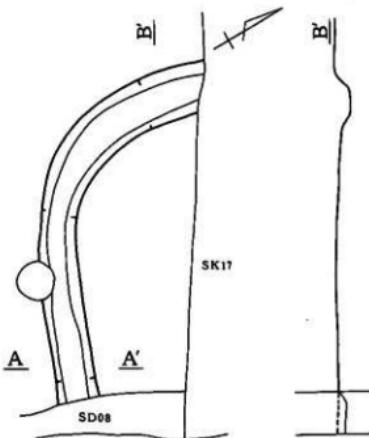


插图19 SD07, SD08, SD09·10, SD11, SE01

【時期】出土遺物はなく、詳細時期は不明であるが、SD09と同じく近世以降に位置づく。

◎SD11(挿図19)

【検出位置】AG38 [規模] - × 44  
× 13cm [形態] - [主軸] -  
[重複] SK01に切られる。SK02と重複するが、新旧関係は不明である  
[調査所見] SK02と同様の埋土である  
[出土遺物]なし [時期] 埋土がSK02と同様であることから、近世以降と考えられる。



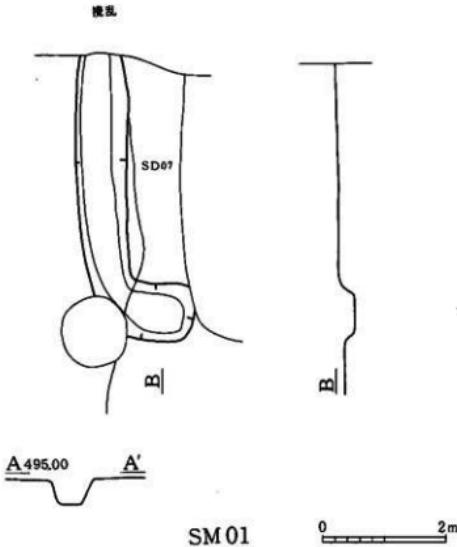
## 2. その他の時代

### (1) 弥生時代

#### 1) 方形周溝墓

①SM01(挿図20)

【検出位置】AO38 [規模] 周溝外法で(610) × - cm、内法で(510) × - cm [形態] 方形を呈し、周溝は南東隅が切れていることから、この部分が土橋と考えられる [周溝] 幅42cm、深さ20cm、断面逆台形を呈する [主軸] N 60° W [重複] SK17・SD07・SD08に切られる [調査所見] 城下町形成時に削平されたと考えられ、周溝の底部が遺存するのみである。 [出土遺物] なし [時期] SK17に弥生時代後期の甕小片が混入出土することから、弥生時代後期と考えられる。



挿図20 SM01

## (2) 平安時代

### ① S D01 (挿図17)

【検出位置】 A L43 【規模】 (302) × 74 × 8 cm 【形態】 直線状 【主軸】 N87° E 【重複】 -  
【調査所見】 底面に水の流れた痕跡はみられない 【出土遺物】 土師器甕片、灰釉陶器碗 【時期】 平  
安時代後期

### ② S D02 (挿図17)

【検出位置】 A M43 【規模】 (198) × 30 × 8 cm 【形態】 直線状 【主軸】 N87° E 【重複】 -  
【調査所見】 埋土が S D01と類似することや、近接して並行する方向にあることから一体的に機能した  
と考えられる 【出土遺物】 なし 【時期】 出土遺物がなく詳細時期不明であるが、上記の所見から平  
安時代後期の遺構と考えられる。

## (3) その他

### ③ S D07 (挿図19)

【検出位置】 A N39 【規模】 (600) × 77 × 18 cm 【形態】 直線状 【主軸】 N64° W 【重複】 S M01を  
切り、S K43・S K50・S K51に切られる 【調査所見】 底面に細かい砂があり、水が流れたと考えら  
れる。S K25付近では本址が確認できておらず、あるいは S D08と連続する可能性もある 【出土遺物】  
なし 【時期】 不明

### ④ S D08 (挿図19)

【検出位置】 A P37 【規模】 (150) × - × 8 cm 【形態】 直線状 【主軸】 N25° E 【重複】 S M01を  
切り、S K17に切られる 【調査所見】 【出土遺物】 なし 【時期】 不明

### ⑤ 小柱穴 (挿図21)

試掘 6 トレンチ付近で検出された小柱穴は遺物出土がないが、形状や埋土から中世以降のものと考え  
られる。建物等を構成すると考えられるが、組み合うものがなく、詳細は不明である。

## 第4節 出土遺物

S K01・S K07・S K10・S K16・S K17・S K22・S K23・S K26・S K27・S K34・S K45等か  
らの遺物出土が多い。

### 1. 近世・近代

#### (1) 磁器

図示したものは少ないが、碗類小碗・中碗、皿類小皿を中心に相当量出土している。肥前系磁器が大  
半を占めており、特に断りのないものは肥前系である。

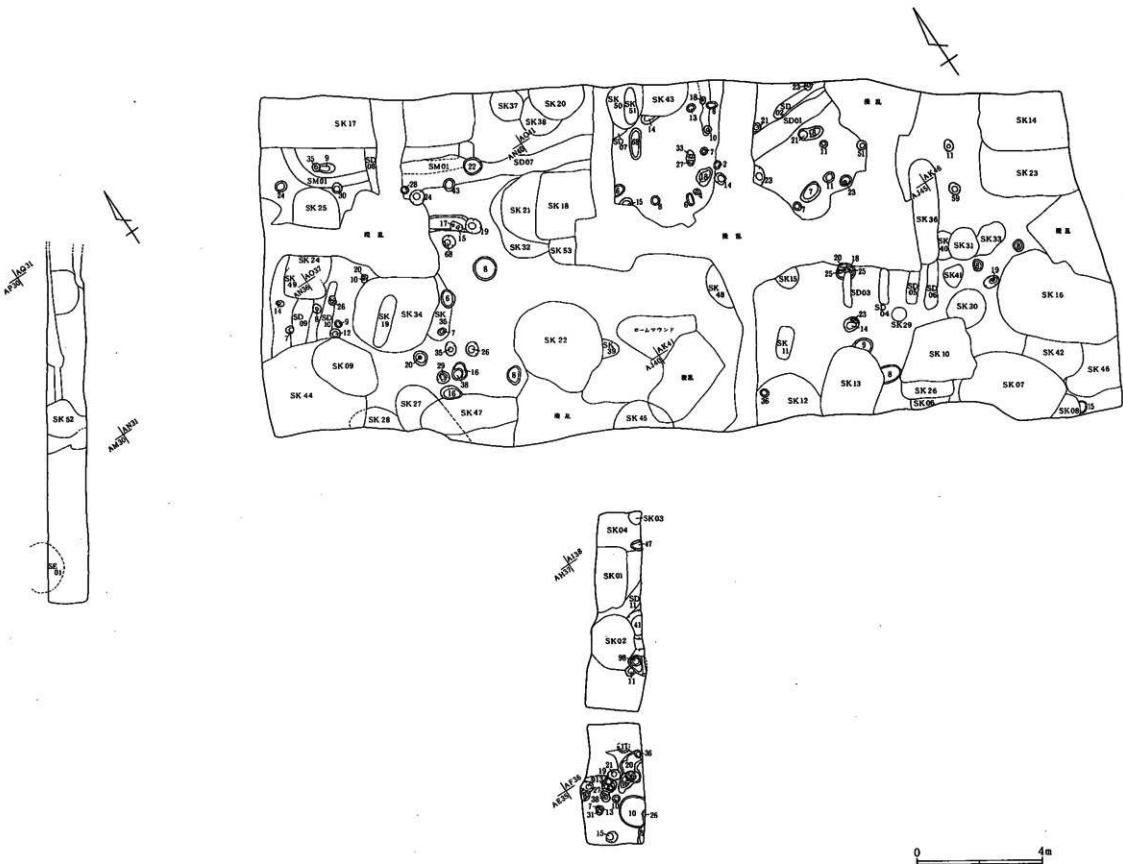


插圖21 周邊柱穴平面圖

### 1) 碗類

#### ①小坏

用途は酒坏・煎茶碗・紅猪口・鉄漿坏等とされる。図示できる遺物はないが、SK02から「月」の字が書かれた染付、SK16から色絵の施された小坏、SK22から丸形で文字や梅花文の小坏が出土している。SK33の小坏は17世紀代の初期伊万里のもので、高台内に釉薬が掛かる。他に、SK07・SK17・SK44・SK45からの出土があり、丸形（SK07・SK44）、端反形（SK17）といった器形がある。

#### ②小碗

湯呑み碗・煎茶碗とされ、端反形・半筒形が多い。1は口径／器高が小さく細身の印象を与える端反形で、釉調はにぶく、吳須の発色が悪い。3は外面・見込に梅花文が配され、火災に遭っている。4・5は半筒形の湯呑みで、4は内面に四方尊文が、5は外面中央に鉄絵で横線が描かれる。5は同じ構造に同一セットがもう1点ある。他にSK10からは輪花皿と同一意匠の柴束文が配される小碗、SK17から半菊花文の半筒形碗、SK23からは波佐見系かと考えられる端反碗、SK25から瀬戸系の小碗、SK26から清代と考えられる輸入磁器、SK45から色絵の小碗が出土している。

#### ③中碗

用途は抹茶碗・飯碗・煎茶碗・酒坏等とされ、丸形（SK07・SK13・SK26・SK42・SK45等）・腰張形（SK07・SK08・SK11・SK13等）・飯椀形（SK07等）・半球形・端反形・平形（SK13）・半筒形（SK14・SK17・SK23・SK27・SK45等）等があり、丸形・端反形が多い。図示できるものは少ないが、6は厚手で波佐見系と考えられる。8は口辺の立上がりや外面・見込の文様から皿ではなく、中碗蓋と判断した。他に、SK10に雷文・菊散らし文様、SK17に半筒形・半菊花文、SK20に外面二重網目文・見込菊花文、SK26に丸形・外面花唐草・内面四方尊、SK45に波佐見系？、同じく鉄絵透明釉／唐津系、SK47に瀬戸系といった中碗がある。また、SK01には波佐見系のくらわんか碗、SK16には外面鉄釉・内面透明釉施釉の中碗がある。色絵の中碗は、SK01・SK13・SK17・SK28・SK36から出土しており、SK01・SK13・SK17・SK36は肥前系、SK28は瀬戸系かと考えられる。中碗蓋は、SK01で同一セットが2組（1組は外面草花・見込蛸唐草、もう1組は外面唐草・見込五弁花）がある他、SK16・SK22からも出土している。SK16例は上手である。青磁碗はいずれも肥前系でSK01・SK07・SK10・SK16・SK22・SK48からの出土がある。

#### ④大碗

抹茶碗・飯碗・うがい茶碗・中鉢等の用途がある。今次調査では、SK07、SK16からの断片的な出土があるのみである。SK16出土の大碗は青磁で、あるいは大鉢かもしれない。

#### ⑤薄手酒杯

江戸時代後期に、濁り酒から清酒に飲酒の流行が変化し登場した器である。SK14・SK16・SK34からの出土があり、SK14は瀬戸系で内面に文字が書かれる。

#### ⑥仏飯器

小型のものが多く、江戸時代後期には仏壇の小型化ないし多様化を背景として小型化するといわれている。台底輪高台（9～11）が多いが、高高台（12）のものもある。9・10はSK10からの出土でサイズや器形は若干異なるものの、セットで使用されていたものと考えられる。12はあるいは酒杯かもしれない。13は陶胎染付である。他に、SK07から複数個体の斜格子文、SK45から台底輪高台で外面靖唐草・見込五弁花の仏飯器等が出土している。

#### ⑦うがい茶碗

7は半球形に近い器形で、見込に雨竜が描かれる。

### 2) 盆類

分類はサイズで行っているため、小皿と五寸皿の境界に位置する微妙なものがある。破片資料では小皿へ含めている。

#### ①極小皿

SK01・SK14・SK16・SK21・SK22からの出土がある。SK16には盤形・端反形・すっぽん口形がある。SK21は半菊花文が、SK22は上絵付で外面如意頭・内面紅葉が描かれる肥前系である。SK22例については、極小皿は内面に文様が描かれ紅猪口は外面に描かれているとされるので、判断を迷ったが極小皿とした。

#### ②小皿

皿類の大半が小皿である。用途はオコ皿・手塩皿・取皿とされる。丸形・端反形が多く、僅かに盤形（SK01・SK26）や変形形（SK45）等がある。高台は蛇ノ目凹形高台のものが多いが、輪高台のものもある。蛇ノ目凹形高台のものは、高台内が釉剥ぎされたものが多い。14は厚手で、胎土がやや青みを帯びることから、波佐見系と考えられる。15・16はSK16出土でセット、内面唐子。外面唐草が描かれる。高台内に釉があり、砂目である。17は内面山水文・外面源氏香文（「花散里」に近いがパターンにない）が描かれる。18は盤形を呈する薄手の小皿で、内面に如意頭・五弁花が配される。同一造構内にセットがある。四方隅切小皿19は上手で、高台内に「大明成化年製」の銘がある。他に、SK01に盤形で内面菊花散らし・五弁花、SK10に柴束文が配される輪花皿、SK27に内外面半菊花で金の口紅のもの、SK45に丸形で内面扇文等がある。また、SK18に墨彈き技法、SK44に型絵摺がみられ、SK45の変形形の小皿は菊花が陽刻される。波佐見系のくらわんか皿はSK01・SK27にあり、SK01のものは弧文や草花文の描かれる。SK16にも波佐見系と考えられるものがあり、瀬戸系の磁器はSK36にある。SK24には輸入磁器（清代）の芙蓉手小皿がある。さらに、青磁小皿はSK22・SK23（端反形、輪花皿）。SK48にみられる。SK47小皿は瀬戸系で銅版摺される。

#### ③五寸皿

用途は中皿とオコ皿・取皿が考えられる。21～26はなます皿であろうか。21・22はSK16、23～26はSK22出土である。それぞれ微妙に絵柄が異なる。21・22は釉調が青みを帯びる。23～26は口

縁部が僅かに波を打っており、内面に砂目が残る。蛇ノ目凹形高台で凹内に二重渦巻が描かれる。23・24は最低5客、25・26は10客セットである。他に、SK01に盤形で内面に雲・花卉が描かれるセットがある。

#### ④中皿

いずれも破片資料であり、図示できるものはない。SK01・SK02・SK17・SK18・SK22・SK27から出土がある。SK01例は蛇ノ目凹形高台、SK02皿には山水文が描かれるようで、高台内に「○〇年製」の銘がある。SK23にも高台内に「化年」の銘がある。

#### ⑤大皿

宴席などで用いられた盛り皿である。27は木杯形を呈すると考えられ、魚が描かれ、セット関係がある。高台内には『蒼』と書かれる。

#### ⑥水盤

SK16から青磁水盤片の出土がある。

### 3) 鉢類

#### ①小鉢

図示できるものはないが、SK04より瀬戸系の匁干形小鉢、SK16から四方隅切角鉢、SK30・SK44から清代と考えられる輸入磁器（匁干形）が出土している。

#### ②中鉢

小鉢に比較してやや出土が多い。28は腰張形底広の青磁中鉢で、口縁に波、見込に家屋山水文が、蛇ノ目凹形高台の凹部に二重渦巻が描かれる。焼繼ぎされる。SK16出土の29は腰張形底広で、口縁に波、見込に菊花や揚羽蝶等が描かれる。同じく焼繼ぎされる。他にSK01から匁干形・山水文、SK04・SK10から青磁鉢が出土している。

#### ③大鉢

用途は盛鉢とされる。図示できるものではなく、SK01・SK17（梅花文？）・SK22等からの出土がある。

#### ④猪口

向付・そば猪口・酢猪口等に用いられたとされる。桶形、腰輪高台（30～33）が多く、若干腰張形や広東形と考えられるもの（SK23）がある。31は口径に比して器高が高く、スリムな印象を与える。いわゆる江戸絵付で、金・赤・緑が絵付される。35は口縁無装飾の腰張形で、厚めに釉薬が掛けられる。図示したものの他、SK02・SK10・SK16・SK23に出土がある。

#### ⑤蓋物

蓋付の鉢で、35・36は区画間に斜格子・市松綱目文が描かれ、文様・サイズからセットと考えられる。35は橋摘みがつくと考えられ、口縁にかえしがある。36は口唇部分が無軸である。37は口唇が軸剥ぎされる。半筒形は比較的時代が古いとされ、上手である。他に、SK10・SK22・SK23から蓋、SK17・SD05から身が出土している。SK22・SK23例は草花文が描かれ、SD05例は外面鉄軸・内面透明軸が施釉されている。

#### ⑥段重

浅い盤形の器で重箱として用いられたとされる。図示されるものはないが、SK16には2個体以上の段重があり、蓋も出土している。

#### ⑦合子

小型の蓋物で、白粉等を入れるのに用いられた。38は円文内に斜格子・市松綱目文が描かれ、橋摘みと思われる摘みがつく。39は無摘みで、38・39とも口縁にかえしがある。

#### ⑧植木鉢

園芸用に用いられる鉢で、底部に穿孔される。大半が陶器製であるが、SK02から銅縁桶形の磁器製植木鉢が出土している。染付・透明軸の製品で、内縁に草花文が描かれる。

#### ⑨香炉

断片的に出土しているのみで、図示できるものはない。仏壇用が多い。肥前系の青磁（SK01・SK13・SK23・SK45）が多いが、透明軸のものもSK13から出土している。SK23には3個体あり、1個体は有三足偏平鼎形で耳がつき、1個体は有三足半筒形、もう1個体は無三足で砂目が残る。SK45も砂目である。SK22から肥前系の型作り四方隅切香炉が出土している。型作りされた隅入の器形で、浮文の花等が染付および鉄絵で絵付される。区画間は列点で充填される。床の間や書院を飾る空焚き用の香炉かと考えられる。

### 4) 瓶類

#### ①小瓶

容量1合以下の瓶。40は腰張形で、頸部蛸唐草・胴部草花が描かれる。41は棘菱形であるが、口部を欠損する。他に、SK07から透明軸・鉄軸の掛分（瀬戸系）、SK10から蛸唐草が描かれた小瓶、SK16からは棘菱形口縁無装飾小瓶、同じく胴部が方形の変形形が出土している。

#### ②中瓶

容量2~7合前後の瓶。図示できるものではなく、SK22・SK23からの出土がある。SK23は草花文が描かれる。

#### ③神酒徳利

神棚に供える小瓶。42は瀬戸系の磁器で、小型の神酒徳利と考えられる。他にSK01（肥前系）・SK23からの出土がある。

#### ④仏花瓶

仏壇の両脇に飾る花瓶。SK07から梅花文、SK10から青磁仏花瓶と考えられる破片が出土している。

#### ⑤花生

花を生ける器。SK13から青磁花生が出土した。

### 5) 水注類

#### ①水滴

硯に水を注ぐための文房具で、SK16・SK26から破片の出土をみた。

## （2）陶器

大半が瀬戸・美濃系の灰釉・鉄釉施釉の陶器であり、両産地の陶器については逐一記述していない。他産地の製品については判る範囲で極力記述した。

#### 1) 碗類

##### ①小杯

43は平形に近い端反形、44は端反形を呈する。77は平形で灰釉が施釉される。見込に鉄漿が付着していることから、鉄漿坏に転用されたと考えられる。

##### ②小碗

腰張形・半球形・浅半球形・端反形があるが、端反形が多い。45はローラー等による連続の押捺が施される鎧茶碗で、美濃系である。鎧茶碗はSK01からも出土している。47は鉄絵で竹・梅が描かれ、透明釉を掛けたと考えられるが、二次焼成を受け釉薬が発泡している。京・信楽系と考えられる。48は赤・青・緑等で上絵付された色絵で、花卉が描かれる。セット関係があり、胎土が黄灰色の精良なものであることからやはり京焼系と考えられる。49は京・信楽系である。50は鉄分を多く含む胎土で、梅花にうのふ状に白釉を被せる萩焼と考えられる碗である。51～54は口部に吳須を掛流したもので、SK10とSK16から出土しているが同一セットと考えられる。SK10とSK16がともに飯田大火の灰焼き坑と考えられることと矛盾しない。55は同じSK34内からセット関係のものが出土している。56は鉄釉が施釉される。他に、SK10・SK22・SK34から鉄釉碗（瀬戸美濃系）、SK10（京・信楽系）・SK18・SK23から鉄絵・灰釉碗、SK22・SK45から灰釉碗等が出土している。

### ③中碗

丸形・腰張形・半球形・端反形・天目形・轆轤拳骨形等が出土している。57~59は丸形の中碗で、57は染付で草花が描かれる。58・59は内外面に銅緑釉が掛けられ、おそらくセットである。60~68は腰張形を呈する。60~62は灰釉、63・68は鉄釉の中碗で、61・62はセットと考えられる。また、68も同じ造構内にセット関係にあるものがある。64~66は高台内に「清水」・「雲」と押印される。このうち66は山水樓閣文が描かれる。胎土は精良で灰色ないし橙褐色を呈し、肥前系と考えられる。67は高台内に「〇」と墨書きされる。69は腰張碗に近い半球碗、70~72は半球碗を一括した。70・72は灰釉、71は鉄釉の碗で、72は緑釉をうのふ状に施している。73は鉄絵で棚と萬葉植物を描き、内面に緑釉を掛け流し、口紅をつけている。74は壺形の京・信楽系碗で、鉄釉施釉で高台に押印されている。76は轆轤拳骨形で内面および外側の一部に化粧掛がなされる。胎土等から京焼系と考えられる。SK13にも轆轤拳骨形があり緑釉・鉄釉が掛け分けされる。他に、SK01に鉄絵（「米」）。灰釉、SK02・SK07に吳須絵。灰釉、SK10に吳須絵および鉄絵・灰釉（端反形）、SK10に鉄絵・灰釉、SK14に吳須絵・透明釉、同じく外側鉄釉・内面灰釉掛け分け、同じく鉄釉地に灰釉掛け流し、同じく鉄絵・灰釉（半球形）、同灰釉地に緑釉がうのふ状に施されるもの、同じく鉄絵・灰釉地に緑釉掛け流し（織部写し？）、SK16に瀬戸美濃系の陶胎染付と考えられる鉄絵・灰釉、SK22に鉄絵・灰釉（壺形）、SK23に鉄絵・灰釉（半筒形、京焼系？）、同じく灰釉地に緑釉掛け流し、同じく外側鉄釉・内面灰釉掛け分け、SK24に吳須絵。灰釉、SK26に吳須絵。灰釉、同じく外側鉄釉・内面化粧掛、同じく外側鉄釉・鉄絵梅花文／内化粧掛等がある。また、釉薬のみのものとして、灰釉…SK01・SK02・SK04・SK07（天目形他）・SK16（杉形）、SK18・SK26・SK27・SK28・SK34（半筒形）・SK44・SK45・SK47・SK48、鉄釉…SK01・SK02・SK04・SK07（天目形他）・SK10・SK16（拳骨形、美濃系、他）・SK17・SK18・SK23・SK25（天目形他）・SK26・SK27・SK28・SK34・SK42（天目形）・SK44・SK45・SK47、緑釉（唐津系）…SK13（腰張形）・SK17・SK34（腰張形）・SK42（腰張形）・SK45、志野釉…SK25（端反形、美濃系）・SK44・SD09 等がある。

### ④大碗

SK23に鉄釉碗、SK25に灰釉碗片がある。

### ⑤仏飯器

仏飯器は磁器製品がほとんどで、陶器は78のみである。78は上半を欠くが、台底抉り込みの仏飯器と考えられる。薄く黄味がかった釉調を示す。

## 2) 皿類

### ①極小皿

79は丸形の灰釉皿である。

### ②小皿

丸形が多く、他に端反形・折線形・盤形・変形菊花形等がある。80は吳須絵灰釉小皿で、梅に鶯が型

絵摺される。82は吳須絵灰釉小皿で草花文が描かれる。81は鉄絵灰釉皿で、桜が型絵摺される。83は吳須絵灰釉小皿で、唐草に梅文花が描かれる。84～86は唐草文が描かれ、84・86は鉄絵志野釉皿、85は鉄絵灰釉皿である。87は灰釉皿。88は高台内に別器種のものと思われる重ね焼きの際の溶着痕があり、胎土灰黒で厚い釉調を示し粗く貫入が入る。SK13・SK16・SK26・SK34に同じ釉調の小皿がある。89は端反形で灰釉が、90は折縁形で志野釉が掛けられるが、それぞれ見込輪ハゲである。91は見込に印花文が配される鉄釉皿で、やはり輪ハゲされる。SK25に同一セットがある。92は盤形の鉄絵灰釉皿で、団栗が描かれる。93～95は変形菊花形の灰釉皿で、93は綠釉が掛け流しされる。96は木瓜形の灰釉皿で中央に印花文がつく。

他に、SK02に鉄釉印花文輪ハゲ皿、SK04に灰釉吳須絵梅花文皿（型絵摺）、SK07に鉄絵志野釉蔓草文皿、SK10に鉄絵灰釉皿、同じく鈎縁形灰釉皿、SK13に唐津系輪ハゲ皿、SK16に灰釉輪ハゲ皿、同じく輪ハゲ印花文皿、SK34に鉄釉輪ハゲ印花文皿、同じく灰釉八稜皿、同じく鉄絵灰釉隅切角皿、SK36に鈎縁形皿、SK42に鉄釉輪ハゲ印花文皿、SK45に吳須絵灰釉皿、同じく二段折形灰釉皿、SD05に折縁形内面綠釉・外面部灰釉掛分皿等がある。また、灰釉皿（SK17・SK18・SK23・SK25・SK26・SK34・SK35・SK44・SK48）、鉄釉皿（SK45）、同じく志野釉皿（SK34）、透明釉（SK22、京・信楽系）がある。

### ③中皿

97・98はセット関係にある丸形灰釉皿で、火災に遭い内面に砂粒が溶着する。99は端反形の鉄釉・灰釉掛分け皿で、口部が波打つ。SK01・SK16に同様の掛分け皿がある。100は丸形灰釉皿で、行灯皿に転用されている。他に、SK10に灰釉・綠釉掛分け皿、SK16に鉄絵志野釉皿、同じく鉄釉・灰釉掛分け皿、SK18に灰釉地に綠釉を流した波状文皿、SK34に鉄絵灰釉四方入角皿、SK42に鉄絵灰釉皿、SK45に志野釉皿、SK48に灰釉地に綠釉がうのふ状に掛けられた皿等が出土している。

### ④大皿

101は端反形灰釉皿である。他に、SK10から灰釉大皿、SK13から折縁形鉄絵花卉文志野釉皿、同じく端反形灰釉大皿が出土している。

### ⑤灯明皿

平形で、無高台かクリ底の小皿である。102～108は無高台平形の小皿で、102・104・105は灰釉皿、103・106～108は鉄釉皿である。109はクリ底平形の鉄釉皿である。他に、SK04・SK07・SK16・SK17・SK22・SK26・SK34・SK48に灰釉皿、SK09・SK26・SK34・SK42に鉄釉皿がある。生産地は瀬戸・美濃系の他、信楽系が多い。

### 3) 鉢類

#### ①小鉢

110は四方入灰釉角鉢で向付と考えられ、図示しなかったが同様の灰釉鉢がSK47から出土している。111も四方入の向付で口部が鉤縁形である。SK10・SK30に鉄釉鉢、SK13に灰釉鉢、SK16に鉄釉地にうのふ状に白色釉が散らされた鉢、SK42に鉄絵灰釉鉢がある。

#### ②中鉢

112の天目形の四方入鉢は黒褐色を呈する胎土で、灰釉地に吳須が掛流しされる。胎土の特徴から在地系の陶器で時期が下ると考えられる。113は美濃系の鎧手の鉢で、内面には渦状の印花文が配される。他に、SK01から灰釉鉢・緑釉印花文鉢・絞肌状の鉄釉鉢、SK07から志野釉鉢、SK16から灰釉鉢、SK22から灰釉鉢・灰釉四方入角鉢、SK26から鉄釉鉢、SK34から灰釉鉢・鉄釉鉢・鉄絵志野釉鉢、SK42から灰釉波状文鉢、SK45から外鉄釉・内灰釉鉢（信楽系？）、試掘トレンチから「富永」銘の入った吳須灰釉鉢が出土している。

#### ③大鉢

114は籠描きの波状文が縁部付近に施文される鉢で、胎土黒色を呈することから在地系とも考えられる。115は浅丸形の鉢で灰釉地に緑釉掛流し、波状文・円文が刷毛状工具で描かれる。同様の波状文鉢がSK42にある。また、SK13に鉄絵志野釉や漆継ぎが施された鉢（17世紀代）、SK22に浅丸形の灰釉／緑釉大鉢、SK34に鉄絵志野釉鉢、SK42に鉄絵灰釉鉢がある他、灰釉鉢がSK07・SK10・SK16・SK34、鉄釉鉢がSK26・SK34から出土している。

#### ④盃洗

宴席で酒を酌み交わす際に盃を洗うために用いたとされる。器形がわかるものはないが、台がつくことから盃洗と考えられる。116は鉄釉が掛けられ、他にSK03からも鉄釉盃洗破片が出土している。

#### ⑤蓋物

75は腰張形ないし壺平形で、口端が平坦で釉剥ぎされる。120は口端が釉剥ぎされ、半筒形で、鉄絵灰釉の信楽系である。

#### ⑥段重

121は口端が無釉で身が浅い壺状を呈することから段重としたが、茶道具であろうとご教示を得た。

#### ⑦合子

117～119は合子が小型で身と蓋の大きさに差がないとされることから蓋物の蓋として版組みしたが、大きさ以外は122と相違ではなく、合子蓋に変更した。身はSK23から出土しており、筒形で身が深く、受口。高台を有する灰釉施釉のものである。122は灰釉、123は鉄釉の合子蓋、124から126は口縁蓋受けの灰釉合子身で、122と124はセットと考えられる。

#### ⑧片口

127は胎土に石英粒を多く含む鉄釉施釉の鉢形の製品で、僅かながら片口が付けられた痕跡が看取される。

#### ⑨擂鉢

鉄釉施釉で、内面櫛目・見込櫛目環状（内側に×ないし捩子花状）の擂鉢が主体である。鉄釉は黒味が強いのが特徴である。口縁無装飾（129）、口縁折縁形（130）、口縁外帯形（131～136）があり、129は口縁内面の形状からすると、口縁折縁形との中間的な様相を示す。129・131・134には内面に4ヶ所長方形の胎土目がある。130は内面が著しく摩滅する。他に、SK01・SK02・SK07（口縁折縁形）・SK08・SK09・SK10・SK13・SK16・SK17・SK18・SK21・SK22・SK23・SK25・SK26・SK27・SK34・SK35・SK42・SK44・SK45・SK48・SD05からの出土があり、特にSK22からの出土が多い。

時期については口縁折縁形が18～19世紀前半代と考えられ（瀬戸市教委 1990）、SK07例は18世紀代、130は19世紀前半に位置づく。また、129・131～136は後出的な様相を示すと考えられ、近代に位置づくと考えられる。

#### ⑩餌擂鉢

図示しなかったが、SK45から餌擂鉢と考えられる破片が出土している。口径が180mmと小さいことからそれと判断した。鉄釉施釉である。

#### ⑪練鉢

口径200mm前後の丸形の鉢で練りものをする際に用いる鉢である。口縁玉縁形を呈する灰釉鉢で、137は内面に胎土目4ヶ所、138は貝目と考えられる目あとが3ヶ所ある。他に、SK01・SK16・SK18・SK22・SK23・SK27・SK45からの出土がある。

#### ⑫捏鉢

練鉢より径が300mm前後と大きく、両手で食物を練るのに用いる調理用具である。139～141は把手がつかない捏鉢で、今次調査で出土した捏鉢はすべてこのタイプである。灰釉施釉で、内面に貝目が3ヶ所ある。139はSK14とSK23の接合関係がある。139・140は口縁部が鉤縁形平坦で、器壁も薄く軽量であり、近代まで時期が下ると考えられる。141は二次焼成による歪みがあるが、上半が鉢状に開く他に例を見ない器形である。他に、SK01・SK07・SK10・SK13・SK16・SK18・SK22・SK23・SK36から出土する。

#### ⑬水鉢

水を溜めておくための大型の鉢で、SK13に鉄釉施釉の破片があり、胎土に石英を含む。

#### ⑩贋盤

細長い楕円形を呈する盤形の器で、整髪の際五味子を水に浸して作った整髪料を入れ、櫛を浸す化粧具とされる。図示できるものはないが、SK07から鉄絵灰釉、SK16から内面に布目をとどめる灰釉の破片が出土している。

#### ⑪植木鉢

銅線桶形が多い。142は底部に穿孔される灰釉施釉の植木鉢である。他に、SK01・SK16から鉄釉鉢、SK01・SK10から灰釉鉢、SK16から鉄釉・灰釉鉢、SK04・SK16・SK17・SK22から緑釉鉢が出土している。いずれも瀬戸・美濃系である。

#### ⑫香炉

有三足轆轤半筒形（143・144）、有三足鼎形（145）、無三足筒形無高台（146）等がある。143・145・146は灰釉、144は鉄釉施釉である。他に、SK16に鉄釉施釉、同じく外面鉄釉／内面灰釉施釉、SK27に有三足、SK34に鉄釉施釉の香炉がある。

#### ⑬灰吹

煙草の灰を捨てるための喫煙用具で、本来竹製であったともいわれている。147は形態から灰吹と考えたが、口端に叩いた痕跡がなく、筒形容器とした方が妥当かもしれない。やや発泡した黒色の胎土で在地系かと考えられる。

#### ⑭火入

煙草の火種を入れる小型の容器とされる。SK10から口部に銅緑釉掛流しの瀬戸美濃系、SK26から鉄釉施釉の火入と考えられるものが出土している。

#### ⑮火鉢

灰を入れ中に炭火等をいけて、手を暖めたり、湯茶を沸かすのに用いたもの。148は火鉢ないしは水鉢の脚部で、型作りで水鳥が浮き彫りされる。他に、SK01・SK16（胴丸形）から鉄釉施釉の製品が出土している。

#### ⑯焜炉

火鉢の一種で、口縁部の1ヶ所に窓を切り込む形状のものとされる。図示したものはないが、SK01から鉄釉施釉のものが出土している。

### 4) 壺類

蓋のない状態で器高120mm未満のものを小壺、300mm未満のものを中壺、それ以上のものを大壺とした。

### ①小壺

156・157は双耳瀬戸壺形の灰釉壺で、156は釉薬が刷毛掛けされる。他に、SK24から吳須絵灰釉壺、SK27から灰釉壺、SK34から鉄釉壺（壺）、同じく鉄釉壺、SK45から灰釉壺が出土している。

### ②中壺

149～155は中壺蓋を一括したが、壺の区分が器高を基準にし径は基準外のため、あるいは小壺蓋も含まれているかもしれない。149・150は落し蓋で、149は橋摘みがつく。152・153は山蓋で、152は鉄釉、153は灰釉施釉である。154は縁の1ヶ所に杓子用の半月形の切り込みがある。黒褐色の胎土で、在地系かと考えられる。155は口受形鉄釉蓋である。158は貼付高台の二筋三耳壺で、灰釉が施釉される。161は鉄釉施釉で、内面無釉である。あるいは徳利かもしれない。他に、SK01から鉄釉壺、SK10から灰釉地に線釉掛流し壺（あるいは土瓶か？）、SK16から鉄釉中壺蓋、SK23から内外面灰釉施釉の壺等が出土している。

## 5) 壺類

ほぼ壺類の大きさに準じる。

### ①小壺

SK16から錢型灰釉壺、遺構外から胴丸形輪高台の鉄釉壺が出土した。

### ②中壺

128は上半を欠くため断定はできないが、中壺と考えられる。159は頸部切立形の鉄釉壺で、肩部に鉄釉（黒色）が掛流しされる。160は半胴形深めの壺で、外面に2条の沈線をもち、鉄釉が施釉される。他に、SK01・SK02・SK04・SK13・SK20・SK23・SK27から鉄釉壺（SK23は内面）、また、SK23から肩丸形無頭壺が出土した。SK01・SK02・SK13・SK27は半胴壺で、SK04も半胴壺と考えられる。

## 6) 瓶類

### ①小瓶

SK01から端反棘菱形灰釉瓶、SK23から灰釉瓶、SK27から鉄釉瓶が出土した。

### ②中瓶

162はペコかん形の鉄釉瓶で、胴上部および下部に指頭痕が残る。また、SK20から端反棘菱形の鉄釉地に頸部に灰釉を掛流しした中瓶が出土した他、SK04・SK09・SK14・SK25に鉄釉瓶が、SK05に灰釉瓶がある。

### ③大瓶

容量8合以上の瓶。163は瀬戸美濃系の「舟徳利」形・鉄釉施釉の大瓶で、底部に胎土目が残る。他に、灰釉瓶がSK04から、貧乏徳利がSK16から、肥前系の鉄絵灰釉瓶がSK22から出土した。

#### ④髪油壺

化粧具の一つ。SK16から偏平形を呈する、髪油壺かと思われる瓶が出土している。瀬戸美濃系である。

#### ⑤燭徳利

酒に燭をつける際に用いる。164は薦口形の徳利で、口縁部から頸部にかけて呉須が掛流しされる。他に、SK10に鉄絵灰釉（信楽系）、SK16に鉄釉の徳利がある。

#### ⑥仏花瓶

165・166は盤口形の仏花瓶で、鉄釉が施釉される。167は瓶子丸耳形の完形品で灰釉。鉄釉が掛分される。美濃系の製品である。他に、SK16・SK27（瀬戸美濃系）から鉄釉瓶が出土した。

#### ⑦花生

168は盤口形の鉄釉大花生で、頸部に条線が巡らされる。他に、SK10に灰釉、SK16に外面銅緑釉・内面鉄釉施釉で浮文の龍がある肥前系花生、SK17に灰釉施釉の花生と考えられるもの、SK18に銅緑釉、SK23に筒形の外面銅緑釉・内面鉄釉施釉花生がある。

### 7) 水注類

#### ①小水注

液体を入れて一時貯蔵し、別の器に注ぐための器で、器高が6cm程度のもの。「たれ次ぎ」等に用いられた。SK45に半月口形で鉄絵灰釉のもの（京・信楽系）がある。

#### ②中水注

169は後手半筒形の中水注と考えられ、内外面に鉄釉が施釉される。内面に施釉されることから、油注と考えられる。SK01から筒形、灰釉施釉のものが出土している。SK16には169と別個体の鉄釉水注、SK22には瀬戸美濃系水注がある。

#### ③急須

図示できるものではなく、SK01に綠釉施釉の急須の柄破片がある。

#### ④土瓶

152は土瓶蓋ないし中壺蓋と考えられるもので、鎧手で緑・鉄釉が施釉される。灰釉土瓶がSK01・SK10・SK16・SK45（蓋）から、鉄釉土瓶がSK10（胴折形、产地不明）・SK16（蓋）・SK26・SK27（瀬戸美濃系）から出土している。

#### ⑤水滴

170は豆腐形呉須絵灰釉水滴で、草花が浮文となっている。風穴が中央、水穴が左手前にあり、右利

き用である。

### 8) 鍋類

#### ①土鍋

171～173は鉄軸土鍋で、172は小型であることから調理器具というより銘々器として用いられたと考えられる。173は底部を欠くが、紐状双耳の痕跡があり、丸形三足と考えられる。他に、SK01から鉄軸丸形三足板状双耳土鍋、同じく鉄軸丸形三足板状双耳と思われる土鍋、SK10・SK16・SK22・SK26から鉄軸鍋が出土している。

### 9) 乗燭類

#### ②乗燭

灯火具の一種で、内面に油を入れ、木綿等の糸で作った灯芯を立てて火をつけるもの。174・175はたんころ形／丸形横穴芯立、176は台付たんころ形／底部軸孔無、177は台付たんころ形／底部軸孔有で、前2者は灰軸、後2者は鉄軸施軸である。後者は京・信楽系である。他に、SK16から灰軸、SK45から外面鉄軸・内面灰軸施軸の製品が出土している。

### 10) 器台類

#### ①灯明受皿

灯明皿を乗せ、垂れた油を受ける皿である。今次調査地点出土の灯明受皿は、いずれも灯明受皿形である。図示したものには、内側に巡らされた仕切に切立状の油溝がつけられる178～182と、小単孔があけられる183～185がある。後者は油溝アーチ状の亞種とも考えられる。時期が下ると考えられる。184は台がつくと考えられる。186にも油溝がつくと思われるが、破片のためどの形状のものがつくか不明である。図示しなかったものに、SK02・SK45に鉄軸油溝アーチ状皿がある。179・180は外面腰部や内面仕切部に重ね焼きの際の溶着痕がつく。他に、SK01・SK16に鉄軸皿が、SK01・SK10・SK16に灰軸皿がある。

### 11) 蓋類

187～189はその他の蓋類を一括した。189は灯明具の蓋であろうか。

### (3) 炉器

いずれも破片で、図示できるものはない。

### 1) 碗類

SK10から焼締碗が出土した。

## 2) 鉢類

### ①擂鉢

S K16から備前系、造構外から信楽系と考えられる擂鉢が出土した。他に造構外出土で堺・播磨系と形が似るが、胎土の異なる擂鉢がある。

### ②火鉢

S K34に火鉢と思われる破片がある。

## 3) 壺類

### ①中壺

S K34に中壺と思われる破片がある。

## 4) 養類

### ①大養

S K07・S K16・S K35から常滑系、S K13から信楽系・常滑系(?)と考えられる養片が出土した。

## 5) 瓶類

### ①花生

S K10から花生と考えられるもの、S K23から常滑系かと考えられる筒形の花生が出土した。

## (4) 土器

### 1) 皿類

#### ①灯明皿

従来「かわらけ皿」とよばれる素焼きの皿のうち、無高台平形の小皿191~196は灯明皿として分類した。191は器壁が外反するやや薄手の土器であり、191・193・195は糸切底で、輻輪右回転である。他にS K34・S K42から無高台平形の灯明皿が出土している。

## 2) 鉢類

### ①焼塩壺

製塩された塩を入れ加熱して精製塩を作った桶形の容器で、器ごと流通し食卓壺として使用されたもの。身・蓋があり、通常前述のようにして生産されるため、器体は二次焼成されている。

197~205・206~211は蓋で、197~205(蓋I類)は口受形で、上面および側面が丁寧にナデられ上面は平滑に仕上げられる。内面は細かい布目痕がある。二次焼成の痕跡が著しい。199に黒斑がある。206~211(蓋II類)は同じく内面に細かい布目痕を有し、外面は輻輪ナデされ、上面から側面にかけての境がない。I類に比べ径が小さい。二次焼成は206~209には僅かに認められるが、蓋I類ほど顕著でない。206~209には黒斑がある。212~215・216~222は身で、212~215(身II B類)は深桶形板作り成形で、蓋受が小さいタイプである。口端および外面は丁寧にナデが施される。内面は上部の3/4に粗い

布目痕があり、胴部は1枚の粘土板から、底部は内側から粘土塊が嵌め込まれ作られている。底面はナデられるが指痕（指頭・指腹）が残る。「泉湊伊織」と刻印され、著しく二次焼成される。213・215には黒斑がみられる。216～222（身Ⅶ類）は浅桶形で、1つの粘土塊から作られている。外面は轆轤ナデされ、217～220は轆轤ナデの下に指腹痕がみられる。内面は不明瞭ながらも見込まで細かい布目痕が残り、側面には布皺痕が残る。口縁部内側部分には布目や布皺の上に粘土が被っているものが多く、口端部の調整が後から施されている。口端部はハケナデ後ナデられ、217はハケナデ痕が明瞭に残る。底面は器面が荒れていて判断のつかないものが多いが、轆轤ナデと考えられる。219・220・222に微弱な二次焼成の痕跡が認められ、黒斑がある。216は大火に遭っている。他にSK45から身ⅡB類が出土している。

焼塩壺は身・蓋がセットの状態で生産・流通・使用されたことや、江戸遺跡等他遺跡でもセットで出土すること、また、今次調査地点出土の焼塩壺の胎土・成形・焼成の特徴から、出土焼塩壺は大きく2グループに分けられる。すなわち、蓋Ⅰ類に身ⅡB類、蓋Ⅱ類に身Ⅶ類がセットになると考えられる。

### ②植木鉢

SK18からの出土がある。

### ③火鉢

窓のない鉢形の容器である。226は粗い砂粒を多く含む土師質のもので、底面がほぼ平坦で脚・高台がなく、火鉢かどうか疑問が残る。他に、SK10から四隅脚付瓦質火鉢（板作り）、SK16から印花文が施された瓦質の火鉢？（轆轤）、同じく下半簡状・上半方形平縁瓦質火鉢（紐作り）が出土している。他に、SK09・SK16からの出土がある。

### ④焜炉

224～226は焜炉と考えられるものである。224は口縁部の一端に方形の切り込みがあり、反対側に小穴の痕跡がある。内面に瓶掛、外面に把手が付く。225は切り込みの下縁に外側に鉗状の張り出しが付き、二把手・三足である。図示した以外に器形がある程度把握できるものとして、SK16から外面に把手が付く肩張形のもの（瓦質）がある。他に、SK01・SK16（瓦質）・SK17・SK18・SK45・SD06からの出土がある。

### ⑤七厘

223は紐作り成形の筒形で上部に小穴が2個（以上）付く。他は破片が多いが、七厘と思われるものとして、SK01・SK16（瓦質）・SK44からの出土がある。

## 3) 壺類

### ①中壺

SK16・SK23からの出土がある。

#### 4) 鍋類

##### ①柳川鍋

撫乱から出土の227がある。

##### ②内耳

S K35からの出土がある。中世後半～近世に位置づけられる。

#### 5) 箱類

##### ①炬鍵炉

いずれも瓦質の製品である。228は四隅落し小型の炬鍵炉である。229は銅無し箱形のもので、口部内側が肥厚しないこと、脚がないこと、火鉢より身深いことから炬鍵炉としたが、銅がないことから火鉢の方が妥当かもしれない。他に、S K01・SK17・SK18からの破片出土がある。

#### 6) その他

230・231は瓦質の製品である。道具瓦とも考えたが、該当するものではなく、不明製品とした。また、SK10・SK16から海鼠壁の腰板が出土している。

#### (5) 瓦類

##### ①軒棟瓦

232は軒丸部に巴文、軒平部に唐草文が配される。

#### (6) 土製品

##### 1) 土人形

S K13出土の人形は京焼系で、小破片のため詳細は不明であるが女性像と考えられる。型合わせで製作されたと考えられ、赤・緑で彩色される。5トレンチからは同じく京焼系無彩色の鳩笛もしくは鳥の土製品が出土している。

##### 2) 弹碁玉

233は撫乱から出土したもので、おはじきと考えられる。

#### (7) 金属製品

##### 1) 銅および銅合金の製品

銅および銅合金の製品については肉眼で観察したにとどまるため、材質は不明な点が多い。観察表の表記については「銅および銅合金」では煩雑なため、便宜的に「銅」としておく。煙管はいずれも羅字煙管で、235は雁首の脂返しの湾曲がなくなり、239を除いて雁首。吸口の肩部が不明瞭になっている。近世後期の煙管の特徴をよく表している。236・240は羅字の一部が残存し、236は左側面に溶接痕がある。図示したもの以外にSK13・SK16・SK34から雁首が出土している。錆落ししていないため断定

はできないが、近年の研究結果では從来銅製品とされた煙管の大部分が真鍮製であることが判明しており、今次調査出土の煙管もその可能性が高い。

小束241はSK13からの出土で、束は板材の鍛造で、銅装が施されている。SK13からは喇叭状の破片が出土しているが、その形状から仏花瓶と判断した。変形が著しく図示困難である。環242はSK20からの出土である。

この他、SK07・SK14・SK16・SK22から不明銅製品が出土している。

## 2) 鉄製品

243は一面が平滑で、火打金ないし鉄鏡の一部と考えられる。244・245については形状から、244が鏡、245が模と考えられる。

釘には平頭釘と丸釘があり、後者は明治10~20年頃登場したといわれる。SK01・SK14・SK16・SK21・SK23・SK42・AJ43P1から平頭釘、SK16・SK36・SD06から丸釘が出土した。

この他、SK13から鉄滓が、SK16(246)・SK21(247)・SK48から不明鉄製品が出土した。

## 3) 銭貨

寛永通宝・二銭銅貨・不明銅錢（真鍮錢の可能性もあるが）の出土があるが、銹化が著しかったり、大火に遭って溶着しており、図示不能である。SK22・SK42から古寛永、SK16・SK22から新寛永かと思われる錢、SK16から二銭銅貨、SK13・SK16・SK18から不明錢が出土している。

## （8）木製品

SK13から漆器椀9点、SK16から算盤玉（248~250）が出土した。漆器椀は皮膜が残存するのみであり、外黒漆／内赤漆6点、内外赤漆3点で、いずれも破損品である。

## （9）骨角製品

細片のため製品かどうかの判断はつかなかったが、SK21・SK34から鹿角片が出土した。

## （10）石製品

### 1) 研

251は砂岩製で、マエブチ（部位の名称は壇内 1994の高嶋硯のものを使用）・ヨコブチが同じ幅で、オカ・ムコウデは料紙彫りされる。側面および裏面には釘書と思われる線刻があり、側面の字は『高』（？）かと思われるが、いずれも鮮明でない。252は粘板岩製の硯で、横幅1寸5分で高嶋硯見本簿の規格に則っており、高嶋硯かと考えられる。

### 2) 磁石

今次調査では中磁石（253~258）および仕上磁石（259~268）が出土している。中磁石は表裏面とも磁面となり両面に鑿跡をとどめるものが多い。小型品（253）と、中型品（254~258）があり、小型品は持磁石であるが、中型品はサイズが仕上磁石の置磁石と同サイズであることから置磁石の可能性も考

えられる。仕上砥石は中砥石に比較して、形態・サイズ・石材にバラエティーがある。259～261・266・267は持砥石、262～265・268は置砥石で、261・268は緑色岩、262～265が粘板岩、267が砂岩製である。262～265は表面および側面が平滑に仕上げられるのに対し裏面は鑿跡が残り、表面が砥面となる。同じサイズの254～258と262～265がSK16からまとまって出土していることから、両者はセットで用いられたものと考えられる。

### 3) 白類

#### ①茶臼

茶の湯に欠かせない道具で、原料の碾茶を挽く臼である。粉挽き臼に比べ小型であること、上臼。下臼とも芯棒孔が貫通すること、上臼の芯棒孔が供給口となり上臼面にものくばりがないこと、上臼の側面に2ヶ所の挽き手孔が設けられること、下臼に受皿がつくこと等が特徴である。269は安山岩製の上臼で、8分割5ないし6溝式のパターンである。通常主溝・副溝とも臼面の周縁部までは刻まれないとされるが、本例は周縁まで及んでいる。副溝の方向から回転方向は左回転と考えられる。挽き手孔が1孔残存する。

#### ②粉挽き臼

主に穀類の粉碎用に用いられ、上臼と下臼が芯棒で固定される。下臼の芯棒孔が貫通するのに対し、上臼の芯棒孔は貫通しない。点数は少ないが、いずれも非完形品である。270は花崗岩製の上臼で、8分割10溝式のパターンである。回転方向は副溝・ものくばりからみて左回転である。271・272は安山岩製の下臼で、主溝は均等に配置されておらず、おそらく271は6分割7ないし8溝式、272は6ないし7分割で8～14本の副溝が刻まれる。

#### ③搗き臼

273は形態から搗き臼と考えられ、花崗岩の円錐を素材とする。佐久市の金井城跡（長野県埋蔵文化財センター 1998）では、凹み部内面が石擂鉢より荒くざらついていると報告されているが、本例は平滑となっている。石材の差に起因するものであろうか。

### 4) その他

274は花崗岩の偏平礫に「水神」と朱書きされる。SK17からは他に磁器神酒德利が出土しているが、地下室とは直接のつながりはないと考えられる。275は玄武岩製で、舟形を呈し上面が受けになっている。舟形の先端部は湯道状になっており、鋳造具の一種かと考えられる。

#### (11) 動物遺存体

SK07からアカニシ・ハマグリ、SK10・SK26からイタヤガイ・ハマグリが出土した。イタヤガイは量が多く、食用に供されたと考えられる。貝杓子と考えられるものはない。

## 2. その他の時代

### (1) 繩文時代

#### 1) 土器

近世の造構等から、中期後葉（SK16）・後期（SK21）の土器片が混入出土した。

#### 2) 石器

小型の石器類（279～281）の出土がある。

#### (2) 弥生時代

造構外や、繩文時代と同様近世の造構に混入して、後期の甕（276・277）、壺（278）片が出土した。

造構外のものはSK43付近、造構混入のものはSK17・SK32から出土している。

#### (3) 古墳～平安時代

SK25・SD01から土師器甕が出土した。いずれも小片で、時期等不明である。また、SD01からは灰釉陶器碗片が出土している。

## 第IV章 総 括

今次調査では様々な制約の中で、試掘調査の結果遺構の遺存状態が比較的良好と考えられる部分について本発掘調査を実施した。近世・近代を中心に調査成果を概観するとともに、今後の調査の課題を整理し、総括としたい。

### 1. 本地点における災害の歴史

試掘調査の1トレンチ部分では大火層が少なくとも3面あり、遺構の埋没状況を考慮すると4回にわたる大火が確認された。すなわち、天明大火・寛政大火・大正大火・飯田大火である。大正大火については、試掘時のS E01（井戸）の記録が不十分なこともあり、今後の再検証を要する部分があるが、他の遺構変遷からみてそう矛盾はなかろうと考えられる。

また、SK09（土坑）・SK14（地下室）埋土やSK07（同）上部に被る砂から、今次調査地点周辺は寛政大火以降大正大火までの間に数回洪水を被っており、そのために地下室が埋まって放棄される事態に至っている。この間の洪水について記録をたどると、文化元（1804）年8月29日の「子満水」、文政11（1828）年7月2日の「子満水」、慶応4（1868）年7月2日の「辰満水」等がある（下伊那誌編纂会 1984）。この他、正徳5（1715）年6月17日の「未満水」、寛政元（1789）年6月18日の「酉満水」等飯田下伊那地方に甚大な被害をもたらした洪水（以下、「満水」とする）があるが、飯田城下町に関する限り、大火に比べ満水による被害についてはことのほか記録が少なく不明な点が多い。これは、「火事と喧嘩は江戸の華」と言われたように木造板葺き（近世後期には防火のため町屋も瓦を乗せることが許されるが）の家屋が密集する城下町にあっては、ひとたび出火すると瞬く間に延焼して大火となるのに対し、満水に対しては高位段丘の突端部に城下町が形成されたため、出水しても浸水程度で家屋が流失する等の被害は少なかったためと考えられる。上記の満水中で「未満水」と文政年間の「子満水」は有名で、特に「子満水」は川路地区で「未満水」より1尺高くまで浸水したといわれている（川路村水害豫防組合 1936）。地下室の調査所見からは、SK14埋土の下部最上層2a層が文化元年の「子満水」、中位の2層が文政11年の「子満水」に起因する可能性が指摘できる。中でも、文政年間の満水は今次調査地点周辺にも大きな被害をもたらしたことが考えられ、地下室が埋没し放棄されるに至っている。平成12年12月11日に市内東和町で電線共同溝建設に先立ち実施した立会調査では、上層から飯田大火層一間層一大火層一間層一砂層（層厚約70cm）一砂礫層が確認されている。さらに北側で平成13年1月16日に実施した立会調査では、砂礫層の直上から19世紀以降の磁器筒形碗（瀬戸系）や瓦が出土しており、上述の砂層は洪水起源で19世紀以降に位置づくものと考えられる。立会調査地点は惣堀外側の谷川に面した地域で、城下町の発展につれて町域が拡大したところである。直接に今次調査地点で確認された満水と結びつくものではないかもしれないが、罹災の事実として把握しておくべきと考えられる。

なお、昭和36年に長野県南部地域が体験した36災では、虚空蔵山からの土石流が滝ノ沢。押洞に流れ出し、旧市街地は王竜寺川・松洞川・谷川等の河川の氾濫を被っている。知久町周辺も王竜寺川・松洞川の氾濫を被っており、通りが導水路の役割を果たしている（飯田市美術博物館 1991）。近世においても上記河川の氾濫が今次調査地点周辺におよんだことが考えられる。

## 2. 本町1丁目の家並と町屋のスペースデザイン

飯田城下町については、宝暦2(1752)年・寛政9(1797)・天保11(1831)・明治23(1890)年の家並帳が残っている(村澤 1954)。しかし、飯田大火後に街路が拡張された経緯があり、街路を基準にした家並復元は困難である。今次調査地点でも地下室の位置から本町の通りは現状より北側にあったことは疑いない。同様に掘端や南横町も通りの幅が広がっている。

ここでは、家並を復元する方法として4つの点を基準にした。1つは、現存する土蔵である。裏界線に面した部分では調査時まで土蔵が2棟残っており(残念ながら再開発事業のため、調査後取り壊されてしまったが)、近世の家並の名残と考えられる点である(挿図22)。2つ目は、宝暦2年・寛政9年・天保11年の各家並帳で所有者が変化しない部分があることである。すなわち、宝暦2年と寛政9年とでは、伊実屋(清兵衛?)・北国屋伊八・野田屋仙次郎・伊実や文右エ門・松田屋五郎七・島田屋久四郎・越前屋四郎三郎が同一で、寛政9年と天保11年では、伊実や文右エ門・松田屋五郎七・越前屋四郎三郎が同一である。3つ目は各家並帳に記載された間口である。伊実や文右エ門から越前屋四郎三郎の間は間口に変化がない。4つ目は現存する土蔵周辺の各筆の大きさである。1/500の公図から起こすと、西側の土蔵がある土地は間口8.0m、東側の間口は7.5m、両者の間は13.15mで、後2者の寸法はほぼ4間、7間2尺に相当する。以上の4点を基準とすると、現存する2棟の土蔵は(創建年代や建主を明らかにし得ないが)、宝暦2年家並帳でいうと西側が松田屋五郎七、東側が渡屋小右エ門の屋敷地にあたると考えられる。また、今次調査地点は宝暦2年家並帳では、1トレンチが北國や平右エ門、本調査地点が伊実屋(清兵衛?)・北国屋伊八・野田屋仙次郎・伊実や文右エ門控、2トレンチが松田屋五郎七の屋敷地となる(挿図23)。また、寛政11年の大火の火元は1トレンチ付近である。

以上の通り復元した家並であるが、発掘された地下室SK14・SK17から想定される家並とは対応しない。SK14・SK17の間隔は約16mで、これが復元家並と対応するためには復元家並が最低2m東側にずれなければならない。復元家並をずらした場合、天保11年の家並帳でSK14は野田屋仙治郎、SK17は木下長四郎の屋敷地内となる。

蛇足であるが、明治23年の家並帳を参照すると、木下長四郎の屋敷地は伊実や木下清八に対応するようで、伊実やは天保11年以前に苗字を許されたのではないかと考えられる。

次に、町屋のスペースデザインについてみると、今次調査地点における造構の変遷は挿図24のとおりで、第Ⅲ章で詳述したように性格の判明しない造構もまた多く、各屋敷地の空間利用がどう変遷したかについては限界がある。地下室や大火灰搔き坑の位置からは母屋の位置がおよそ推定でき、当然のことであるが通りに面して母屋がある。母屋の形態は、建物基礎等が日々の開発等によって失われており、不明な点が多い。また、SK10・SK16から海鼠壁の腰板が出土しており、今次調査地点内にも土蔵があったことは確実で、現裏界線付近に土蔵が建ち並んでいたことが考えられる。これを傍証するように、6トレンチでは北側に大火灰搔き坑があるのに対して、南側は大火の痕跡が認められない。母屋と土蔵の中間部分には井戸・廁・塵芥投棄坑や木戸と考えられる施設等が設けられている。さらにSK07からは1m近い地下室用材とは考えがたい躰が集中して検出されている。SK07の形態からみても地下室があったとは考え難く、庭石であった可能性も示唆され、中庭的な空間の存在が考えられる。

宝曆二年

寛政九年

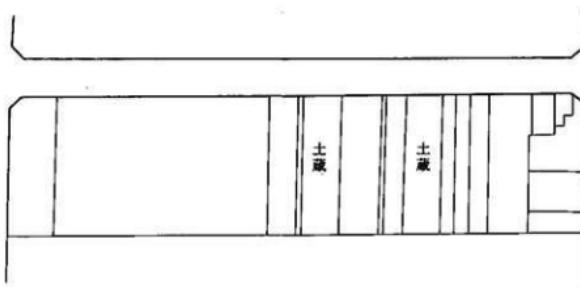
天保十一年

越前や 四郎三郎	六尺一尺五寸
井曾や 権 六	西間
知久町善右工門控	五尺
知久町 兵次郎控	西間
番匠町 半三郎控	七尺二尺
島田屋 久四郎	五尺八尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
伊実や文右工門控	五尺二尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
島田屋 久四郎	五尺四尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
伊実屋 故右工門	五尺二尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
伊實や 故右工門	五尺二尺
松田や 五郎七	五尺二尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
近江や 安兵衛	五尺三尺
野田屋 仙治郎	五尺三尺
木下 長四郎	七尺
木下 長四郎	五尺
松屋 安兵衛	五尺三尺
伊實屋 清兵衛	五尺三尺
北國屋 伊 八	五尺三尺
伊実や	五尺三尺
北國屋 平右工門	六尺三尺
北國や 平右工門	六尺三尺
船田町 文四郎控	五尺三尺

越前屋 四郎三郎	六尺一尺五寸
井曾屋 権 六	西間
島田屋 虎之助扣	五尺
桔梗屋 庄次郎扣	西間
鳴田屋左工門後家	七尺二尺
鳴田屋 久四郎	五尺四尺
伊実屋 故右工門	五尺二尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
鹽津 善治郎	七尺二尺
漆屋 小右工門	西間
紙屋 武右工門	五尺
小林 孫三郎控	西間

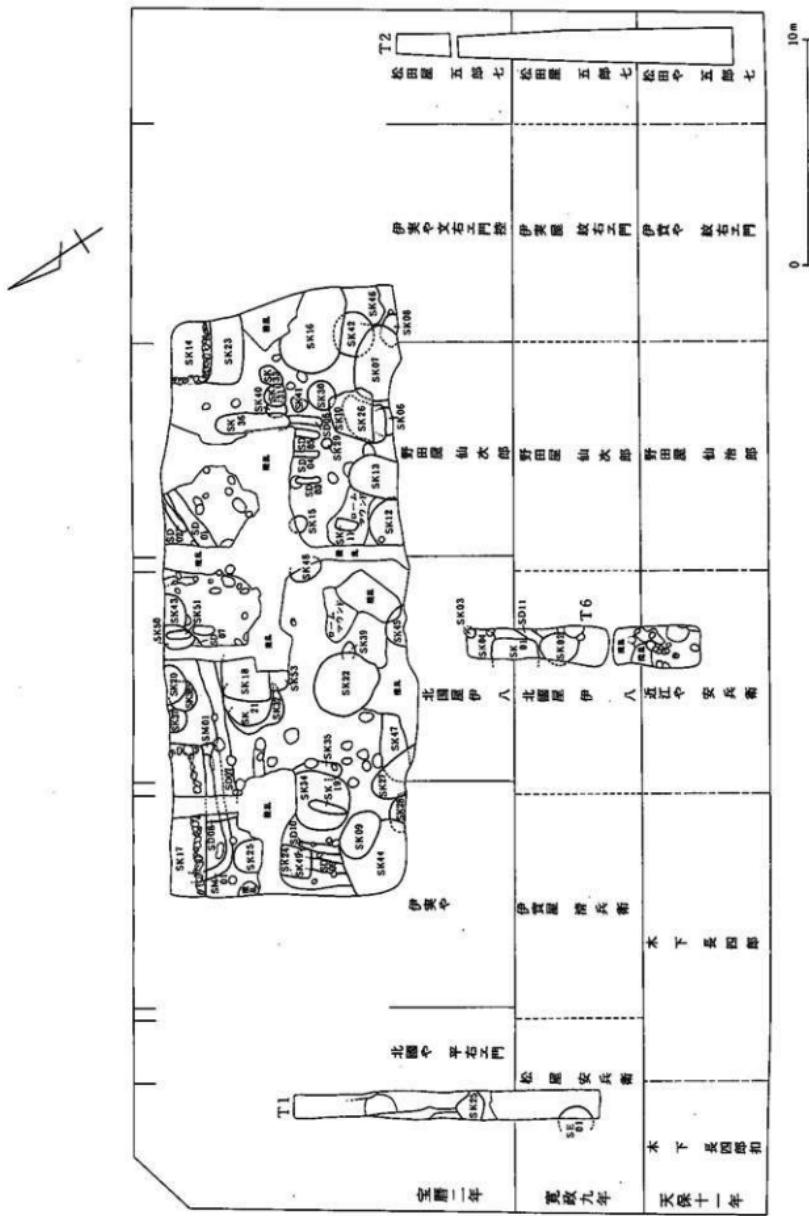
越前屋 四郎三郎	六尺一尺五寸
漆屋 小右工門	西間
紙屋 武右工門	五尺
鹽津 善治郎	七尺二尺
松田屋 五郎七	五尺四尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
伊實や 故右工門	五尺二尺
松田や 五郎七	五尺二尺
松田屋 五郎七	五尺二尺
野田屋 仙治郎	五尺三尺
野田屋 仙治郎	五尺三尺
木下 長四郎	七尺
木下 長四郎	五尺
松屋 安兵衛	五尺三尺
伊實屋 清兵衛	五尺三尺
北國屋 伊 八	五尺三尺
伊実や	五尺三尺
北國屋 平右工門	六尺三尺
北國や 平右工門	六尺三尺
船田町文四郎控	五尺三尺

公園



0 50m

插図22 家並帳



挿図23 想定屋敷割図

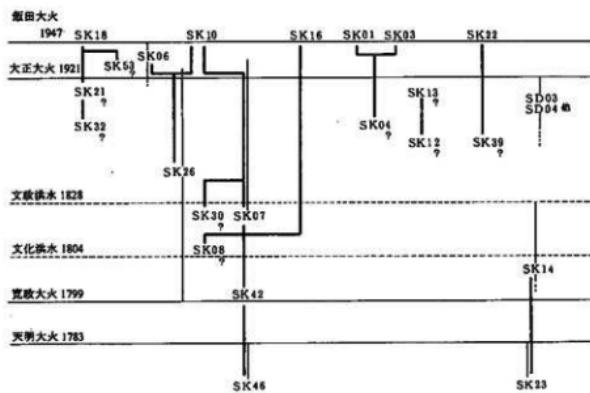
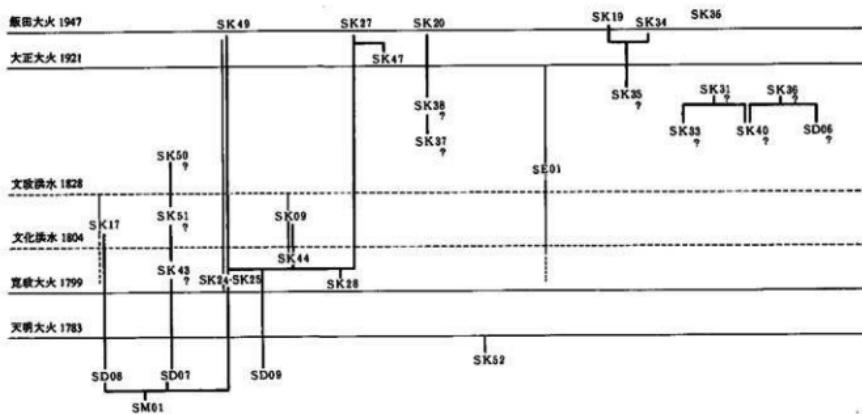


図24 造構変遷図

江戸遺跡においては相次ぐ大火から財産を守るために、土蔵や地下室（穴蔵）が作られたとされる。今次調査結果からみても、地下室が設営されたのは寛政大火が契機となっており、その設営目的は大火からの財産の保全と考えられる。「『守貞漫稿』によれば穴蔵は江戸では専ら巨戸が、宅内や土蔵の中に造り、金銀を納めたという。また中以下の家では、金銀のためではなく、土蔵を造れない者が、火災時に家財を納めるために造ったとされる。土蔵を造る費用は大きいが、穴蔵ならば容易に造れるし、また土蔵を造る費用があっても土地のない家も、穴蔵を造った」（古泉 1983）とされる。飯田の城下町では部分的な調査のみから即断はしかねるが、土蔵に比較して地下室は普及しなかった印象を受ける。それは、文化および文政の満水により被害を被ったことが原因かもしれない。

### 3. 出土陶磁器について

陶磁器の出土量を概観するとその比率を提示できないものの、磁器では肥前系が圧倒的に多く、次いで瀬戸系、若干ではあるが輸入磁器がある。陶器は、瀬戸美濃系が多く、京・信楽系および肥前系の陶器がそれに次ぐ。特に肥前系磁器の出土量には注目すべきものがあり、瀬戸系磁器の生産が始まる19世紀以降でも主体は肥前系磁器である。中馬による物資輸送で東海地方との結びつきが強かったことや、瀬戸美濃系の陶器が相当量あることから、19世紀以降瀬戸系磁器が多くなってもよさそうなものである。今次調査地点の産地別の傾向は、甲信地区遺跡の産地別分類の中では、東・北信や高遠城二の丸より松本城二の丸御殿・深山田遺跡（山梨県）・湯之奥金山遺跡（同）・町屋口遺跡（同）・宮沢中村遺跡（同）と似通った印象を受ける（降矢 2001）。今次出土遺物の時間幅が17世紀から近代までであることから、各期変化すると考えられる流通の様相まで言及することは困難であるが、富士川の水運から甲州街道を通るルートと、瀬戸美濃流通ルート双方から陶磁器が入って来ていることが考えられる。

また、中国産磁器、肥前系磁器（初期伊万里の小壺や上手の小皿・中皿）、あるいは17世紀代の瀬戸美濃系の大鉢の優品等、遺構の年代観と離れた年代の遺物があり、SK13等特定の遺構に集中出土している。これらは、あるいは伝世され、あるいは収集されたものではないかと想像される。上級商家の裕福な生活を示すものとして特筆される。

### 4. 遺物からみる町人の生活の様子

近世の飯田城下は中馬や諸産業の振興を背景として、茶の湯・和歌・俳句が庶民の間に広まり歌舞伎や花火が流行したとされる。今次調査でも茶臼の他、棗として用いられた鉄釉小壺や瀬戸壺、茶碗類、茶事の際に使われたと考えられる皿類・鉢類等が出土しており、茶の湯の流行が裏付けられている。また、土瓶等でも18世紀代に遡ると考えられるものがあり、多様な喫茶習慣が上級商家では行われていたと考えられる。

これまで一般に喫茶の習慣は18世紀前半の茶葉の改良により広まり、幕末までに一般化したと考えられてきたが、最近ではそれ以前に抹茶・淹茶法による煎茶以外に大振りの茶碗を用いる「茶筅で点てる煎じ茶」が下等な日常茶として、かなり広範に普及していたこと」（長佐古 2000）が明らかにされている。この煎じ茶を茶筅で点てる形式の茶については、古く熊倉功夫から指摘されている（1977）。今次調査地点では大振りな腰折形茶碗が多くあり、こうした陶器碗が日常行われた茶筅で点てる煎じ茶に用いられたと考えられる。

この茶筅で点てる煎じ茶に対して、点てない煎じ茶があり、これについて長佐古は「初期段階の小形碗には（中略）やや大振りではあるが、精緻な錫絵で山水文が描かれた肥前産の陶器箱形碗（中略）がある。いずれも、出土遺跡が大名藩邸跡などに偏在することから、これを用いた茶が主に一部階層が嗜む高級茶であったことを示唆している」（同前）とされる。こうした大名藩邸跡に限られる京焼写しの碗が町屋から発掘されたことは、商家の隆盛ぶりと彼らの間に茶を嗜む風潮が深く浸透していたことを物語る。

こうした茶の原点として、京風の文人趣味があったようで、その背景として17世紀中葉の黄檗の流入が指摘されている（中野 1995）。この時期、飯田藩主は文人領主として名高い脇坂安元。安政であり、上方の文化を積極的に取り入れたといわれる。現在市内に黄檗の遺風をとどめるものは数少なく、市内滝ノ沢白山寺隨身門の額程度である。この『第一峯』の額は黄檗三筆の即非の筆とされ、寛文年間のものとされる。今次調査地点出土遺物には17世紀中葉まで遡るものは少なくなく、この時代に取り入れられた京都の文人趣味が脈々と息づいていたことが考えられ、かつて小京都とよばれた飯田城下の往時を偲ばせる。

近世後期には生活習慣に大きな変化があり、これに伴って様々な生活用具が登場したとされる（新宿区内藤町遺跡調査会 1992）。例えば、食習慣では食膳が登場し、卓袱料理・粥料理・粉食の流行、飲酒の日常化や清酒の出現等があげられる。また、喫煙の流行、お歎黒の風習の広がりや化粧の流行、盆栽の流行、鳥などの小動物の飼育、仏壇・神棚の普及、夜間生活の一般化、文字文化の普及といった変化があったとされる。今次調査では、食膳一小皿、粥料理一土鍋、粉食一粉挽き臼・捏鉢・練鉢、飲酒一燭徳利・薄手酒杯、喫煙一煙管・灰吹・火入、化粧一鬚盥・合子・髪油臺等、盆栽等一桶木鉢・水盤、小動物飼育一餌置鉢・仏壇等一仏飯器・香炉・仏花瓶・神酒徳利、夜間生活一灯明具、文字文化一水滴といった、日常生活の変化を示す様々な遺物が出土している。また、精製塩の容器である焼塩壺や大皿・盃洗等からは宴会が行われたことを窺える。焼塩壺はこれまで市内では飯田城内と座光寺恒川遺跡群からの出土がある。その出土は近世後期にはその使用が庶民にまで拡大した可能性が指摘されているが、それ以前は「城址、都市部の大名屋敷や寺院の遺跡に多く見られ、その社会的階層との関係が指摘されて」（小川 1992）おり、今次調査地点には飯田城内とは劣らぬ生活をする上級商家の姿を見て取ることが可能である。

## 5. 焼塩壺について

今次調査地点では2種類の焼塩壺が出土している。焼塩壺は、粗塙を土製容器に入れて焼くことによりニガリが除去された精製塩で、食卓塩として用いられた高級品とされる。この焼塩壺については、出土状況と容器生産の観点で問題提起が可能である。

まず、出土状況であるが、先に遺構の項目で若干触れたように遺物の時代性と遺構の時代性に著しい隔たりがある。焼塩壺は商品の生産・流通・消費のサイクルが短く、使い終わった時点で容器が廃棄されることから、時代性の尺度としてもっとも有効な焼き物と考えられている。「泉湊伊織」刻印の焼塩壺（蓋 I 類・身 II B 類）はその製作方法から、1710～1720年代（東京大学埋蔵文化財調査室 1998）ないし1720～1740年代（小林・両角 1992）の年代観が与えられ（その年代差の検討は本報告では行い得ない。本書では前者の年代観を下敷きにする）、18世紀前半位に位置づくものである。しかるに焼塩壺

が出土した遺構のうち、SK22・SK27はいずれも飯田大火時の大火灾掘坑であり、遺構と遺物の年代観に開きがある。また、両者がセットで使用されるものであるにもかかわらず、SK22に蓋、SK27に身が偏在していることは特異である。SK22・SK27と重複して18世紀前半の遺構があったとも考えられるが、蓋と身が偏在することについて納得できる説明がつかない。蓋・身とも破損があまりないことから、焼塩を使い果たした後に中身を詰め替えたとも考えがたい。使用後に容器が転用されたか、伝世されたのではないかと考えられる。

焼塩壺は付編のとおり、胎土の重鉱物組成分析の結果、蓋I類・蓋II類が角閃石の多いI型、身IIB類・身VII類が角閃石と酸化角閃石からなるI～II型に分析された。分析前には形態・法量・黒斑のつき具合から、蓋I類と身IIB類、蓋II類と身VII類がセットと考えたが、蓋と身とで組成が異なることが判明したわけである。これについてはいくつかの原因が考えられる。まず、蓋I類と身IIB類、蓋II類と身VII類がセットではない場合（別々の個体の存在）が考えられる。第2に、蓋と身が別々の場所で分業により作られた場合である。蓋と身に残された布目痕を比較すると、蓋I類・蓋II類が細かい布目なのに対して、身IIB類・身VII類が粗い布目である。第3に、蓋をせずに焼塩生産が行われ、製品ができてから蓋され出荷された場合である。第4に、使用時ないし廃棄後に蓋と身が受けた履歴が異なる場合である。第3・第4は、角閃石が二次焼成により酸化角閃石に変化しうるということから考えられることである。このうち第2・第3については、パリノ・サーヴェイ株式会社のこれまでの分析結果でセットであると想定された蓋と身について異なる分析結果が出たことがないということから、可能性は低い。現状では、SK22に蓋、SK27に身が偏在していることを考慮して、第4の可能性を指摘するにとどめたい。

今次調査出土の焼塩壺の蓋II類と身VII類については、これまで江戸遺跡からの出土はなく、小林謙一・小川望画氏から名古屋城三の丸遺跡（愛知県埋蔵文化財センター 1992・1993）に出土例があるとご教示いただいた。身VII類は名古屋城三の丸の身E類、蓋II類は同蓋A類のうち小型のものに類似すると考えられる。ただこの分類の基になった渡辺誠氏の分類では、小型の身E類には蓋が付かないとされている（渡辺 1985）。これまでの焼塩壺研究が江戸遺跡中心で行われてきたため、名古屋城三の丸遺跡の蓋A類・身E類の編年的位置は定まっていない。わずかに渡辺氏が「京都伏見産と推定される。一六世紀末を上限とし、一七～一八世紀のものと推定される」としている（渡辺 同前）程度である。積極的な根拠はないが、『泉湊伊織』の刻印を持つ蓋I類・身IIB類が名古屋城三の丸遺跡や江戸遺跡で出土しているのに対して、江戸遺跡では18世紀中葉以降関東産と考えられるロクロ成形の焼塩壺に変わること、さらに上記の焼塩壺胎土の重鉱物組成分析の結果、同じ和泉地域産と考えられることから、18世紀中葉以降の和泉地域産ととらえておきたい。

上述の18世紀中葉以降の関東での生産等、焼塩産地の拡大は庶民の食生活が大きく変化したことと関連するかもしれない。近世後期には焼塩が庶民のものへと転化していった可能性が指摘されている（小川 同前）。今次調査地点で18世紀前葉に遡る焼塩壺がまとめて出土したことは、当時高級品であった焼塩を相当量消費する商家の姿を表すが、これに続く時期と考えられる焼塩壺は江戸遺跡では庶民層まで消費が拡大した頃のものである可能性が高い。陶磁器類等他の遺物から、この時期に今次調査地点の商家では食生活はじめ生活全般が変化したことをうかがうことができるが、果たして焼塩の消費が庶民層まで広がっていたのかまでは分からぬ。ただ、このタイプの焼塩壺が名古屋城三の丸遺跡から出

土していることから、やはりこの時期でも高級品であったと考えることができ、飯田城下の賑わいや上級商家の隆盛ぶりを示すものといえる。

#### 6. その他の時代

調査結果の通り、近世以前については、城下町形成の過程で削平を受けて、遺構。遺物は断片的に遺存しているのみである。しかし、SM01と重複するSK17やSK32・SK43付近から弥生時代後期の遺物が出土しており、調査区の北西側に同時代の集落が広がると考えられる。また、他の時代についても、高位段丘上の他地区と同様の状況が考えられる。

#### 7. 今後の課題

前述したとおり、今次調査では様々な制約の中で、部分的に本発掘調査を実施した。その中で得られた大火や満水に関する知見は、きわめて大雑把ながら上述1のとおり整理された。1トレンチ付近では幾面もの大火整地層に恵まれながらも確認にとどまった一方で、本調査部分では大火整地層があり良好に遺存していなかったこと等により一面調査に終わった。これまでの市街地化の過程でどの程度地下に開発の影響が及んでいるかは個々個別の状況があろうが、可能な限り多層的な調査を行うことによって、城下町が幾度となく乗り越えてきた災害の痕跡を面的・経時的に捕捉することができる。これにより、遺構のより詳細な年代観を把握することが可能である。また多層的な調査により、母屋や土蔵等上部構造に関する情報もこれまで以上に把握できることが期待され、町屋の変遷や商家の消長をいっそう明らかにできよう。

個別の遺構の調査記録については、埋土に焼土・炭がどのように含まれるか等、性状をより客観化することが必要である。この作業により、大火整地層等がたとえ良好に遺存していないくとも、遺構の年代把握が進む。さらに遺構の新旧関係を合わせることにより、大火や満水の年代観についてのクロスチェックも可能となろう。

また、各遺構の性格や物資流通の実態等を明らかにするため、出土遺物について遺物の個別研究の他、定量的に生産地を把握することが必要である。

昭和22年の飯田大火によって城下町の多くが失われ、京風の文化をこよなく愛した城下の気風もまた忘れられつつある。そうした現実の中で、地方都市の空洞化現象が全国各地で雪崩状態で進展した20世紀末の世相を新しい世紀にどう変えられるのか、また飯田町に往時の賑わいを渴望する地域住民の声にどう答えていくのかは、政財界・行政が一体となって取り組まなければならない課題といえる。これからは、丘の上を活性化する諸事業が単なる経済投資にとどまるのではなく、城下町として培ってきた歴史的風土（飯田らしい風情・人情も含め）を明らかにし、保存・活用していくことが、社会紐帶としての、丘の上の復権に寄与すると考えられる。

本報告書にかかる調査は、かなり早い段階から調整を図ってきたにもかかわらず、土地利用の実態や許認可事務など外的要因もあり、現地での調査期間等様々な制約の中での対応を余儀なくされた。にもかかわらず、調査の結果は本文中に示したとおり、大火で消失してしまった飯田の歴史の多くを解き

明かす重要な糸口を得ることができた。今次調査地点周辺では、老朽化した建物の更新等再開発がさらに進行しつつある。今回の調査で成し得なかったより精緻な対応が、更に大きな成果、すなわち飯田の歴史そのものを解明することにつながると考えられる。市民・行政が一体となって埋蔵文化財を保護する、そうした不断の努力こそが、今次調査成果を活かすとともに、飯田らしさを取り戻す方策になると見える。

## 《引用参考文献》

### 第Ⅱ章関係

- 飯田高校考古学研究会 1975 「飯田市大門町遺跡調査報告」『下伊那考古学会会誌Ⅱ』
- 飯田市教育委員会 1977 『伊賀良中島平』
- 飯田市教育委員会 1979 『風越窯址』
- 飯田市教育委員会 1983 『酒屋前遺跡』
- 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1988a 『丸山遺跡』
- 飯田市教育委員会 1988b 『小垣外・八幡面遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991a 『公文所前遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991b 『ガンドウ洞遺跡 飯田城跡』
- 飯田市教育委員会 1992 『殿原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』
- 飯田市教育委員会 1996a 『富の平遺跡』
- 飯田市教育委員会 1996b 『中川遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』
- 伊坪達郎 1995 「菅沼定利と下伊那支配—城下の整備に力を注ぐ」『図説 飯田・下伊那の歴史』(上) 郷土出版社
- 大沢和夫 1956 「風越窯遺物発見記」『伊那』1956-8
- おさひめ書房刊 1976 『主税町のあゆみ』
- 小林正春 1995 「ゴミ穴は語る—①城内の食生活」『図説 飯田・下伊那の歴史』(上)
- 佐々木嘉和 1995 「ゴミ穴は語る—②廃城の時」『図説 飯田・下伊那の歴史』(上)
- 塩澤仁治 1992 『中馬で栄えた商工業都市 城下町飯田』 ほうずき書籍
- 下伊那教育会 1985 『親と子の下伊那史』
- 下伊那教育会 1988 『伝馬町遺跡』
- 下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史 第二卷』
- 下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史 第三卷』

下伊那歴史考古学研究所	1979	『飯田風越窯址』
高田久四郎	1966	「昔からの飯田の火事」『伊那』1966-8
中井 博	1995	「整う飯田城下町—毛利・京極氏の入封と城下町整備」『図説 飯田・下伊那の歴史』(上)
中井 博	1995	「町の広がり—城下町の発展と在郷町形成」『図説 飯田・下伊那の歴史』(上)
長野県教育委員会	1971	『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田地区』
長野県教育委員会	1973	『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田市内その2』
濱 泰仙編	1937	『飯田町史』伊那公論社
平沢清人	1972	『飯田城と近世の城下町』
村澤武夫	1954	『飯田の今昔家並帳』光文堂
八幡一郎	1972	『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究(上)』慶友社
山内尚巳	1989	『飯田藩』『藩史大辞典』第3巻中部編I 北陸／甲信越 雄山閣

### 第三・IV章関係

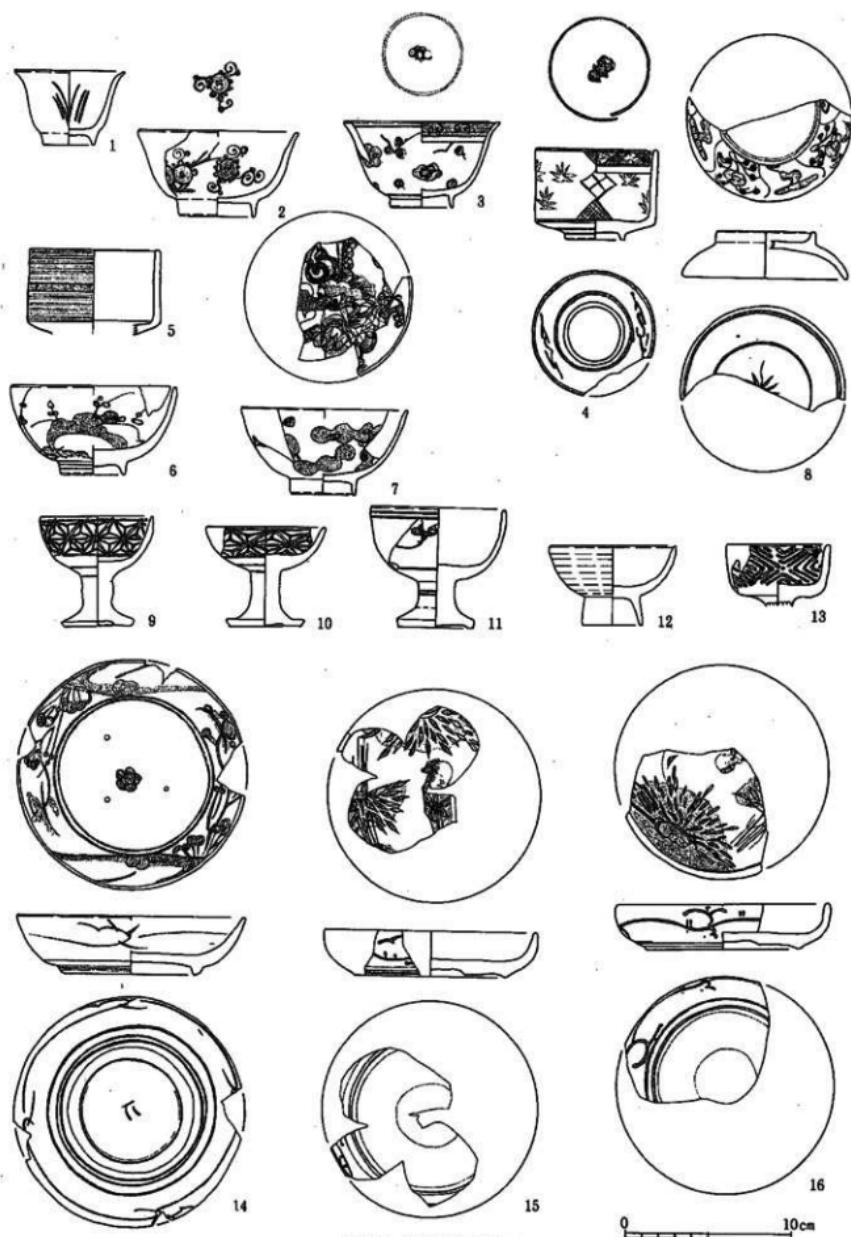
愛知県埋蔵文化財センター	1992	『名古屋城三の丸遺跡(III)』
愛知県埋蔵文化財センター	1993	『名古屋城三の丸遺跡(IV)』
飯田市美術博物館	1991	『伊那谷の土石流と満水』
飯田市美術博物館	1999	『文書目録(IV)』
江戸遺跡研究会	1990	『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会
江戸遺跡研究会編	1992	『江戸の食文化』吉川弘文館
江戸遺跡研究会編	2000	『江戸文化の考古学』吉川弘文館
(財) 大阪市文化財協会	1988	『大坂城跡』
大塚達朗	1988	「考古学的視点からの焼塩壺の検討」『東京の遺跡』19
大橋康二	1989	『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
大橋康二	1994	『古伊万里の文様』理工学社
大橋康二編	1996	『別冊太陽 色絵鉢』平凡社
小川啓司	1974	『そば猪口絵柄事典』光芸出版
小川 望	1992	「大名屋敷出土の焼塩壺」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編
小川 望	1995	『「泉湊伊織」の刻印をもつ焼塩壺について—法量分布による若干の考察—』『東京考古』13
小川 望	1996	「焼塩壺の“生産者”に関する一考察—「泉州磨生」の刻印をもつ焼塩壺を例として—」『古代』第101号 早稲田大学考古学研究会
小川 望	2000	「出土遺物から見る江戸の『タバコ』」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会
尾崎左永子	1993	「くらしの中の『源氏香』」「香と香道」香道文化研究会編 雄山閣
垣内光次郎	1994	「江州高嶋硯の生産」『江戸時代の生産遺跡』江戸遺跡研究会

加藤卓男	1975	『日本の陶磁 4 美濃』
加藤唐九郎	1985	『日本のやきもの 潤戸』淡交社
金子 智	1996	「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棟瓦の地方色」『古代』 第101号 早稲田大学考古学研究会
川路村水害豫防組合	1936	『川路村水防史』
北垣聰一郎	1987	『石垣普請』ものと人間の文化史58 法政大学出版局
北野信彦	1996	「近世町方社会における生活什器としての漆器資料」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』 第41号
吉良哲明	1981	『原色日本目類図鑑』保育社
熊倉功夫	1977	『茶の湯 わび茶の心とかたち』教育社 歴史新書81
建設省中部地方建設局他	1994	『天竜川上流 川路・龍江・竜丘地区 治水対策事業』
古泉 弘	1983	『江戸を掘る－近世都市考古学への招待』柏書房
古泉 弘	1987	『江戸の考古学』ニュー・サイエンス社
五島美術館	1984	『江戸のやきもの』
小林謙一・両角まり	1992	「江戸における近世土師質塩壺類の研究」『東京考古』10
柳 莫山	1981	『文房四宝 砥の話』角川書店
佐々木達夫	1977	「幕末・明治初頭の塩壺とその系譜」『考古学ジャーナル』134 ニュー ・サイエンス社
佐々木達夫	1987	「江戸へ流通した陶磁器とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告第14集』
塙澤正人	1990	「飯田椀」『長野県の諸職－長野県諸職関係民俗文化財調査報告書－』 長野県教育委員会
滋賀県教育委員会	2000	『辻野遺跡』
下伊那教育会編	1984	『下伊那谷 自然シリーズ 第1巻気象編』
新宿区市谷仲之町遺跡調査団	1992	『市谷仲之町遺跡Ⅱ』
新宿区厚生部遺跡調査会	1992	『細工町遺跡』
新宿区内藤町遺跡調査会他	1992	『内藤町遺跡』
新宿区立新宿歴史博物館	1993	『特別展 江戸のくらし－近世考古学の世界』
瀬戸市教育委員会	1990	『尾呂』
瀬戸市歴史民俗資料館	1986	『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要V』
瀬戸市歴史民俗資料館	1987	『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI』
瀬戸市歴史民俗資料館	1988	『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VII』
瀬戸市歴史民俗資料館	1989	『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VIII』
仙台市教育委員会	1985	『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』
高橋艶葉	1928	「堺の焼鹽壺」『中央史壇』14 - 3
田口昭二	1983	『美濃焼』ニュー・サイエンス社
田淵実夫	1975	『石垣』ものと人間の文化史15 法政大学出版局

筑摩書房刊	1976	『江戸時代図誌11 中山道二』
坪井俊弘	1976	『日本の瓦屋根』理工学社
東京大学埋蔵文化財調査室	1997	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
東京大学埋蔵文化財調査室	1998	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
東京都埋蔵文化財センター	1994	『丸の内三丁目遺跡』
東京都埋蔵文化財センター	1996	『尾張藩上屋敷遺跡I』
東京都埋蔵文化財センター	1997a	『汐留遺跡I』
東京都埋蔵文化財センター	1997b	『尾張藩上屋敷遺跡II』
東京都埋蔵文化財センター	1998	『尾張藩上屋敷遺跡III』
東京都埋蔵文化財センター	1999	『尾張藩上屋敷遺跡IV』
東京都埋蔵文化財センター	2000a	『汐留遺跡II』
東京都埋蔵文化財センター	2000b	『尾張藩上屋敷遺跡V』
東北大学埋蔵文化財調査委員会	1985	『東北大学埋蔵文化財調査年報1』
常滑市教育委員会	1986	『常滑市民俗資料館 研究紀要II』
内藤 昌	1976	「江戸の町屋」『江戸時代図誌5 江戸二』筑摩書房
長佐古真也	2000	「日常茶飯事のこと－近世における喫茶習慣素描の試み－」 『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会編
中野三敏	1995	「都市文化の爛熟」『岩波講座 日本通史 第14巻 近世4』 岩波書店
側長野県埋蔵文化財センター	1998	『金井城跡』『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
西田宏子・大橋康二監修	1988	『古伊万里』別冊太陽63 平凡社
日本塩業大系編集委員会	1977	「第二節 消費の方法」『日本塩業大系 特論民俗』
ニュー・サイエンス社刊	1985	『特集 江戸時代を掘る』『季刊考古学』第13号
ニュー・サイエンス社刊	1995	『特集 江戸時代の発掘と文化』『季刊考古学』第53号
林屋晴三	1983	『古陶磁のみかた 歴史と鑑賞』第一法規
降矢哲男	2001	「甲信地方における肥前陶磁の出土状況について」『国内出土の肥前陶磁－東日本の流通をさぐる－』九州近世陶磁学会
平凡社刊	1982	『日本やきもの集成2 東海 甲信越』
平凡社刊	1980	『日本やきもの集成3 濑戸 美濃 飛彈』
平凡社刊	1984	『やきもの事典』
平凡社刊	1996	『別冊太陽 骨董を楽しむ13 絵皿文様づくし』
平凡社刊	1997	『別冊太陽 骨董を楽しむ18 染付の粹』
平凡社刊	1998	『別冊太陽 骨董を楽しむ20 儂石のうつわ 向付と鉢』
平凡社刊	1999	『別冊太陽 骨董を楽しむ26 大壺 小壺』
平島裕正	1973	『塙 ものと人間の文化史7 法政大学出版局』
藤木正次編	1984	『硯の辞典』秋山叢書
前田長三郎	1934	「焼焼鹽壺考」『武藏野』21-3

間壁忠彦	1991	『備前焼』ニュー・サイエンス社
松本市教育委員会	1993	『お城がすき まつものが好き—松本城をめぐる文化財』
松本市教育委員会	1996	『松本城下町跡 伊勢町～近世・町屋跡の発掘調査～』松本市文化財調査報告No.122
三谷一馬	1979	『江戸物売図聚』立風書房
南川孝司	1976	『泉州淡麻生の壺焼塙考』『攝河内文化資料』1
三輪茂雄	1978	『臼』ものと人間の文化史25 法政大学出版局
森田 勉	1983	『焼塙壺考』『太宰府古代文化論叢』下
両角まり	1992	「Ⅲ - 5 土師質壺壺類」『シンボジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題 I』江戸陶磁土器研究グループ
矢作健二・植木真吾他	1994	「焼塙壺の研究（その 1）—胎土分析による問題提起とその検討—」 『日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集』
矢作健二・辻本崇夫	1996	「近世考古学における胎土分析の現状と課題—陶磁器を除く焼き物・土製品を例にして—」『江戸遺跡研究会会報』No.55
矢作健二・植木真吾他	1998	「近世江戸遺跡から出土した焼塙壺」『PALYNO』No.3 (株)パリノ・サーヴェイ
矢部良明編	1993	『やきものの鑑賞基礎知識』至文堂
渡辺 誠	1985	『焼塙』『講座・日本技術の社会史 第二巻 塩業・漁業』
渡辺 誠	1992	『焼塙壺』『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編

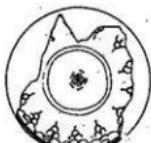




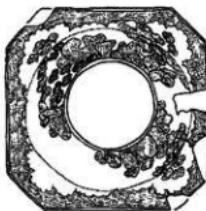
第1図 造構出土遺物(1)



17



18



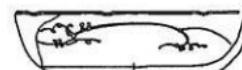
20



21



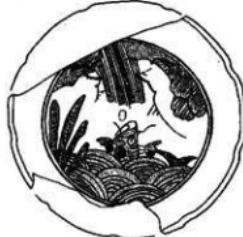
22



23



24

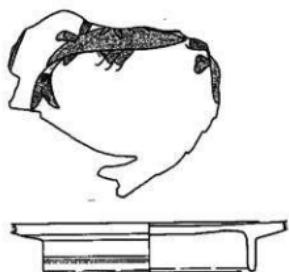


25



26

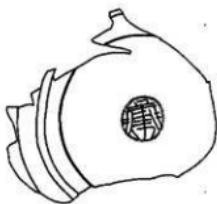
第2図 遺構出土遺物(2)



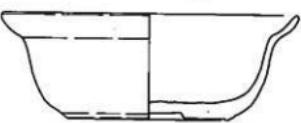
27



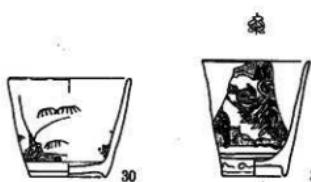
28



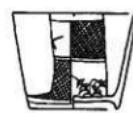
29



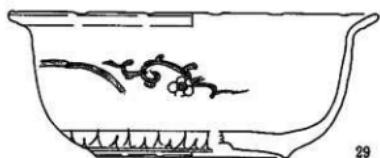
31



32

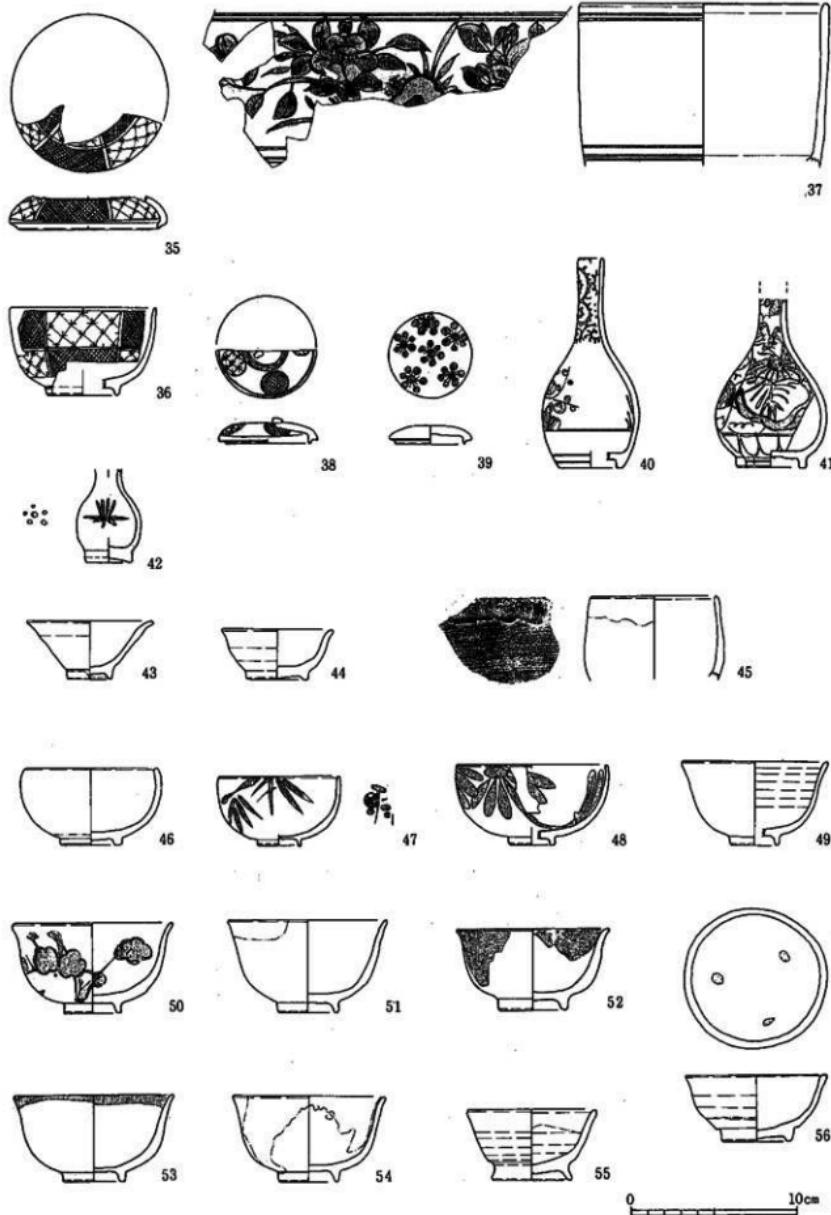


33



0 10cm

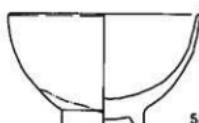
第3図 遺構出土遺物(3)



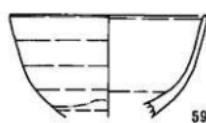
第4図 遺構出土遺物(4)



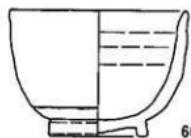
57



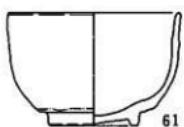
58



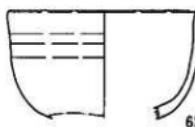
59



60



61



62



63



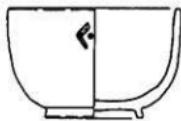
64



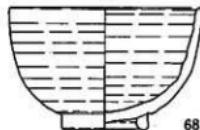
65



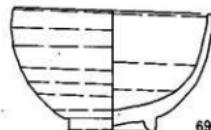
66



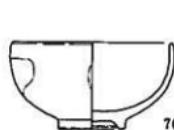
67



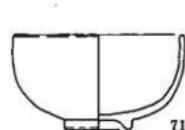
68



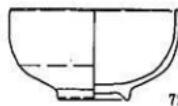
69



70



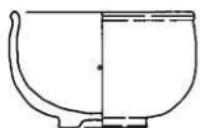
71



72



73



74



75



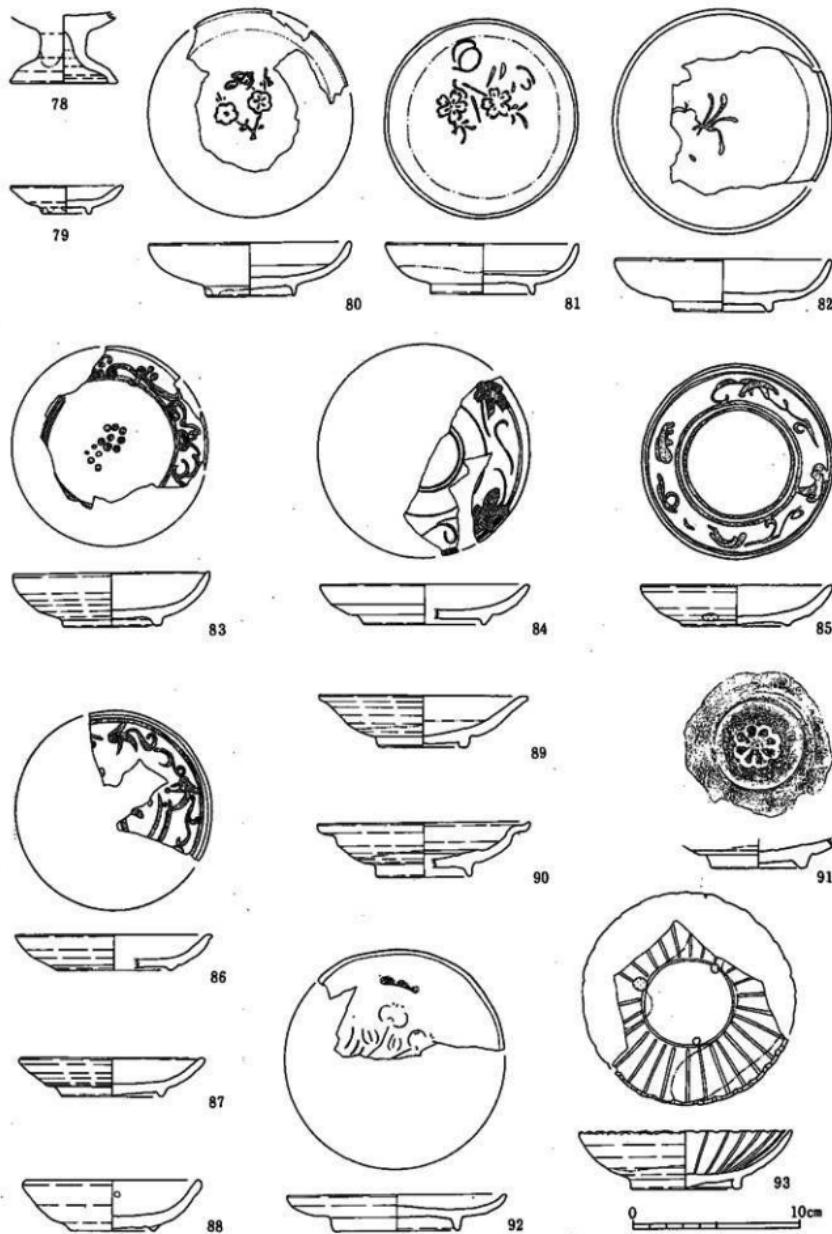
76



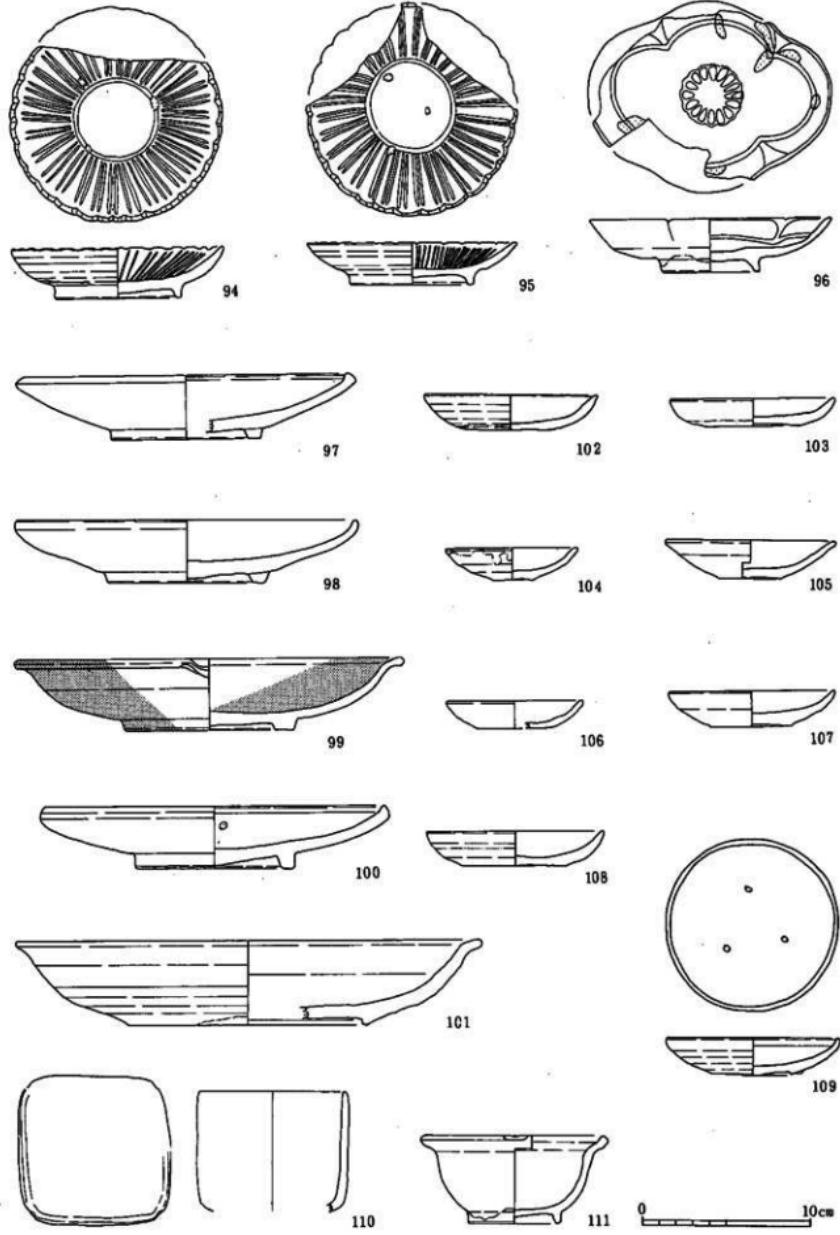
77



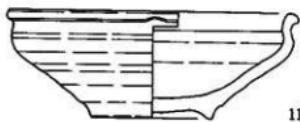
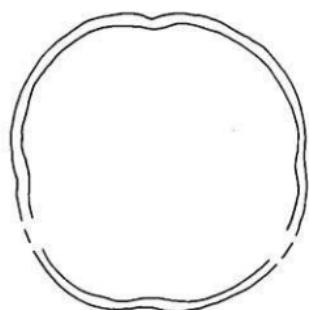
第5図 遺構出土遺物(5)



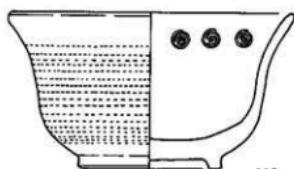
第6図 造構出土遺物(6)



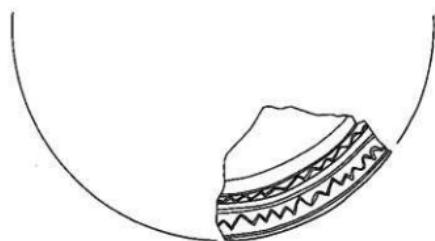
第7図 遺構出土遺物(7)



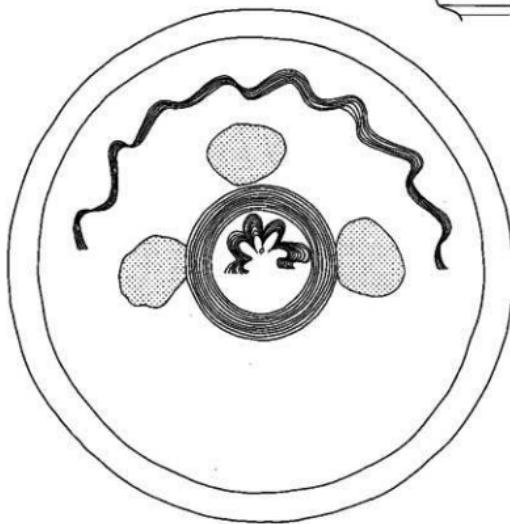
112



113



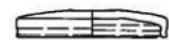
114



115



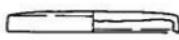
116



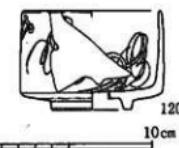
117



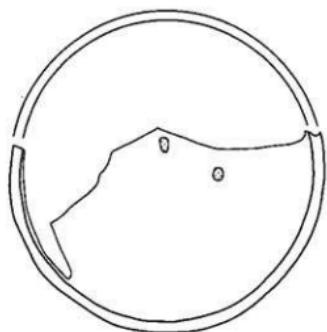
118



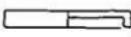
119



第8図 連携出土遺物(8)



121



122



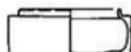
123



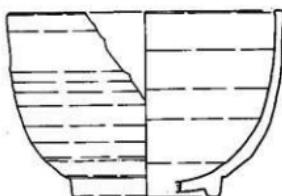
124



125



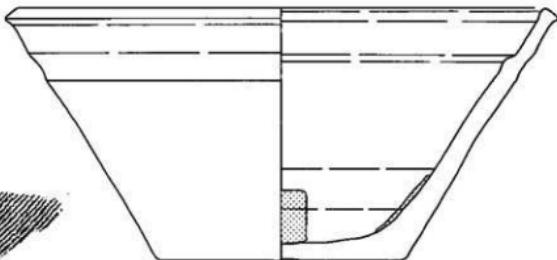
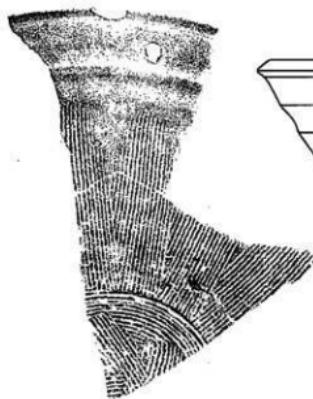
126



127



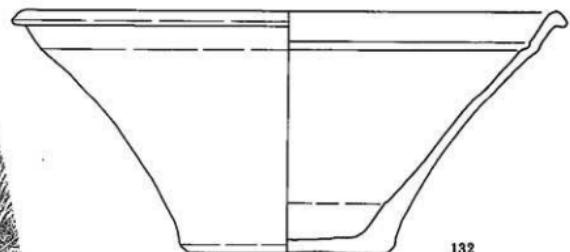
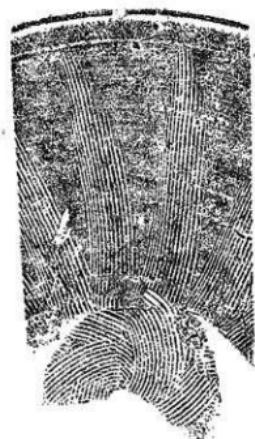
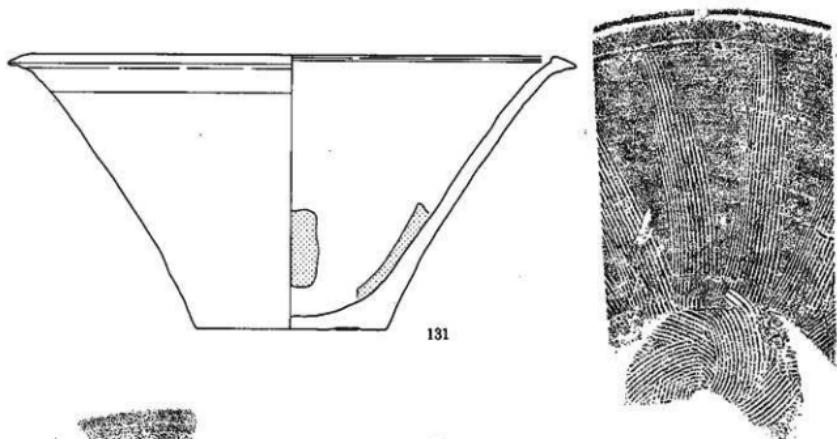
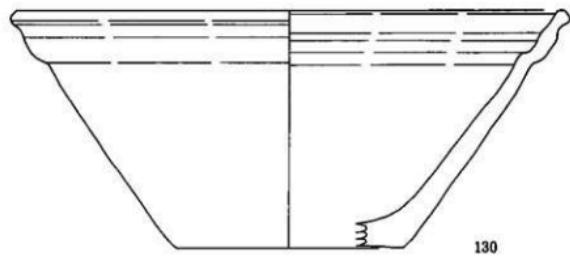
128



129

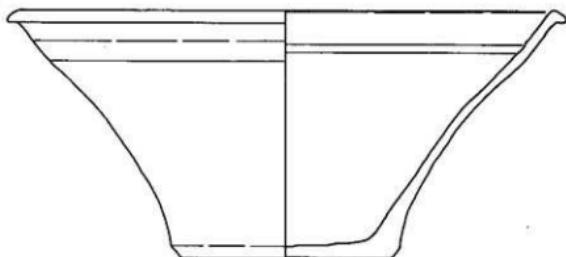
0 10cm

第9図 造構出土遺物(9)

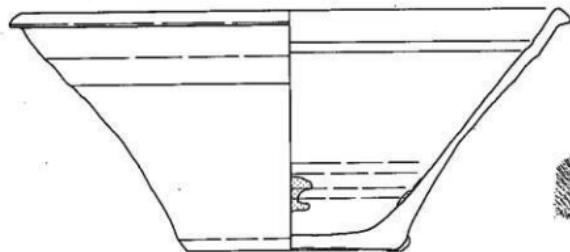


0 10cm

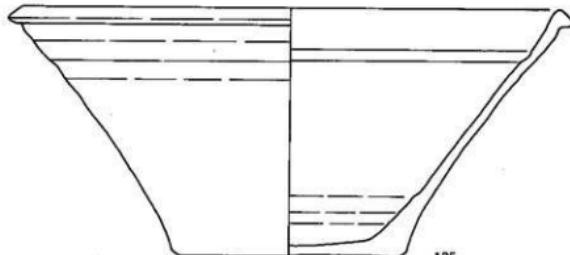
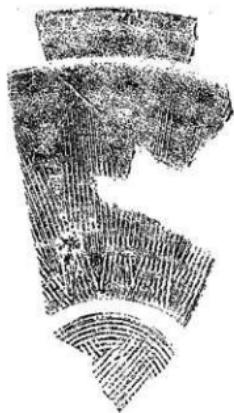
第10図 遺構出土遺物10



133



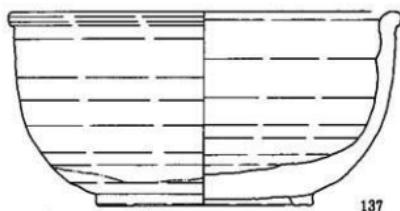
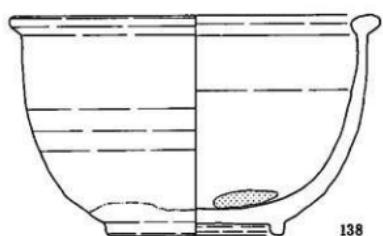
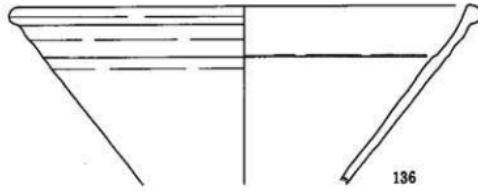
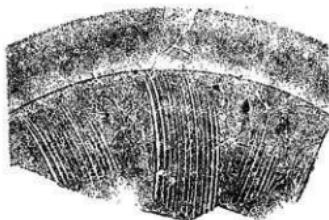
134



135

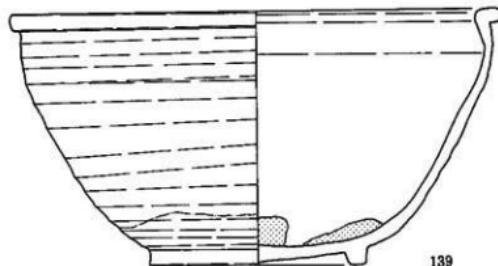
0 10cm

第11図 遺構出土遺物(1)

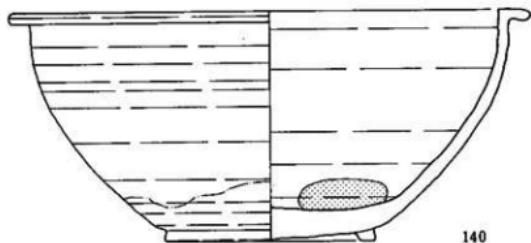


138

137



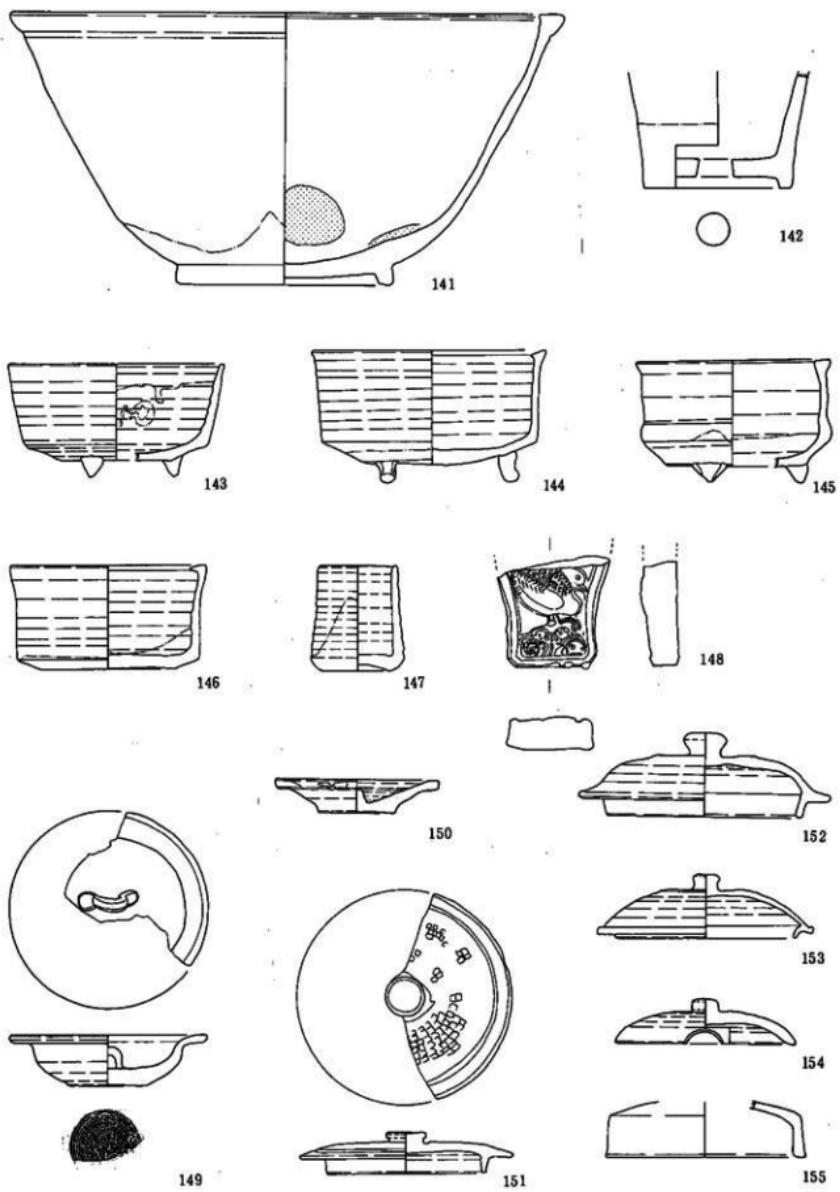
139



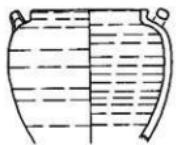
140



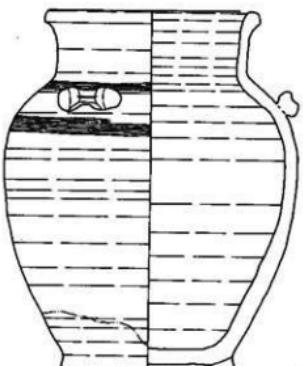
第12図 造構出土遺物12



第13図 造様出土遺物(1)



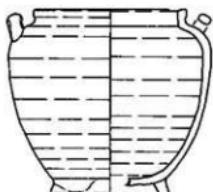
156



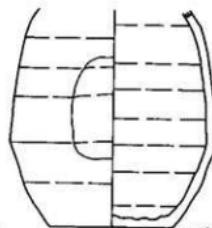
158



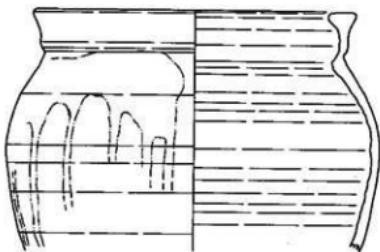
161



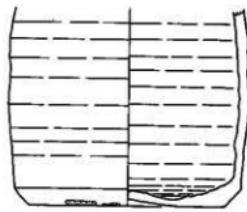
157



162



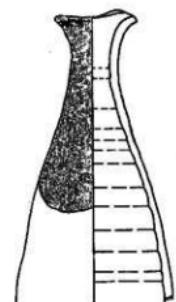
159



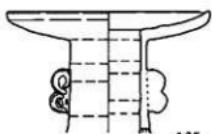
163



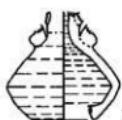
160



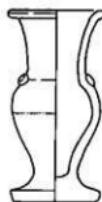
164



165



166

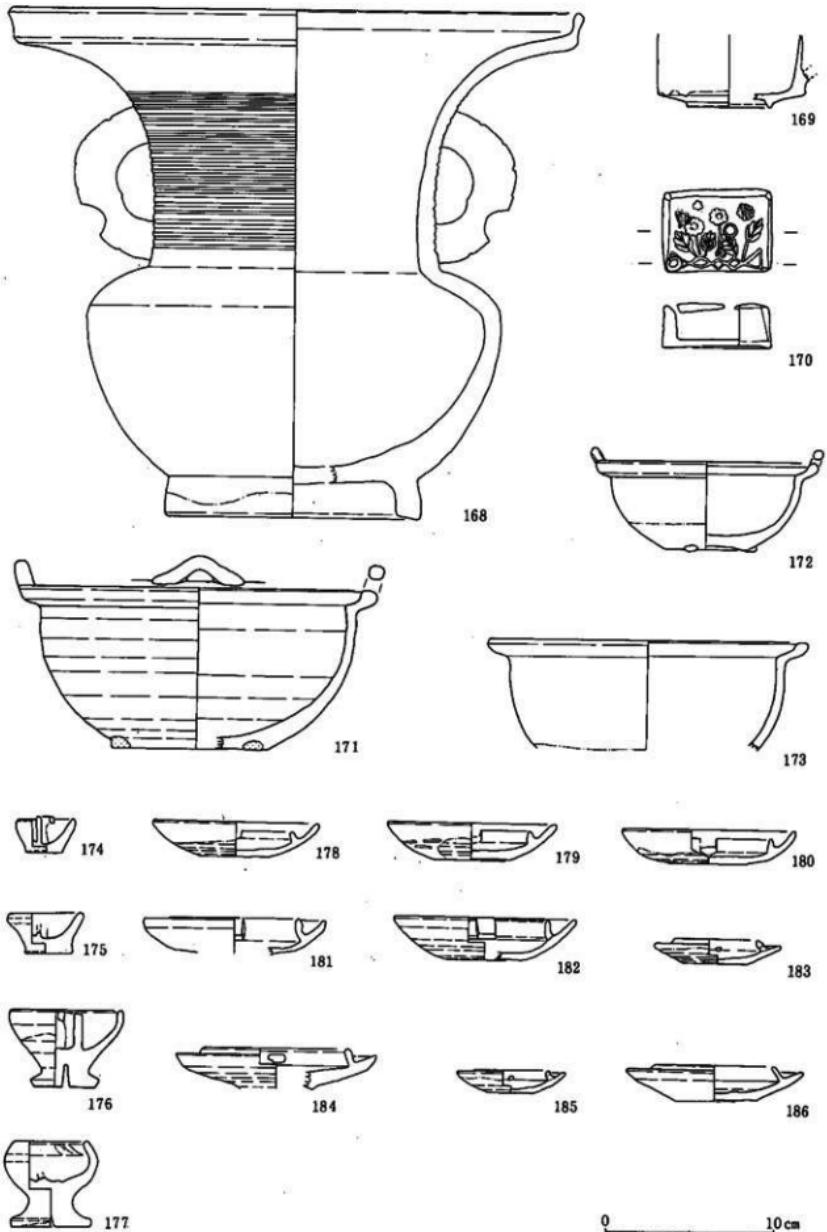


167

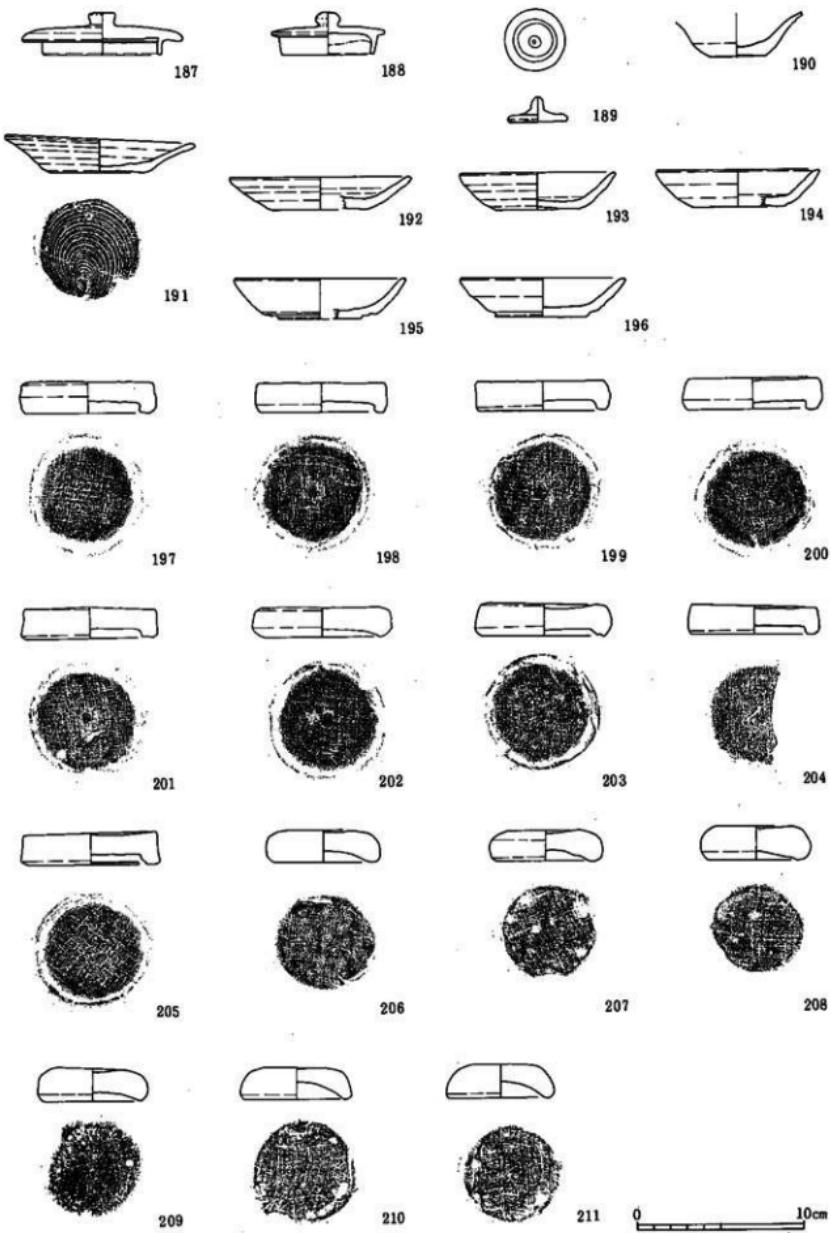
0

10cm

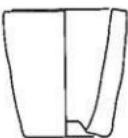
第14図 造構出土遺物(14)



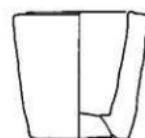
第15図 造構出土遺物(9)



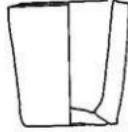
第16図 遺構出土遺物図



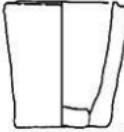
212



213



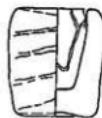
214



215



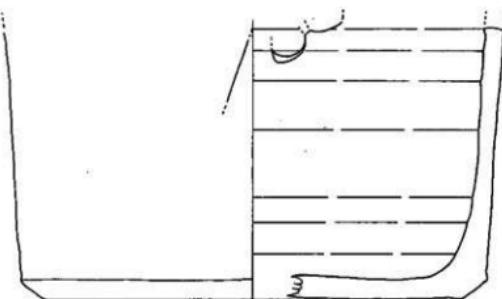
216



217



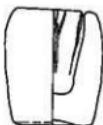
218



223



219



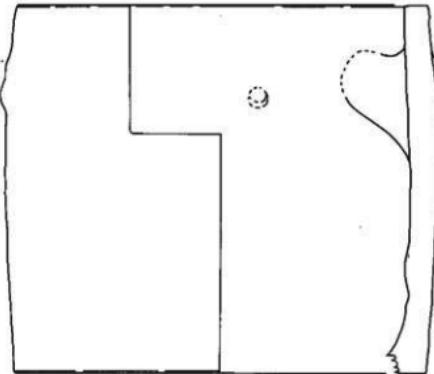
220



221



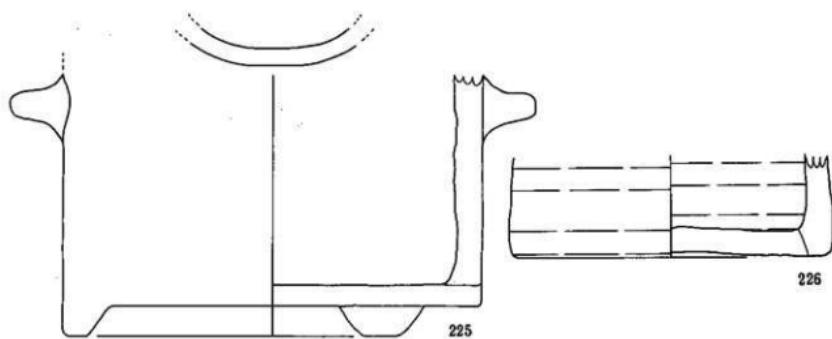
222



224



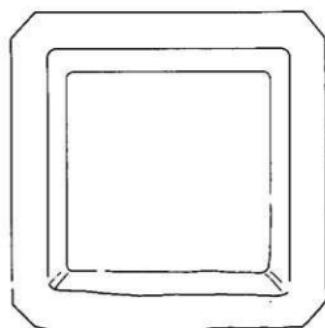
第17図 遺構出土遺物①



225

226

227

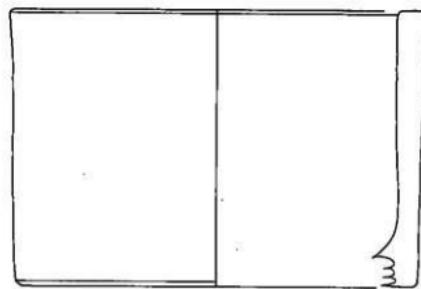


228

0 10 cm

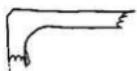
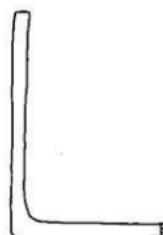
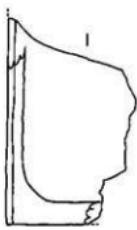
第18図 造構出土遺物18

— 98 —

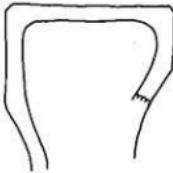


229

0 10 cm



230



231

0 10 cm



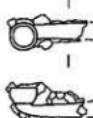
232



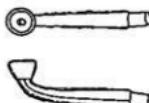
233



234



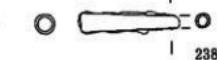
235



236



237



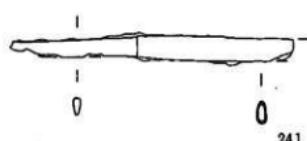
238



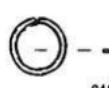
239



240



241



242



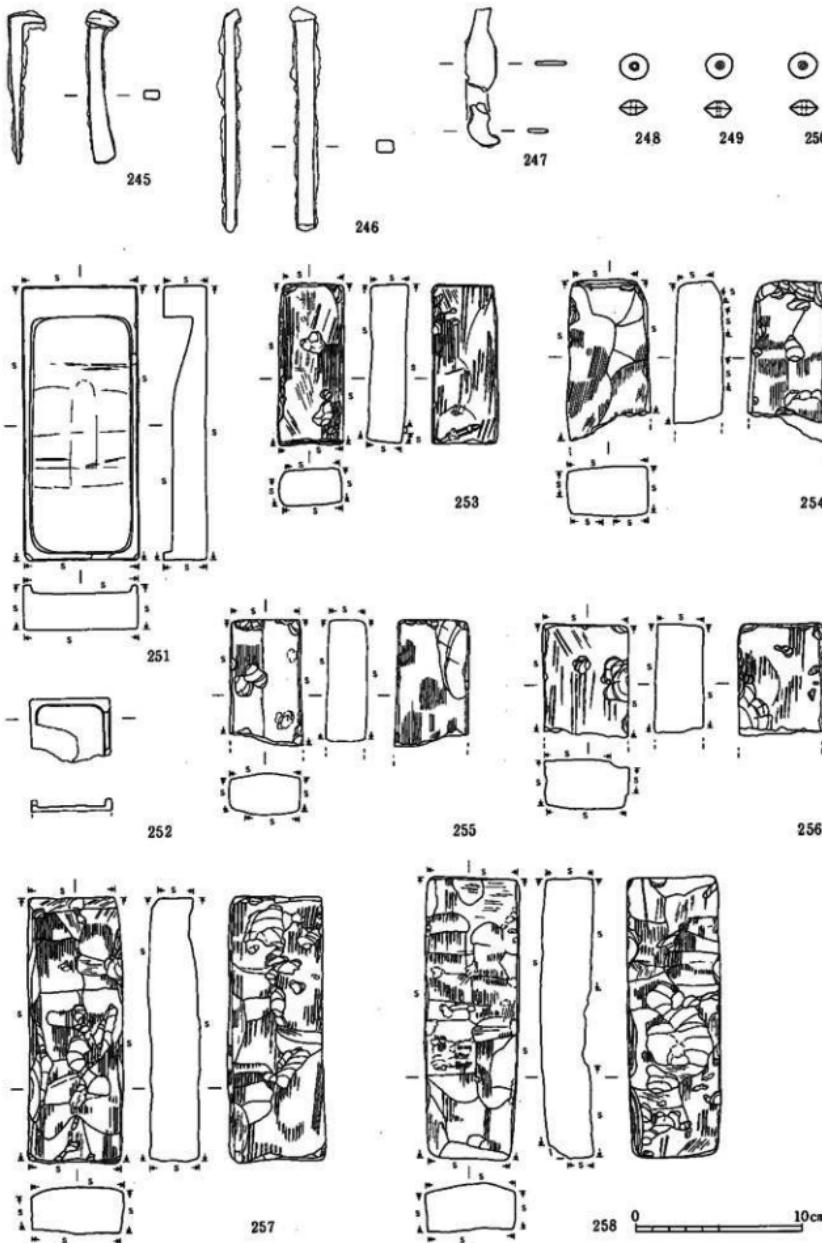
243



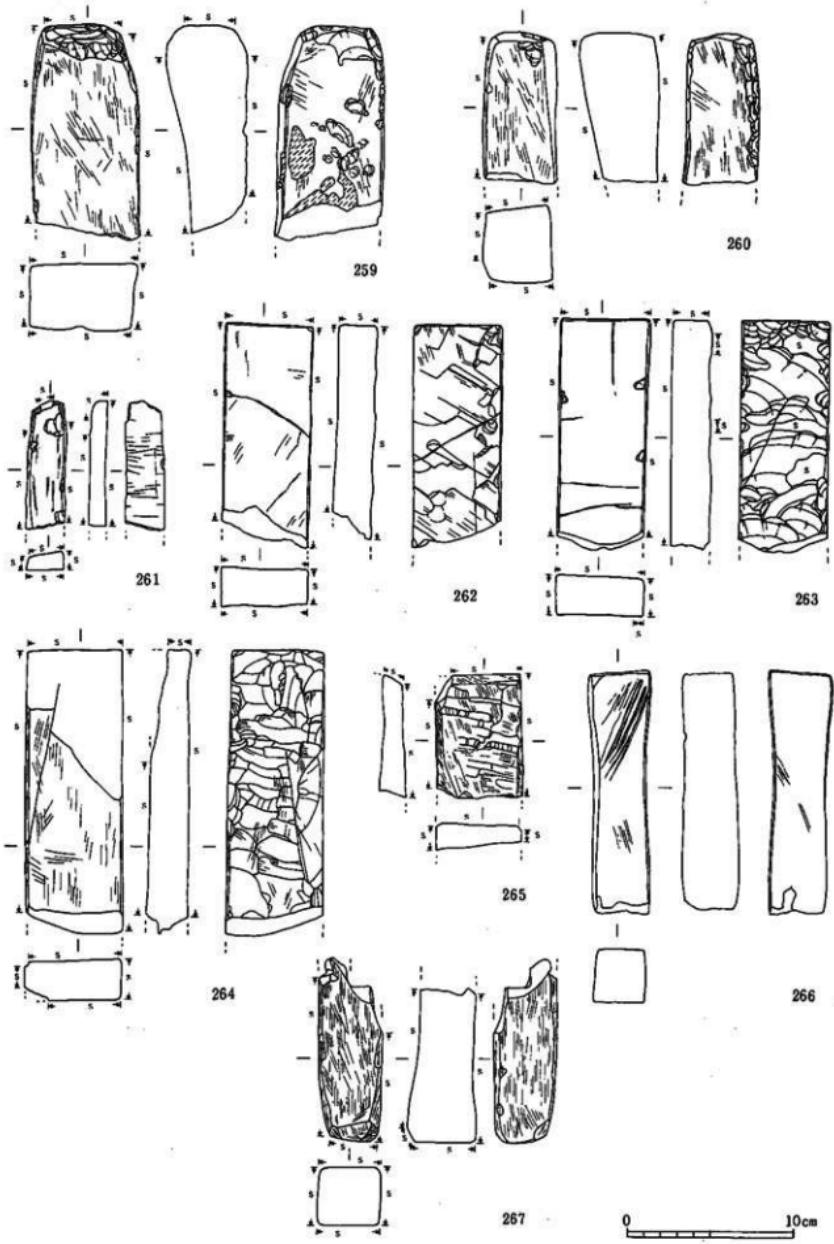
244

第19圖 這構出土遺物(5)

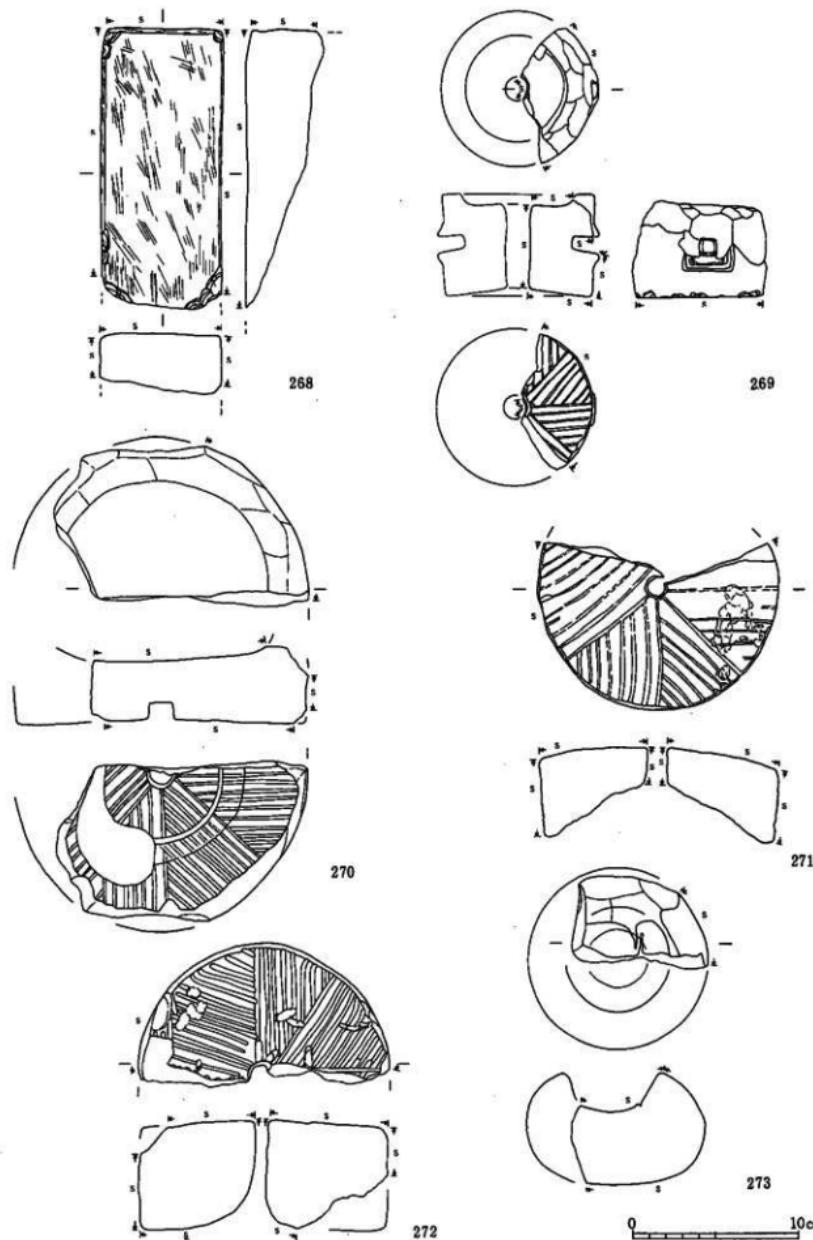
0 10 cm



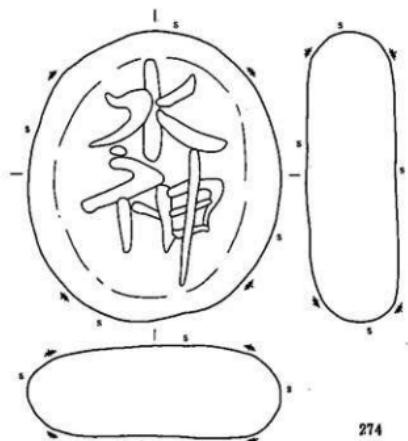
第20図 造構出土遺物(20)



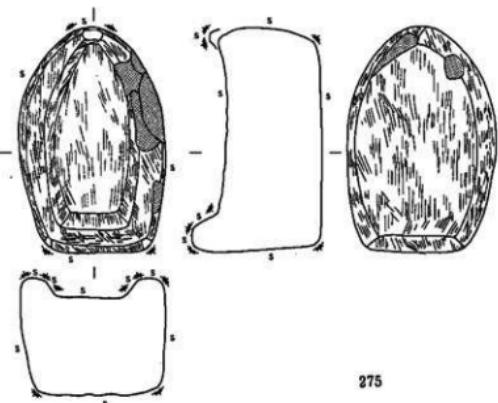
第21図 退構出土遺物21



第22図 遺構出土遺物(2)



274



275



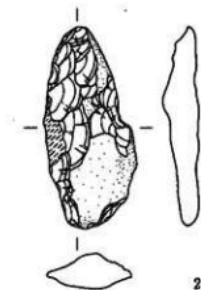
276



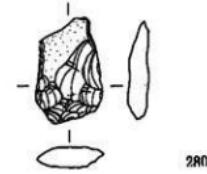
277



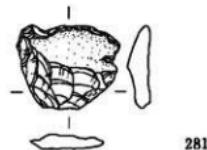
278



279



280



281

0 10cm

第23図 造構出土遺物(2)

追跡名	番	JIS標準色票	土 壤 色	土 性	しまり	粘 性	備	考
S K01	-	-	-	-	-	-		
S K02	-	-	-	-	-	-		
S K03	-	-	-	-	-	-		
S K04	-	-	-	-	-	-		
S K05	7.5YR3/2	黒褐色	S i C	やや良	あり	塊土多量。炭合む。		
S K06	7.5YR2/2	黒褐色	S i C	良	あり	炭、焼土やや多く含む。		
S K07	7.5YR2/2	黒褐色	S i C	良	ややあり	塊土、炭微分含む。黄土ブロック10%混。30~80cmの大きな塊を含む。		
S K08	10YR3/3	暗褐色	S i C	良	あり	炭を少含む。20~30cmの塊を含む。		
S K09	10YR5/6	黃褐色	S	不良	なし			
S K10	-	混	-	-	-	塊土、炭多量。瓦、海塩壁板あり。飯田大火。		
S K11	7.5YR4/4	褐色	H C	良	あり	塊土、炭混。鐵土スナ泥。		
S K12	10YR2/2	黒褐色	H C	良	あり			
S K13	1	7.5YR3/2	黒褐色	S	良	なし	炭、焼土を少量含む。	
	2	10YR2/3	黒褐色	S L	良	あり	炭、焼土を少含む。	
	3	10YR3/1	黒褐色	S i C	やや良	あり	炭、焼土を少含む。	
	4	10YR2/3	黒褐色	L i C	やや良	あり	黄土ブロック15%混。炭多く焼土を微量に含む。	
	5	10YR4/3	にいし黄褐色	H C	不良	あり	炭を含む。	
	6	10YR3/1	黒褐色	H C	やや良	あり	炭を多量に含む。	
	7	10YR5/6	黃褐色	H C	良	あり		
	8	7.5YR3/1	黒褐色	H C	不良	あり	炭多量に混。木片混。	
	9	10YR2/2	黒褐色	H C	やや良	あり	黄土ブロック5%混。	
	10	10YR5/6	黃褐色	H C	やや良	あり		
	11	5YR2/2	黒褐色	S i C	不良	あり	木片、炭を多量に含む。	
	12	10YR5/4	にいし黄褐色	H C	やや良	あり	炭を含む。	
	13	10YR3/2	黒褐色	S i C	やや良	あり	炭、木片を少量含む。	
S K14 · 23	1	5Y7/2	灰白色	S L	不良	なし	細砂粒主体層	
	1 a	5Y7/2	灰白色	S L	不良	なし	1層+砂利	
	1 b	5Y6/2	灰オリーブ	S L	不良	なし	1層+黒褐色土(少)	
	2	2.5Y7/4	浅黃	S	不良	なし	砂粒主体で観指大の小石を多く混入。	
	2 a	5Y7/3	浅黃	S	不良	なし	細砂粒主体でこぶし大の石を混入。	
	3	10YR4/2	灰黃褐色	L i C	不良	なし	やや粗質の粒子で構成され、炭化粒子(径5mm)を少量混入。	
	4	2.5Y3/1	黒褐色	C L	良	あり	炭化物粒、燒土粒(径3~10mm)を少量混入。	
	5	2.5Y5/6	明黃褐色	S i C L	良	あり	炭化物粒、燒土粒(径10mm)を少量混入。	
	6	10YR4/2	灰黃褐色	L i C	やや良	ややあり	炭化物粒、燒土粒(径3~10mm)を少量混入。	
	7	2.5Y6/6	明黃褐色	L S	やや良	なし	細砂粒主体層(地山よりしまり弱)	
	8	10Y3/3	暗褐色	L i C	不良	なし	大火粒、炭化物粒、燒土粒(径3~20mm)を多量に混入する。S K23の埋土。	
	8 a	10Y3/3	暗褐色	L i C	不良	なし	混入物が8層より少ない。S K23の埋土。	
	9	5Y7/3	浅黃	H C	良	あり	粘土粒+砂粒主体で、炭化物(5~30cm)、燒土粒(径10cm)を多量に混入。S K23の埋土。	
S K15	10YR3/1	黒褐色	H C	良	あり	炭、15%程度混。		
S K16	10YR3/3	暗褐色	S i C	やや良	なし	炭、焼土多量。新田大火。		
S K17	7.5YR3/2	黒褐色	L i C	不良	なし	地下室一気に埋め更し。西側は10YR5/6山砂。		
S K18	10YR2/2	黒褐色	L i C	不良	なし	飯田大火		
S K19	7.5YR3/2	黒褐色	S i C	良	ややあり			
S K20 · 37	1	10YR3/3	暗褐色	H C	良	あり	観指大の燒土粒を含む。径10mm大の炭化物粒を少量混入する。	
	2	10YR3/3	暗褐色	H C	やや良	ややあり	径1~5mm大の燒土粒、炭化物粒を少量混入する。	
	3	10YR3/3	暗褐色	H C	良	ややあり	径1~5mm大の燒土粒、炭化物粒を少量混入する。黄褐色土を少量含む。	
	4	10YR4/6	褐色	H C	良	ややあり	微細の燒土粒、炭化物粒(径1~10mm)を含む。	
	5	10YR3/3	暗褐色	H C	良	ややあり	燒土粒、炭化物粒(径2~5mm)を含む。	
	6	10YR3/3	暗褐色	H C	なし	ややあり	約5cm角の礫を多く混入する。極微量の燒土粒、炭化物粒を含む。	
	7	10YR3/3	暗褐色	L i C	やや良	ややあり	径5~30mmの大の燒土粒、炭化物粒を多量に混入する。炭化物も観察できる。	
	7 a	10YR3/3	暗褐色	L i C	やや良	ややあり	7層+黄褐色粘質土。	
	8	10YR5/8	黃褐色	S C L	良	なし	黄褐色細砂粒主体。	
	8 a	10YR5/8	黃褐色	S C L	良	なし	8層+少量の炭化物を混入。	
	9	10YR3/2	黒褐色	L i C	良	ややあり	こぶし大の石を数個、炭化物を多量に混入。	
	10	10YR4/3	にいし黄褐色	S C	やや良	ややあり	微量の炭化物粒(径3~5mm)混入。全体にばさつく。	

表 1 土層観察表(1)

地名	層	JIS標準色票	土壤色	土性	しまり	粘性	備考
SK20・ 37	11	10YR4/2	灰黄褐色	HC	良	ややあり	黄褐色土ブロック混入。褐鉄の沈着が部分的に認められる。
	11a	10YR4/2	灰黄褐色	HC	良	ややあり	小砂利が少量散在する。
	11b	10YR4/2	灰黄褐色	HC	良	ややあり	黄褐色土ブロック（径3~30mm）を多量に含む。
	11c	10YR4/2	灰黄褐色	HC	良	ややあり	黄褐色土ブロック（径3~30mm）を多量に含む。主体層。
	12	10YR4/2	灰黄褐色	HC	なし	ややあり	11C層に似るが砂利が多くギロゴロと崩れる。
	13	10YR4/2	灰黄褐色	HC	良	ややあり	下部はこぶし大の石が多い。黄褐色土粒（径1~5mm）を少量混入。
SK21	10YR2/3	黒褐色	SiC	良	ややあり	黄土ブロック40%、炭少量混入。	
SK22	-	-	-	-	-	-	燒土、炭多量。斎田大火
SK24	7.5YR2/2	黒褐色	SiC	不良	ややあり	-	上部に火災層被る。
SK25	10YR2/2	黒褐色	LiC	不良	ややあり	-	燒土、炭多く含む。轟あり。
SK27	-	-	-	-	-	-	斎田大火
SK28	10YR3/3	暗褐色	LiC	良	あり	-	
SK29	-	褐色	-	-	-	-	便所跡。底面に塗分等沈着。
SK30	10YR4/3	にぼい黄褐色	HC	良	あり	ロームブロック40%、炭混。	
SK31	10YR4/2	灰黄褐色	HC	良	あり	ロームブロック30%、炭微量。燒土混。	
SK32	10YR2/3	黒褐色	HC	良	あり	ロームブロック3%、炭混。	
SK33	10YR2/3	黒褐色	HC	良	あり	-	便所跡。
SK34	10YR2/2	黒褐色	LiC	不良	なし	-	斎田大火
SK35	-	-	-	-	-	-	
SK36	10YR2/2	黒褐色	HC	良	あり	現代。炭、燒土少量。	
SK38	-	-	-	-	-	-	
SK39	-	暗褐色	-	-	-	-	浅い。黒土混。
SK40	-	黒褐色	-	-	-	-	
SK41	-	-	-	-	-	-	
SK42	10YR3/2	黒褐色	LiC	良	なし	-	燒土、炭多量。
SK43・ 50	I	擾乱	-	-	-	-	擾乱
	II	7.5YR4/6	褐色	LiC	不良	ややあり	径3~20mmの大粒燒土を多量、径5~10mmの大粒炭化物粒を少量混入する。（大大理土）
	1	10YR2/1	黒	良	あり	-	白色の細粒子を少量混じる。SK50の埋土。
	2	10YR2/1	黒	SiC	やや良	あり	灰白色の細砂粒を多量混入する。SK50の埋土。
	3	2.5Y5/3	黄褐色砂質	SCL	やや良	なし	砂粒主体で少量の1層を混入する。SK50の埋土。
	4	10YR2/1	黒	SiC	不良	ややあり	1層に似るがしまりがなくバサつく。SK50の埋土。
	5	2.5Y4/2	暗灰黃褐色	CL	良	なし	黄褐色砂と黑色土が径1~5mmのマーブル状に混合した層。SK43の埋土。
	6	10YR2/1	黒	SiC	良	あり	砂利を少量混合する性は1層に同じ。SK43の埋土。
	6a	10YR2/1	黒	SiC	やや良	あり	6層に似るがしまりに欠けバサバサである。SK43の埋土。
	6b	10YR2/1	黒	SiC	やや良	あり	6層に似るが、進入物の量が多い。SK43の埋土。
	7	10YR2/1	黒	SiC	良	あり	1層に似るが粒子がさくらんばかり粘性が強い。SK43の埋土。
	7a	10YR2/1	黒	SiC	良	あり	7層+5a層のブロック。SK43の埋土。
	8	10YR4/1	褐色	SiC	良	あり	白色の粒子を少量混入し、全体に微細な粒子で構成される。SK43の埋土。
	9	10YR2/1	黒	SiC	良	あり	8層に似るが当層のほうが色調が暗い。SK43の埋土。
	10	10YR6/6	暗褐色	CL	やや良	あり	ロームブロック主体黒褐色土をブロックで混入するためマーブル状を呈す。SK43の埋土。
SK44	1	10YR5/6	黄褐色	HC	良	あり	暗褐色土5~6層。炭、燒土微量に含む。
	2	5YR3/1	黑褐色	HC	良	あり	黄褐色土5~6層。炭、燒土少量含む。
	3	10YR3/1	黑褐色	SiC	良	ややあり	炭多く、燒土少量。燒土ブロック僅かに含む。
	4	10YR4/2	灰黄褐色	HC	良	あり	炭、燒土少量。燒土ブロック僅かに含む。
	5	10YR1.7/1	黒	CL	不良	あり	
	6	10YR2/3	黑褐色	SiC	やや良	ややあり	炭少量含む。
	7	7.5YR3/2	黑褐色	HC	良	あり	底面に燒土、炭多量に集積。
	8	10YR4/2	灰黄褐色	S	やや良	なし	
SK45	10YR2/2	黒褐色	LiC	不良	あり	炭を含む。底面まで達せず。	
SK46	10YR3/3	暗褐色	SiC	良	ややあり	焼けている。	
SK47	10YR2/2	黑褐色	LiC	良	あり	炭、燒土微量。底面まで達せず。	
SK48	10YR2/2	黑褐色	LiC	やや良	あり	燒土、炭多量に含む。側壁焼け跡ある。	
SK49	-	-	-	-	-	-	
SK50	-	-	褐色	砂質	-	-	

表2 土層観察表(2)

造構名	層	JIS標準色票	土 壤 色	土 性	しまり	粘 性	備 考
S K51		-	-	-	-	-	
S K52	I	-	-	砂利	-	-	
	II	-	-	-	-	-	焼土、瓦、炭、礫多数混入。大火の土か?
	III	-	-	-	-	-	ロームブロック、炭化物、焼土、礫の混合土。大型の礫多し。
	IV	-	-	-	-	-	ロームブロック、炭、灰混じりの土。
	V	-	黒	-	-	-	造構剥り込み面と考えられる。遺物あり。
	VI	-	-	L	-	-	ローム断層層。
S K53		-	-	-	-	-	
S D01		-	-	-	-	-	
S D02		-	-	-	-	-	
S D03		-	-	-	-	-	
S D04		-	-	-	-	-	近代? 材料存。板ガラス溶けている。
S D05		-	-	-	-	-	
S D06		-	-	-	-	-	
S D07	7.5YR2/2	黒褐色	L i C	やや良	ややあり	水の洗れた痕跡(底面付近に細かい砂が認められる。)あり。	
S D08		-	-	-	-	-	
S D09	5YR2/1	黒褐色	S i C	良	あり		
S D10		-	-	-	-	-	
S D11		-	-	-	-	-	
S M01	7.5YR2/2	黒褐色	H C	不良	あり		
S E01	I	-	-	砂利	-	-	
	II	-	-	-	-	-	焼土、瓦、炭、礫多数混入。大火の土か?
	III	-	-	-	-	-	ロームブロック、炭化物、焼土、礫の混合土。大型の礫多し。
	IV	-	-	-	-	-	ロームブロック、炭、灰混じりの土。
	V	-	-	L	-	-	ロームの壁土状土。
A J43P1		-	褐色	-	-	-	
A J42P1		-	-	-	-	-	焼土、黄土。
A J43P1		-	-	-	-	-	焼土。

表3 土層観察表(3)

図版No	検出造構	種 別	分 類	法 量 (mm)			重 量 (g)	表面装飾	文 標			備 考
				a	b	c			色	調	位 置	
248	S K16	算盤玉	-	17	14	7	1	-	-	-	-	-
249	S K16	算盤玉	-	16	14	9	1	-	-	-	-	-
250	S K16	算盤玉	-	17	15	8	1	-	-	-	-	-

表4 木製品観察表

順序番号	検査出場	器種	分類		法量 (mm)				重量 (g)	成形	装飾技法			粘土色	製作		備考		
			形状特徴		a	b	c	d			釉付 透明	文様	装飾特徴		製作年	製作年代			
1	S K13	磁小碗	X I 反彌		66	44	32	-	?	輪縁	草	-	白	-	肥前系	1780~	-		
2	S K10 下唇	磁小碗	X I 端反彌		96	52	45	-	?	輪縁	染付 透明	内花 内文	-	白	-	肥前系	1780~	-	
3	S K10 S K26	磁小碗	X I 端反彌		94	51	37	-	?	輪縁	染付 透明	外 梅 花文	-	白?	-	肥前系	1780~	二次焼成	
4	S K10	磁小碗	II X I 半圓彌		73	54	36	73	?	輪縁 内腹	染付 透明	外草、 唐草、 内方番	-	白	-	肥前系	1750~	過呑	
5	S K16	磁小碗	II X I 半圓彌		76	?	?	-	?	輪縁	透明 輪縁	外燒接 口紅	(鉄)	白	-	肥前系?	近代?	セット関係 あり、過呑	
6	3トレ	磁中碗	I 丸形		101	54	39	-	?	輪縁	透明 染付	草花	-	白	-	肥佐見系	1710~	-	
7	S K45	磁うがい茶碗	II 平形、小瓶		104	51	39	-	?	輪縁	染付 透明	外 内 内花	-	白	-	肥前系	-	-	
8	S K10	磁中碗蓋	-		100	28	60	-	?	輪縁	染付 透明	花盆、 笠置?	-	見达織 織	花	-	肥前系	1750~	-
9	S K10	磁仏壇器	I 台底輪高台		70	66	41	-	?	輪縁	染付 透明	麻の葉	-	白	-	肥前系	1690~	10より身深 い	
10	S K10	磁仏壇器	I 台底輪高台		72	60	44	-	?	輪縁	染付 透明	麻の葉	-	白	-	肥前系	1690~	-	
11	S K13	磁仏壇器	I 台底輪高台		110	53	56	-	?	輪縁	染付 透明	草花	-	白	-	肥前系	1700~ 1800	-	
12	S K07	磁仏壇器	IV 高高台		75	48	36	-	?	輪縁	透明	-	-	白	-	肥前系	-	-	
13	S K10	磁仏壇器	?		66	?	?	-	?	輪縁	染付 透明	菱形文?	-	白	-	不明	-	買入あり、 周給染付	
14	S K07	磁中皿	I B 丸形、底中		126	33	82	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内草花	見达五 瓣花	灰	-	肥佐見系	1710~	胎土目3ヶ	
15	S K16	磁中皿	I C 丸形、底広 蛇ノ目凹形高台		126	27	90	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内縦子、 竹	-	白	-	肥前系	1770~	高台内輪、 砂目、16と セット	
16	S K16	磁中皿	I C 丸形、底広 蛇ノ目凹形高台		130	27	86	-	?	輪縁	染付 透明	外草花、 内縦子、 竹	-	白	-	肥前系	1700~	15とセット、 高台に砂目	
17	5トレ	磁小皿	I B 丸形、底中		103	35	58	-	?	輪縁	染付 透明	外原氏 香、内 山水	-	白	-	肥前系	-	目あと2ヶ以 上	
18	S K01	磁小皿	IX 豊形		85	16	48	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内如意頭	見达五 弁花	白	-	肥前系	1690~	-	
19	S K16	磁小皿	X IX H四方脚切		120	30	74	-	(150)	墨取り	染付 透明	外草花、 内松	-	白	大明 成化 年製	肥前系	17C末~ 18C前半	買入あり	
20	S K10 下唇	磁五寸皿?	V 端反彌? 蛇ノ 目凹形高台		?	?	81	-	?	輪縁	染付 透明	山水	-	白	-	肥前系	1770~	-	
21	S K16	磁五寸皿	I 丸形、蛇ノ目 凹形高台		136	37	84	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内花卉	-	白	-	肥前系	1770~	22とセット、 なます皿	
22	S K16	磁五寸皿	I 丸形、蛇ノ目 凹形高台		140	36	90	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内花卉	-	白	-	肥前系	1770~	21とセット、 なます皿	
23	S K22	磁中皿	I B 蛇ノ目凹 形高台(無輪)		144	41	89	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内花卉	-	白	二重 濃福	肥前系	1700~	24とセット、 砂目	
24	S K22	磁中皿	I B 蛇ノ目凹 形高台(無輪)		146	41	88	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内花卉	-	白	二重 濃福	肥前系	1700~	23とセット、 砂目	
25	S K22	磁中皿	I B 蛇ノ目凹 形高台(無輪)		142	46	84	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内輪、輪	-	白	二重 濃福	肥前系	1700~	10客セット、 砂目	
26	S K22	磁中皿	I B 蛇ノ目凹 形高台(無輪)		142	42	83	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内輪、輪	-	白	二重 濃福	肥前系	1700~	139とセット、 25と若干砂目 が異なる、砂目	
27	S K42	磁大皿	II 木面形		?	?	120	-	?	輪縁	染付 透明	魚	-	白	晋	肥前系	17C後半	セット関係 あり	
28	S K10 下唇	磁中皿	III 腰張形、底 広蛇ノ目凹形 高台(無輪)		180	60	96	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内波紋	見达織 織	白	二重 濃福	肥前系	1770~	焼継ぎ	
29	S K16	磁中皿	III 腰張形、底 広蛇ノ目凹形 高台(無輪)		224	86	114	-	?	輪縁	染付 透明	外唐草、 内波紋	-	白	-	肥前系	1770~	-	

表5 陶磁器觀察表(1)

留 番 号	検 査 機 構	器 種	分 類		法量 (mm)				重 量 (g)	成形 施 設	装 飾 技 法		胎 土 色	印 記 など	製 作 地	製 作 年 代	備 考	
			形状特徴	a b c d							染付 透明	草花		白				
30	S K07	磁口	I A 楕形、腹輪 高台	74	60	50	-	?	織輪	染付 透明	草花	?	白	?	肥前系	1750~	-	
31	S K10	磁口	I A 楕形、腹輪 高台	64	71	38	-	?	織輪	上給付 透明	花卉?	見达尾虫	白	-	肥前系	1780~	色繪・上繪付 (五戸給付)	
32	S K45	磁口	I A 楕形、腹輪 高台	74	65	52	-	?	織輪	染付 透明	外草文	-	白	-	肥前系	1700~	-	
33	5 ト レ	磁口	I A 楕形、腹輪 高台	74	61	50	-	?	織輪	染付 透明	草・斜格子	-	白	-	肥前系	1700~	-	
34	S K23	磁口	II A 腹張形	72	55	36	-	?	織輪	染付 透明	草花?	-	白	-	肥前系	18C 中~	胎裏厚め	
35	S K16	磁蓋物蓋	口唇かえし 横拘り	95	?	?	84	?	織輪	染付 透明	区画簡 (新杵子、 市松簡 目文)	-	白	-	肥前系	1780~	36とセット	
36	S K16	磁蓋物	-	86	52	?	-	?	織輪	染付 透明	区画簡 (新杵子、 市松簡 目文)	-	白	-	肥前系	1780~	35とセット	
37	S K13	磁蓋物身	III 半筒形	148	?	?	-	?	織輪	染付 透明	外輪	-	白	-	肥前系	-	上手・S K 23・S K 36 と接合	
38	S K16	磁合子蓋	口唇かえし	59	16	?	50	?	織輪	染付 透明	区画簡 (新杵子、 市松簡 目文)	-	白	-	肥前系	1780~	-	
39	Z Z Z	磁合子蓋	無構み	50	11	-	42	21	織輪	染付 透明	梅花	-	白	-	肥前系	-	-	
40	S K01	磁小瓶	II 腹張形	15	125	40	60	?	織輪	染付 透明	上絞付 草花	-	白	-	肥前系	1700~	-	
41	S K01	磁小瓶	?	?	?	40	66	?	織輪	染付 透明	花卉	-	白	-	肥前系	-	-	
42	S K17	磁神酒罈	-	?	?	27	38	?	織輪	染付 透明	-	-	白	-	瀬戸・ 美濃系	1808~	-	
43	S K16	陶小坏	X I 端反形	60	34	26	-	?	織輪	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1780~	-	
44	S K25	陶小坏	X I 端反形	66	30	37	-	?	織輪	右屈輪	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1780~	-
45	Z Z Z	陶小坏	II 腹張形	60	?	?	-	?	織輪	鉄輪	外輪文 様	ローラー 等による 遺文	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1750~ 1860	難茶碗	
46	搅 亂	陶小坏	V 半球形	60	47	36	-	?	織輪	灰釉	負有 鉄輪	-	白	-	京・信 濃系	-	慕香、貢入	
47	S K22	陶小坏	VI 浅半球形	76	40	26	-	?	織輪	竹・梅	上給付	灰?	-	京・信 濃系	1730~	二次焼成		
48	S K45	陶小坏	VI 浅半球形	89	50	30	-	?	織輪	色绘 透明	外花卉	上給付	黄灰	-	京・信 濃系	1740~ 1800	セッタ関係あり、 外面に胎土目2 ヶ以上、貢入	
49	S K26	陶小坏	X I 端反形	87	50	30	-	?	織輪	灰釉	-	-	灰	-	京・信 濃系	1780~	-	
50	S K10	陶小坏	X I 端反形	96	55	35	-	?	織輪	灰釉	内外施 花文	-	褐	-	萩系?	1780~	湯呑	
51	S K10	陶小坏	X I 端反形	88	59	37	-	?	織輪	灰釉	須口繩 接合	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系?	1780~	S K26、54地 とセッタ、湯 呑、陶胎染付	
52	S K10	陶小坏	X I 端反形	92	51	39	-	?	織輪	滑稽	長須口繩 接合	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系?	1780~	54とセッタ? 陶胎染付	
53	S K16	陶小坏	X I 端反形	99	52	37	-	?	織輪	透明	長須口繩 接合	-	灰	-	肥前系?	1860~	セッタ関係あ り、陶胎染付	
54	S K26	陶小坏	X I 端反形	90	52	35	-	?	織輪	透光	長須口繩 接合	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系?	1780~	53とセッタ、 陶胎染付	
55	S K34	陶小坏	X I 端反形	86	40	48	-	?	織輪	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1780~	セッタ関係あ り、胎土?	
56	S K42	陶小坏	X I 端反形	85	45	41	-	?	織輪	铁釉	-	-	褐灰	-	瀬戸・ 美濃系	1780~	胎土目3ヶ	
57	S K13	陶中碗	I 丸形	107	60	45	-	?	織輪	染付 透明	草花	-	白	-	肥前系	-	貢入	
58	S K13	陶中碗	I 丸形	116	69	48	-	?	織輪	網目	-	-	灰	-	59とセット	-		

表 6 陶磁器觀察表(2)

器 種 名	機 出 銘	器 種	分類		法盤 (mm)		重量 (g)	成形 物質	装飾 文様	技術 法	粘土 色	製作		備考			
			形状特徴		a	b	c	d				印・號	製作地	製作年代			
59	SK42	陶中碗	I丸形		120	?	?	-	?	織錦	鉄輪	-	-	灰	-	肥前系? 58とセット	
60	SK13	陶中碗	II腰張形		120	73	60	-	?	織錦	灰輪	なし	?	白	?	瀬戸・美濃系? -	
61	SK13	陶中碗	II腰張形		105	68	53	-	?	織錦	灰輪	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系 1700~ 買入	
62	SK13	陶中碗	II腰張形		115	?	?	-	?	織錦	鉄輪	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系 1700~ 肥土目1ヶ以上	
63	SK13	陶中碗	II腰張形		108	70	56	-	?	織錦	灰輪	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系 1700~ 61とセット? 買入	
64	SK13	陶中碗	II腰張形?		?	?	53	-	?	織錦	鉄輪	-	-	灰	清水	肥前系 17C後半	
65	SK13	陶中碗	II腰張形?		?	?	53	-	?	織錦	鉄輪	-	-	灰	藍	肥前系 17C後半 64とセット? 肥土目 京焼風	
66	SK13	陶中碗	II腰張形		102	66	53	-	?	織錦	鐵輪	山水	-	模様	清水	肥前系 1700~ 京焼風	
67	SK13	陶中碗	II腰張形		102	64	58	-	?	織錦	灰輪	?	-	灰	-	瀬戸・美濃系 1700~ 高台内に墨呂円文、買入	
68	SK34	陶中碗	II腰張形		115	74	52	-	?	織錦	石瓶	鉄輪	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系 1700~ -
69	SK42	陶中碗	V半球形		121	71	51	-	?	織錦	鉄輪	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系 1730~ 二次焼成	
70	SK07	陶中碗	V半球形		96	53	40	98	?	織錦	灰輪	織錦のふ	-	灰	-	瀬戸・美濃系 1730~ -	
71	SK22	陶中碗	V半球形		105	57	40	-	?	織錦	鉄輪	なし	?	白	?	瀬戸・美濃系 1730~ -	
72	SK22	陶中碗	V半球形		104	52	42	-	?	織錦	灰輪	なし	?	白	?	瀬戸・美濃系 1730~ -	
73	SK10	陶中碗	X I 踏反形		109	62	40	-	?	織錦	鉄輪	外裏性 灰輪	縦輪掛 流し、口缸	灰	-	瀬戸・美濃系? 1800~ -	
74	SK45	陶中碗	III板輪形		103	70	53	-	?	織錦	鉄輪	-	-	灰	高台 に印	京・信 濃系 - 肥土目3ヶ	
75	SK22	陶蓋物	II部張型		105	76	54	110	?	織錦	灰輪	?	?	灰	-	不明 - 二次焼成	
76	SK10	陶中碗	III X I 織錦厚唇形		96	60	40	-	?	織錦	灰輪	山水・鳥? (内面および外面 の一部)	灰場	-	京・信 濃系 ~19C前 葉?	-	
77	SK07	陶小环	X平形		64	25	28	-	?	織錦	灰輪	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系 - 見込みに铁環付番、伝用	
78	SK34	陶仏断頭	III台底抉り込み		?	?	63	-	?	織錦	鉄輪	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系 1750~ 買入	
79	SK16	陶極小皿	I A丸形、狭狭		68	17	31	-	35	織錦	灰輪	-	-	白	-	瀬戸・美濃系? -	
80	SK16	陶小皿	I A丸形、狭狭		120	33	53	-	?	織錦	灰輪	内輪・ 内盆	型輪滑	灰	-	瀬戸・美濃系 1800~ -	
81	SK22	陶小皿	I A丸形、狭狭		116	28	60	-	?	織錦	鉄輪	板	型輪滑	白	?	瀬戸・美濃系 - 灯罩面に転用 と思われる	
82	SK27	陶小皿	I A丸形、狭狭		128	31	58	-	?	織錦	灰輪	草花?	?	灰	?	瀬戸・美濃系? 1800~ 買入	
83	SK01	陶小皿	I B丸形、底中		122	33	58	-	?	織錦	灰輪	内底草・ 梅花文	-	灰	-	瀬戸・美濃系 - 買入	
84	SK07	陶小皿	I B丸形、底中		122	24	70	-	?	織錦	鉄輪	唐草	-	灰	-	瀬戸・美濃系 -	
85	SK44	陶小皿	I B丸形、底中		115	24	64	-	133	織錦	鉄輪	唐草	?	灰黒	?	瀬戸・美濃系 - 外面に肥土 目3ヶ	
86	AK41	陶小皿	I B丸形、底中		114	23	70	-	?	織錦	鉄輪	唐草	-	灰	-	瀬戸・美濃系 - 肥土目2ヶ以 上	
87	Z Z Z	陶小皿	I B丸形、底中		111	23	60	-	?	織錦	鉄輪	灰輪	-	灰	-	瀬戸・美濃系 -	
88	復 亂	陶小皿	I B丸形、底中		110	31	53	-	?	織錦	灰輪	-	-	灰~ 黒	-	肥土目、高台 内に墨トシ	
89	SK13	陶小皿	V端反形		125	32	54	-	?	織錦	鉄輪	内輪ハ ゲ	灰	-	瀬戸・ 美濃系 1690~ -		
90	SK42	陶小皿	VII折縫形		130	31	50	-	?	織錦	志野	内輪ハ ゲ	灰	?	瀬戸・ 美濃系 -		

表7 陶磁器觀察表(3)

留号	検出構	器種	分類		法量(mm)		重量(g)	成形	装飾技法		胎色	印・铭など	製作地	製作年代	備考		
			形状特徴	文様	a	b			輪内花印	内輪ハゲ							
91	SK24	陶小皿	I B 丸形絞中	?	?	57	-	?	織紋	鉄胎	内輪花印	灰	-	瀬戸・美濃系	-	見込み高台に 海苔目、SK25 に同一セット	
92	SK08	陶小皿	IX盤形	132	21	80	-	?	織紋	鉄胎 灰胎	芥子 型輪滑	白	?	瀬戸・ 美濃系	-	-	
93	SK13	陶小皿	X IX D変形、菊 花形	128	36	66	-	?	織紋	鉄胎 灰胎	輪胎掛 流し	灰	-	瀬戸・ 美濃系?	-	胎土目3ヶ	
94	SK13	陶小皿	X IX D変形、菊 花形	126	30	76	-	?	織紋	鉄胎 灰胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	胎土目3ヶ	
95	3トレ	陶小皿	X IX D変形、菊 花形	126	26	75	-	?	織紋	鉄胎 灰胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系?	-	胎土目3ヶ	
96	SK13	陶小皿	X IX木瓜形	137	34	58	111	?	作り	鉄胎	内輪花 印	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	18C	花菱形輪花
97	SK16	陶中皿	I丸形	210	39	90	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	96とセット? 貝目	
98	SK16	陶中皿	I丸形	214	38	100	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	97とセット? 貝目	
99	SK44	陶中皿	V端反形	232	46	102	?	?	織紋	鉄胎 灰胎	-	掛分	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	胎土目2ヶ以 上
100	3トレ	陶中皿	I丸形	210	37	90	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	行灯皿に転用、胎土目	
101	SK13	陶大皿	V端反形	300	48	160	-	?	織紋	鉄胎	なし	?	灰	?	瀬戸・ 美濃系?	-	胎土目1ヶ 以上
102	SK10	陶灯明皿	IV平形無高台	104	21	48	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	京・信 濃系	-	胎土目3ヶ、 円錐ビン	
103	SK13	陶灯明皿	I無高台、平形	100	15	54	-	(90)	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	-	
104	SK16	陶灯明皿	I無高台、平形	80	19	24	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	京・信 濃系	-	貢入	
105	SK16	陶灯明皿	I無高台、平形	102	23	36	-	66	織紋	鉄胎	-	灰	-	京・信 濃系	-	胎土目3ヶ	
106	SK16	陶灯明皿	I無高台、平形	82	17	40	-	?	織紋	鉄胎	-	青灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	-	
107	SK16	陶灯明皿	I無高台、平形	100	22	50	-	?	織紋	鉄胎	-	灰白	-	京・信 濃系?	-	糸切底	
108	SK18	陶灯明皿	I無高台、平形	110	20	62	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	胎土目	
109	SK13	陶灯明皿	Vクリ底、平形	104	24	47	-	(95)	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	円錐ビン	
110	SK13	陶小鉢	四方八角鉢	90	?	?	?	?	作り	鉄胎	?	灰	?	瀬戸・ 美濃系?	-	向付	
111	SK13	陶小鉢	I I鉤縁、四方 八入	110	53	56	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	貢入 向付	
112	SK16	陶中鉢	天目形、四方入	177	63	75	-	?	織紋	鉄胎	-	真須彌 執	黒相	-	在地系?	-	口經標4ヶ所 取っている
113	SK01 下槽	陶中鉢	I B 端反形	165	92	86	-	?	織紋	外輪 内輪 内輪	ローラー 等による 印花文	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1750~	-	
114	ZZZ	陶大鉢?	-	260	?	?	-	?	織紋	鉄胎	波状文 内文	輪括き	墨	不明	-	-	
115	SK13	陶大鉢	II浅丸形、底狭	305	71	161	-	?	織紋	鉄胎	波状文 内文	輪括き 滑流	灰	-	瀬戸・ 美濃系?	18C	貝目4ヶ? 貢入
116	SK07	陶盃洗	I合付	?	?	83	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系?	1780~	-	
117	SK18	陶合子蓋	無摘み	90	15	91	-	?	織紋	鉄胎	-	白	-	瀬戸・ 美濃系	-	貢入	
118	SK16	陶合子蓋	無摘み	100	14	100	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系?	1800~	-	
119	SK23	陶合子蓋	無摘み	106	12	104	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	-	
120	SK27	陶蓋物	III半筒形	86	58	50	-	?	織紋	鉄胎 灰胎	文字	?	灰	?	京・信 濃系	1750~	二次焼成
121	SK42	陶設置?	高台無し	187	73	152	-	?	織紋	鉄胎 灰胎	草花?	?	灰	-	唐津系	1780~	胎土目2ヶ以 上、素道具?
122	SK16	陶合子蓋	無摘み	75	10	76	-	?	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1800~	-	
123	SK22	陶合子蓋	無摘み	49	10	-	36	15	織紋	鉄胎	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-	-	

表8 陶磁器觀察表(4)

順序号	検出構	器種	分類		法量(cm)		重量(g)	成形 軸窓	装飾技法		胎土色	印・筋など	製作地	製作年代	備考	
			形状特徴		a	b			文様	装飾特徴						
124	S K16	陶合子身	II口縦蓋受け	60	?	?	74	?	輪縫	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	1800~ 122とセットか
125	S K16	陶合子身	II口縦蓋受け	38	18	33	46	24	輪縫	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-
126	S K16	陶合子身	II口縦蓋受け高台有	68	32	48	72	?	輪縫 左右無	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	1800~ 買入多い
127	S K07	陶片口	I口縦切丸形	175	110	84	-	?	輪縫	鉄釉	-	-	灰	-	京・信楽系	-
128	S K10	陶中蓋	?	?	?	100	-	?	輪縫	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	- 胎土目4ヶ、 傷有
129	S K01	陶罐体	I口縦無装飾	343	151	160	-	?	輪縫	鉄釉	内面佛 目	見达織 目	灰	-	瀬戸・ 美濃系	- 胎土目2ヶ 以上
130	S K16	陶罐体	II口縦折縫 二段	332	132	134	-	?	輪縫 左右無	鉄釉	内面佛 目	見达織 目	灰	-	瀬戸・ 美濃系	19C後半 -
131	S K13	陶罐体	IV口縦外帯形	340	162	115	-	?	輪縫	鉄釉	内面佛 目	見达織 目	白	-	瀬戸・ 美濃系	- 胎土目4ヶ
132	S K18	陶罐体	IV口縦外帯形	328	150	122	-	?	輪縫	鉄釉	内面佛 目	見达織 目	灰	-	瀬戸・ 美濃系	-
133	S K22	陶罐体	IV口縦外帯形	334	147	138	-	?	輪縫 左右無	鉄釉	内面佛 目	見达織 目	灰白	-	瀬戸・ 美濃系	- 胎土目3ヶ (おぞらく4ヶ)
134	S K22	陶罐体	IV口縦外帯形	338	144	137	-	?	輪縫 左右無	鉄釉	内面佛 目	見达織 目	白	-	瀬戸・ 美濃系	- 胎土目3ヶ (おぞらく4ヶ)
135	S K22	陶罐体	IV口縦外帯形	338	146	140	-	?	輪縫 左右無	鉄釉	内面佛 目	見达織 目	灰褐色	-	瀬戸・ 美濃系	- 胎土目3ヶ (おぞらく4ヶ)
136	S K45	陶罐体	IV口縦外帯形	285	?	?	-	?	輪縫 左右無	鉄釉	内面佛 目	-	灰白	-	瀬戸・ 美濃系	-
137	S K18	陶罐体	I口縦玉髄形	232	115	130	-	?	輪縫 左右無	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1750~ 胎土目4ヶ 所貰入
138	S K23	陶罐体	I口縦玉髄形	234	127	108	-	?	輪縫	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1750~ 目自3ヶ 貰入見込に別製品 の跡有り
139	S K14+ 23	陶捏体	II把手なし	295	147	130	-	?	輪縫 左右無	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1800~ 貰目3ヶ
140	S K16	陶捏体	II把手なし	316	139	127	-	?	輪縫 左右無	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1800~ 貰目3ヶ
141	S K20	陶捏体	II把手なし	334	161	130	-	?	輪縫	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	- 貰目3ヶ (胎土目?)、 二次焼成
142	S K10	陶植木鉢	?	?	?	86	-	?	輪縫	灰釉	-	-	白	-	瀬戸・ 美濃系	1800~ -
143	S K07	陶香炉	II有三足、輪縫 半筒形	110	68	66	-	?	輪縫	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1650~ 1780 -
144	4トレ	陶香炉	II有三足、輪縫 半筒形	140	79	85	-	?	輪縫	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	1650~ 1780 -
145	S K13	陶香炉	IV有三足、曲形	116	73	86	-	?	輪縫	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	- 買入
146	S K13	陶香炉	X I無三足、筒形 高台無	115	64	80	-	?	輪縫 左右無	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	- -
147	S K10	陶灰吹	I吹形	47	64	45	55	?	輪縫	灰釉	-	-	黒	-	在地系?	1750~ 胎土発泡
148	西側	陶火鉢	脚	?	?	?	-	?	型作り	鉄釉	水鳥	-	灰白	-	瀬戸・ 美濃系	- あるいは水 鉢脚?
149	S K01	陶中蓋	觸接み	114	31	-	41	?	輪縫 左右無	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	- 糸切り
150	S K07	陶中蓋	-	98	21	45	9	?	輪縫 左右無	鉄釉	-	-	灰褐色	-	瀬戸・ 美濃系	- -
151	S K01	陶土瓶?	摘み付	128	26	24	90	?	輪縫	鉄～ 左右無	文様	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	- -
152	S K23	陶中蓋	觸接み付	149	51	25	118	272	輪縫	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・ 美濃系	- -
153	S K27	陶中蓋	摘み付	132	37	16	112	?	輪縫	鉄釉	なし	?	白	?	瀬戸・ 美濃系?	- 買入
154	S K22	陶中蓋	摘み付	110	22	16	-	?	輪縫 左右無	鉄釉	なし	-	黒褐	?	在地系	- 約子用の穴 あり
155	S K23	陶中蓋?	-	118	?	?	-	?	輪縫	鉄釉	-	-	灰黒	-	瀬戸・ 美濃系	- -
156	S K16	陶小壺	II X I A双耳瀬戸 垂形	70	?	?	94	?	輪縫 左右無	灰釉	-	刷毛掛け	灰	-	瀬戸・ 美濃系	- 内面灰釉

表9 陶磁器観察表(5)

登録番号	検出機	基盤	分類		法量 (mm)				重量 (g)	成形	装飾技法			絶土色	印・尾など	製作地	製作年代	備考
			形状特徴	文様	a	b	c	d			釉薬	文様	装飾特徴					
157	SK23	陶中盤	II X 1 双耳瀧戸彫影		90	110	71	122	?	織錦	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-	買入
158	SK34	陶中盤	X 直二筋三耳彫、貼付高台		135	216	105	180	?	織錦	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-	-
159	SK23	陶中盤	V 箍部切立形		198	?	?	223	?	織錦	鉄釉	-	筒窯に鉄釉施し	灰	-	瀬戸・美濃系	-	-
160	SK23	陶中盤	II 半圆形深め		290	?	?	-	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-	-
161	SK22	陶中盤	-		?	?	86	-	?	織錦	鉄釉	?	?	白	-	瀬戸・美濃系	-	-
162	SK16	陶中盤	IX $\times$ かん形		?	?	73	117	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	1780~	輪に指顎底
163	SK23	陶大瓶	X II 内溝利形		?	?	117	150	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-	胎土目 2 ヶ以上
164	SK16	陶烟透形	III 菱口形		41	?	?	?	?	織錦	青釉灰釉	-	-	灰	-	不明	1800~	-
165	SK34	陶仏花瓶	I 錐口形		122	?	?	?	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	17C 中~	-
166	SK34	陶仏花瓶	I 錐口形クリ底		?	?	42	68	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	17C 中~	-
167	SK45	陶仏花瓶	IV 豆丸耳形		561	114	49	-	?	織錦	鉄釉	-	掛分	灰?	-	瀬戸・美濃系	1750~	美濃
168	SK02	陶花生	-		345	302	157	-	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-	胎土目
169	SK16	陶中水注	V 後手半筒形		?	?	50	?	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系?	-	油注・内面鉄釉
170	SK22	陶水滴	I 豆腐形		60	27	65	43	75	型打	青釉灰釉	草花	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-	買入
171	SK01	陶土鍋	I A 三足紐状双耳		214	112	85	224	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	1800~	胎土目
172	SK16	陶土鍋	I A 底基筋状		140	60	46	150	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	1750~	胎土目 3 ヶ
173	SK16	陶土鍋	I 丸形三足紐状双耳		190	?	?	-	?	織錦	鉄釉	-	-	白	-	瀬戸・美濃系	1780~	-
174	SK22	陶茶器	I C たんこ形丸形横六芯立		46	22	28	11	16	織錦	灰釉	-	-	?	-	不明	1700~?	二次焼成で胎発泡を避ける
175	豊丘	陶茶器	I C たんこ形丸形横六芯立		46	?	28	11	?	織錦	灰釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	1700~?	-
176	SK07	陶束縛	II A 台付たんこ形底部輪孔無		68	48	35	15	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	京・信楽系	1700~	-
177	SK03	陶秉場	II B 台付たんこ形底部輪孔有		44	52	48	56	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	京・信楽系	1700~	糸切り底
178	SK10	陶灯明受皿	I 灯明受皿B油滴切立状		104	20	43	72	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系?	-	-
179	SK16	陶灯明受皿	I 灯明受皿B油滴切立状		102	22	46	70	?	織錦	鉄釉	-	-	青灰	-	瀬戸・美濃系	-	内外面に重ね燒きの蓋の直
180	SK16	陶灯明受皿	I 灯明受皿B油滴切立状		105	21	46	76	?	織錦	鉄釉	-	-	青灰	-	瀬戸・美濃系	-	内外面に重ね燒きの盖の直
181	SK23	陶灯明受皿	I 灯明受皿B油滴切立状		110	?	?	74	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系?	-	-
182	西側	陶灯明受皿	I 灯明受皿B油滴切立状		110	26	45	80	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-	-
183	SK16	陶灯明受皿	I 灯明受皿E油滴單孔		76	16	37	52	33	織錦	鉄釉	-	-	灰白	-	京・信楽系	-	-
184	5トレー	陶灯明受皿	I 灯明受皿E油滴单孔		118	26	40	88	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系	-	台が付くと考えられる
185	5トレー	陶灯明受皿	I 灯明受皿E油滴单孔		66	13	26	46	25	織錦	鉄釉	-	-	青灰	-	瀬戸・美濃系	-	-
186	SK01	陶灯明受皿	I 灯明受皿		105	22	49	72	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	京・信楽系	-	買入
187	5トレー	陶土瓶蓋	-		96	24	14	71	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系?	-	-
188	SK01	陶土瓶蓋	摘み付		68	25	14	57	?	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	不明	-	買入
189	SK42	陶蓋	?		36	15	7	-	11	織錦	鉄釉	-	-	灰	-	瀬戸・美濃系?	-	-
190	SK16	陶不明	-		?	?	?	33	?	織錦	?	?	?	?	?	不明	-	蓋?

表10 陶磁器観察表(6)

器 物 号	接 出 構	器 種	分 類	法 量 (mm)				重 量 (g)	成 形	胎 質	胎 土 色	製 作		備 考
				a	b	c	d					製作地	製作年代	
191	S K35	灯明皿	I 無高台平形	116	24	58	-	?	織籠 右回転	土師質	褐	在地系?	-	-
192	S K13	灯明皿	I 無高台平形	110	22	50	-	-	織籠 右回転?	土師質	褐褐色	在地系?	-	-
193	S K42	灯明皿	I 無高台平形	100	22	54	-	?	織籠	土師質	褐	在地系?	-	-
194	S K42	灯明皿	I 無高台平形	100	24	60	-	?	織籠	土師質	褐	在地系?	-	-
195	S K42	灯明皿	I 無高台平形	104	25	50	-	?	織籠	土師質	褐	在地系?	-	-
196	S K42	灯明皿	I 無高台平形	100	23	54	-	?	織籠	土師質	褐	在地系?	-	-
197	S K22	焼塙壺蓋	I	78	17	82	-	115	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成
198	S K22	焼塙壺蓋	I	76	18	81	-	108	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成
199	S K22	焼塙壺蓋	I	78	17	80	-	111	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成 黒斑
200	S K22	焼塙壺蓋	I	75	18	84	-	116	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成
201	S K22	焼塙壺蓋	I	79	18	82	-	119	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成
202	S K22	焼塙壺蓋	I	77	17	83	-	122	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成
203	S K22	焼塙壺蓋	I	77	18	82	-	-	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成
204	S K22	焼塙壺蓋	I	76	17	79	-	-	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成
205	3 トレ	焼塙壺蓋	I	76	19	83	-	122	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	内面布目 二次焼成
206	S K22	焼塙壺蓋	II	70	17	-	-	85	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	内面布目 二次焼成 黑斑
207	S K22	焼塙壺蓋	II	70	17	-	-	-	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	内面布目 二次焼成
208	3 トレ	焼塙壺蓋	II	66	18	-	-	88	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	内面布目 二次焼成
209	表西側	焼塙壺蓋	II	66	19	-	-	77	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	内面布目 二次焼成 黑斑
210	Z Z Z	焼塙壺蓋	II	66	16	-	-	64	織籠	土師質	褐	近畿	-	内面布目 黑斑
211	Z Z Z	焼塙壺蓋	II	63	17	-	-	72	織籠	土師質	褐	近畿	-	内面布目 黑斑
212	S K02	焼塙壺身	II B	74	75	56	-	-	板作り	土師質	赤褐色	近畿	1710~ 1720代	「泉撰伊縫」内面布目
213	S K22	焼塙壺身	II B	79	75	60	-	309	板作り	土師質	褐	近畿	1710~ 1720代	「泉撰伊縫」内面布目 二 次焼成 黑斑
214	S K27	焼塙壺身	II B	72	74	56	-	259	板作り 内面布目 →ナダ	土師質	黑褐色	近畿	1710~ 1720代	「泉撰伊縫」内面布目 二 次焼成 黑斑
215	櫛 亂	焼塙壺身	II B	76	72	54	-	(262)	板作り	土師質	橙褐色	近畿	1710~ 1720代	「泉撰伊縫」内面布目
216	S K22	焼塙壺身	VII	55	61	46	-	158	織籠	土師質	灰褐色	近畿	-	無銘 内面布目 二次焼成
217	S K27	焼塙壺身	VII	49	68	48	58	222	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	無銘 内面布目 黑斑
218	S K27	焼塙壺身	VII	46	65	46	57	206	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	無銘 内面布目 黑斑
219	S K27	焼塙壺身	VII	55	65	46	57	208	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	無銘 内面布目 黑斑
220	S K27	焼塙壺身	VII	51	69	48	59	236	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	無銘 内面布目
221	S K27	焼塙壺身	VII	55	68	47	58	206	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	無銘 内面布目
222	S K27	焼塙壺身	VII	-	-	42	-	-	織籠	土師質	赤褐色	近畿	-	無銘 内面布目 黑斑
223	S K10	七 扇	筒形、上部に 小穴2	?	?	230	?	?	絞作り	土師質	褐	在地系?	-	-

表11 土器観察表(1)

図版号	検出遺構	器種	分類	法量(mm)				重量(g)	成形	胎質	胎土色	製作		備考
				a	b	c	d					製作地	製作年代	
224	S K16	焜爛?	内外に手、口縁部に窓	250	22	250	?	?	細作り?	瓦質	黒褐色	在地系?	-	七厘?
225	S K16	焜爛	窓の下縁に張出しがつく三足	?	?	250	?	?	細作り?	瓦質	褐	在地系?	-	-
226	S K18	火鉢?	-	?	?	192	?	?	粗作り	土師質	褐	在地系	-	-
227	櫻乱	柳川彫	口縁折彎形	180	33	-	-	-	輪轍	土師質	褐	在地系	-	-
228	S K10	焜爛炉	四隅落し小型	374	267	?	-	?	板作り	瓦質	灰	在地系?	-	-
229	S K16	炬燵炉?	筒瓦?	247	163	242	-	?	板作り	瓦質	灰褐色	在地系?	-	火鉢?
230	S K10	不明	-	-	-	-	-	-	板作り	瓦質	灰黒	在地系	-	道具瓦?

表12 土器観察表(2)

図版号	検出遺構	種別	材質	法量(mm)			重量(g)	備考		
				a	b	c		?	?	?
234	S K13	煙管嘴首	銅	? × ? × 16			?			-
235	S K16	煙管嘴首	銅	? × ? × 16			?			-
236	S K42	煙管嘴首	銅	74 × 12 × 17			13	羅字一部残	左側面に溶接痕	
237	S K13	煙管吸口	銅	? × 12 × ?			?			-
238	S K16	煙管吸口	銅	? × 11 × ?			?			-
239	S K17	煙管嘴首	銅	? × 14 × ?			?			-
240	S K42	煙管吸口	銅	66 × 10 × 4			7	羅字一部残		
241	S K13	小束	铁芯鋼製	170 × 14 × 5			21			-
242	S K20	鐵	銅	33 × 4 × 2			3			-
243	S K17	火打金?	铁	? × ? × 4			?	あるいは鉄鎧?		
244	S K16	鐵?	铁	? × 14 × 3			?			-
245	S D06	鐵?	铁	90 × (頭巾) 25厚10			41			-
246	S K16	?	铁	130 × 13 × 8			37			-
247	S K21	?	铁	? × ? × ?			?			-

表13 金属製品観察表

図版号	検出遺構	種別	形 状	法量(mm)			重量(g)	石 質	備 考		
				a	b	c			?	?	?
251	S K07	硯	長方形	162	68	25	?	?	表面及び側面に釘跡かと思われる線刻あり		
252	S K22	硯	長方形	?	48	?	?	シルト岩		-	
253	S K16	中砥石	立方体	93	37	20	158	砂岩	鉄釘付岩		
254	S K16	中砥石	長方形	?	47	22	?	砂岩		-	
255	S K16	中砥石	長方形	?	42	20	?	砂岩		-	
256	S K16	中砥石	立方体	?	51	22	?	砂岩		-	
257	S K16	中砥石	立方体	157	54	27	562	砂岩		-	
258	S K16	中砥石	立方体	168	54	29	578	砂岩		-	
259	S K07	仕上砥石	長方形	?	64	46	?	砂岩		-	
260	S K13	仕上砥石	長方形	?	42	42	?	砂岩		-	
261	S K13	仕上砥石	長方形	?	23	10	?	緑色岩		-	
262	S K16	仕上砥石	立方体	?	52	23	?	粘板岩		-	
263	S K16	仕上砥石	長方形	?	52	24	?	粘板岩		-	
264	S K16	仕上砥石	立方体	170	57	21	?	粘板岩		-	
265	S K16	仕上砥石	立方体	?	50	?	?	粘板岩	鑿(のみ)跡あり		
266	S K18	仕上砥石	立方体	140	35	32	381	粘板岩		-	
267	S K47	仕上砥石	長方形	?	40	36	?	砂岩		-	
268	Z Z Z	仕上砥石	長方形	?	71	43	?	緑色岩		-	
270	S K35	粉挽き臼臼臼	-	-	-	-	-	花崗岩		-	
271	S K35	粉挽き臼臼臼	-	-	-	-	-	?		-	
272	Z Z Z	粉挽き臼臼臼	-	-	-	-	-	?		-	
273	S K10	搗き臼	-	-	-	-	-	花崗岩		-	
274	S K17Ma1	水神	-	170	153	52	2500	花崗岩	水神と朱書き 円座		
275	S K39Ma1	?	角形	125	86	75	?	玄武岩?	臼状、冶金関係?		

表14 石属製品観察表

# **写真図版**





調査区全景（南東半）



調査区全景（北西半）



SK14



同上



SK17



SK14



SK17

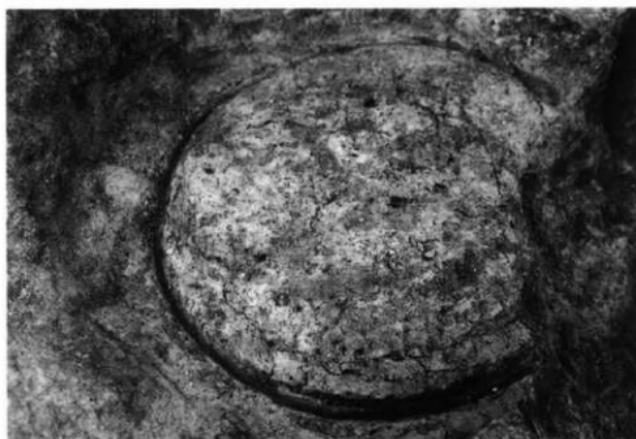


SK17

図版 4



SK31 • SK33



SK33



SD03 • SD04

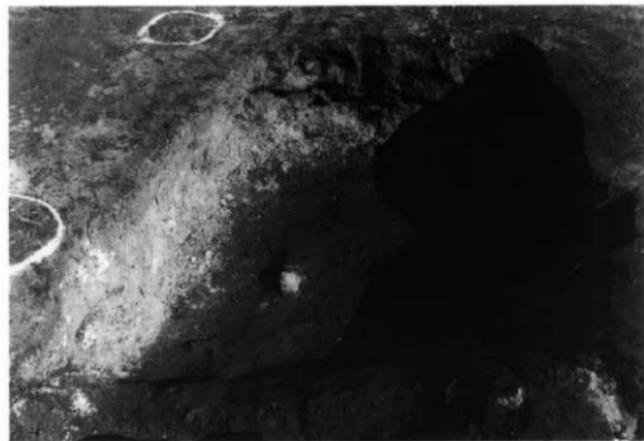


同断面

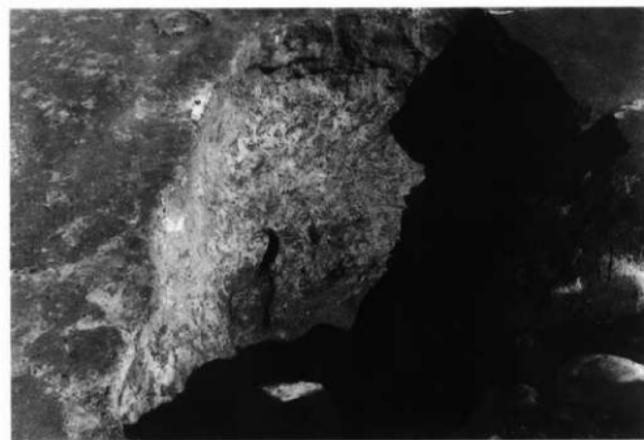


同遺物出土状態

図版 6



SK10



SK10 + SK26



SK16



SK20



SK23

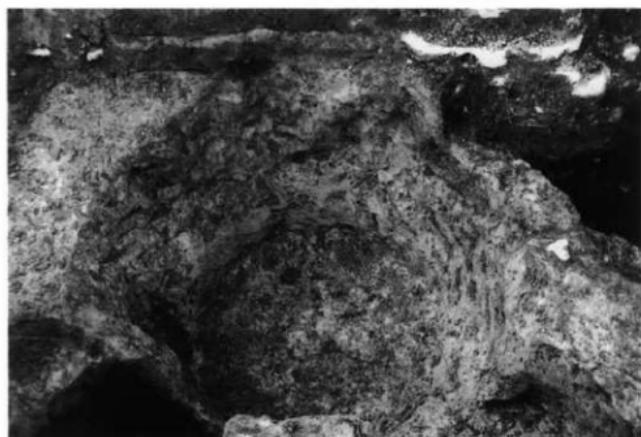


SK27

图版 8



SK42



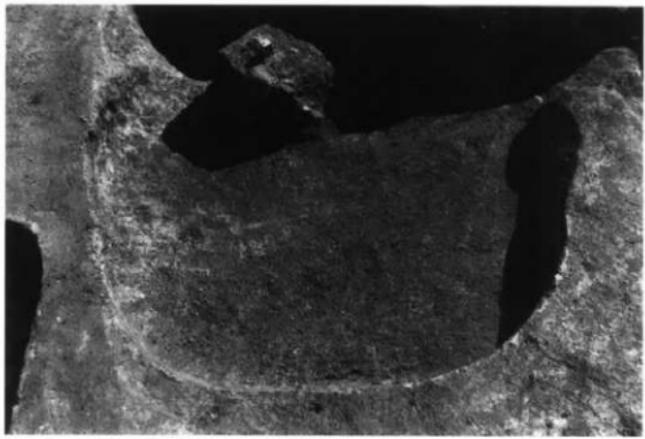
SK02



SK07



SK11



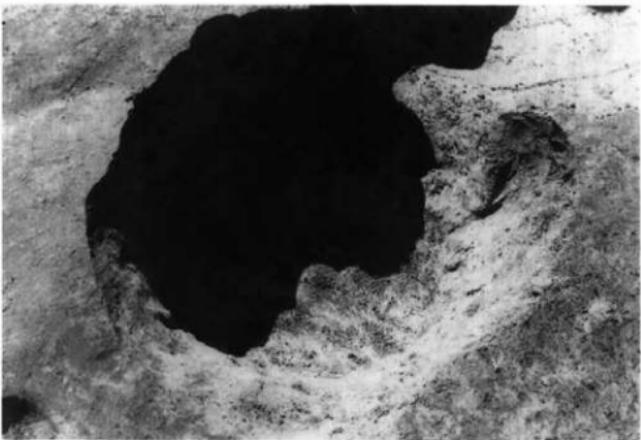
SK21



SK24

図版10





図版12



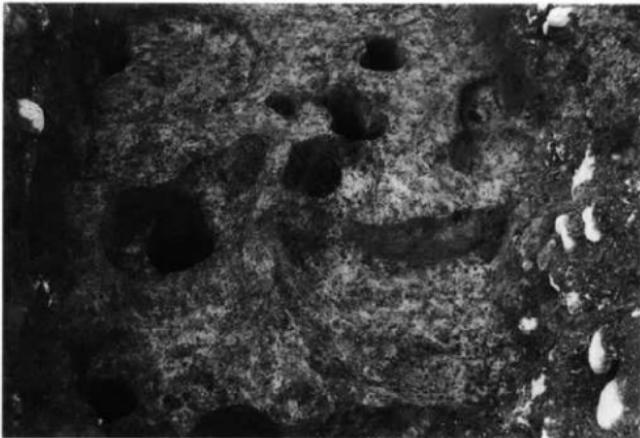
SK44



SD05・SD06



SM01



6 トレンチ  
小柱穴



重機作業風景



発掘作業風景



SK13



SK13



SK03



SK01



SK10

図版16



SK10



同上



SK18



SK16



SK16





SK23



SK27



SK34



SK42



SK48



SK02 陶器花生



SK07

SK39 不明石製品



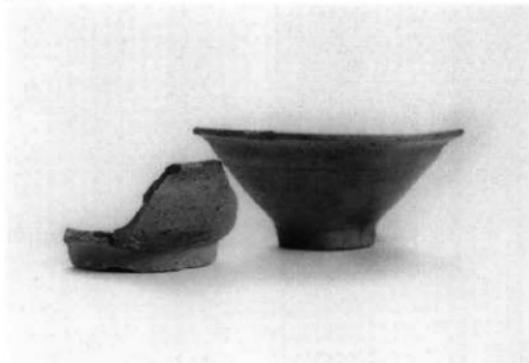
SK08



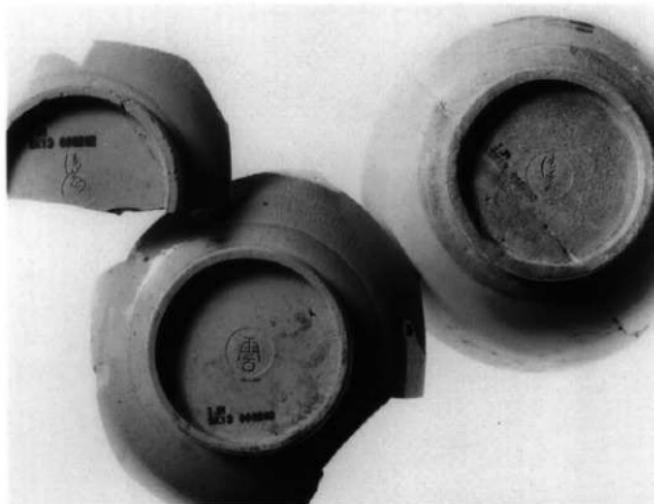
SK26



SK35



陶器小片



同 中碗印



同 小皿



陶器 極小皿



同 灯明皿



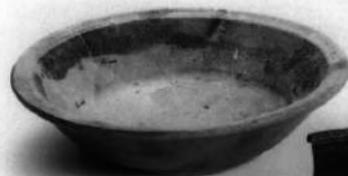
同 仏盤器



同 小鉢



同 中鉢



陶器 大鉢



同 孟洗



同 蓋物



同 合子



同 擂鉢



陶器練鉢



同 捺鉢



同 香炉



陶器 灰吹



同 中壺蓋



同 小壺・中壺



同 烟德利



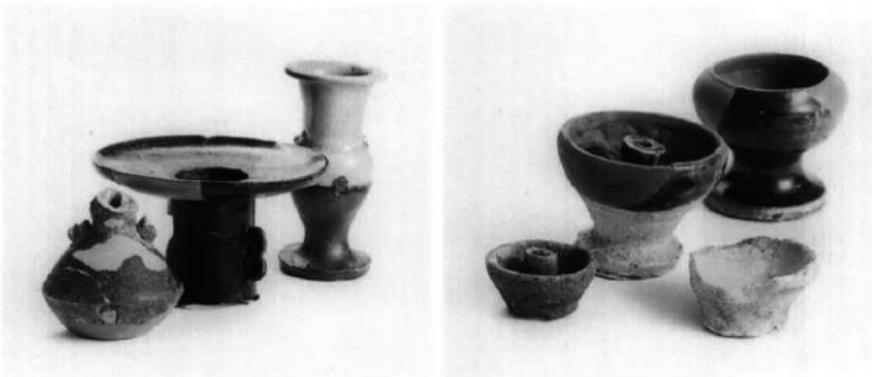
同 中瓶・大瓶



陶器 土鍋



同 水滴



同 仏花瓶

同 香爐

同 灯明受皿





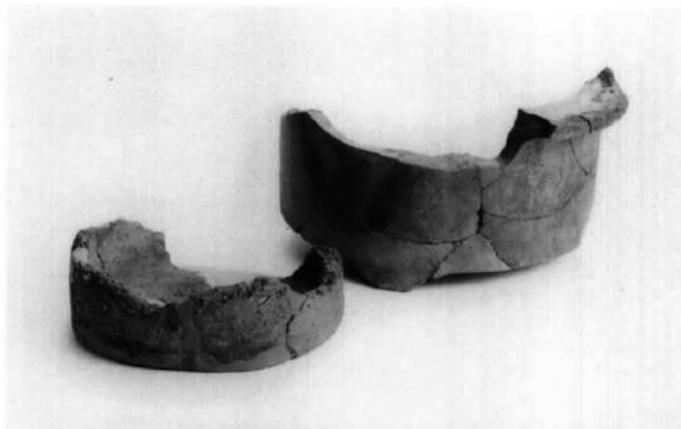
土器 灯明皿



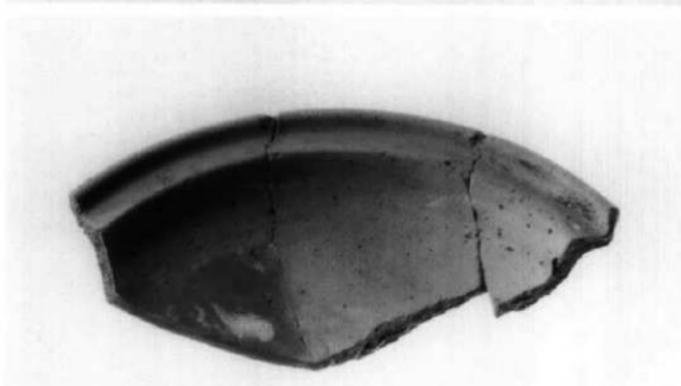
同 焼塩壺



同 上



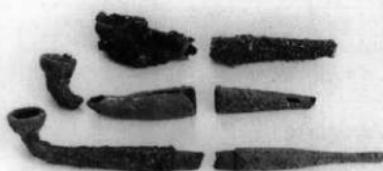
土器 炉



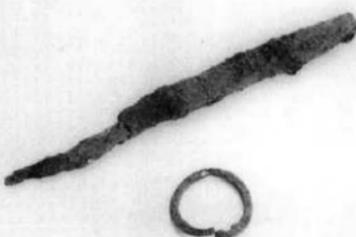
同 柳川鍋



同 不明瓦質製品



煙 管



小束・環



砥 石



茶臼

# 付編 飯田城下町出土焼塩壺の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

近世の遺跡である飯田城下町の発掘調査では、町屋跡などから当時の生活用具を中心として多数の遺物が検出されている。それらの中には、何点かの焼塩壺もみられた。近世遺跡の年代指標として、また流通・生産の資料として重要な位置を占める焼塩壺については多くの研究例があり、刻印や成形技法・形態などの分類に基づき、年代や系統が論じられている。当社では、これまでに主に江戸遺跡から出土した焼塩壺を対象として自然科学の手法を応用した胎土分析を行い、材質という視点から、これまでの分類・系統について検証を行っている。その成果は、矢作ほか（1994）および矢作ほか（1998）にまとめてあるが、中でも、焼塩壺の胎土から地質学的情報を見出すことにより、江戸遺跡から出土したロクロ成形の焼塩壺は無刻印や「播磨大極上」および「御壺塙」などの刻印にかかわらず、江戸近郊で製作された可能性が高いことを指摘した。また、それ以外の江戸遺跡出土焼塩壺のほとんどは、刻印から推定されているように、現在の大坂府南部に相当する和泉地域で製作されたものであることを確認したことなどは、胎土分析による効果として特筆される。

今回の飯田城下町の発掘調査で検出された焼塩壺は、これまでに同様の刻印や形態などが江戸遺跡出土品の中に確認されているものと、江戸遺跡出土品の中には確認されていないものとが認められている。このような出土状況と飯田城下町の地理的な位置を考慮すれば、今回の資料は、当時の焼塩の流通状況を解明するための好適な資料となるものと期待された。今回の分析調査では、江戸遺跡に類似が認められるものと認められないものを試料として胎土分析を行い、それぞれの胎土の特徴を把握するとともに、江戸遺跡の分析事例との比較を行うことにより、その流通状況について検証する。

## 1. 試 料

試料は、飯田城下町から出土した焼塩壺の蓋2点と身2点の合計4点である。試料には試料番号1～4までが付けられている。試料番号1は蓋であり、次に述べる試料番号2の身と形態上セット関係と考えられている。試料番号2は身であり、発掘調査所見によりII b形という形態に分類され、「泉湊伊織」の刻印がある。試料番号3は蓋であり、次に述べる試料番号4の身とセット関係にある可能性があることが指摘されている。試料番号4は身であり、発掘調査所見により「浅桶形」という形態に分類されている。この形態は、これまでに江戸遺跡出土品には認められていないものとされている。各試料の出土位置などは、分析結果を示した図1に併記する。

## 2. 分析方法

当社がこれまでに行った焼塩壺の胎土分析では、重鉱物分析を分析手法の中心としてデータを蓄積してきた。重鉱物分析を選んだ主な理由としては、分析データ間の比較が分かり易いことと胎土の由来する地質が推定できることがあげられる。今回も同様の分析方法で行うことにより、これまで当社で得ら

れている江戸遺跡出土試料との比較が可能になる。以下に分析処理手順を述べる。

試料は、適量をアルミナ製乳鉢で粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm-1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物のプレバラートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

### 3. 結 果

表1 重鉱物分析結果表

4点の試料はともに、「その他」とした変質粒が多いが、それを除くと試料番号1と3ではほとんど酸化角閃石からなる組成であり、試料番号2と4では同量程度の角閃石と酸化角閃石からなる組成である。また、試料によってはカンラン石、斜方輝石、黒雲母、ジルコンなどが含まれるが、いずれも少量または微量である。

矢作ほか（1998）では、焼塩壺の胎土の重鉱物組成を、角閃石型と両輝石型（P類）とに分類し、さらに角閃石型を角閃石の多いI類、酸化角閃石の多いII類、ほとんど「その他」からなるIII類とに分類している。今回の分析結果では、試料番号1と3がII類、試料番号2と4がI類とII類の中間的組成であるI~II類にそれぞれ分類される。

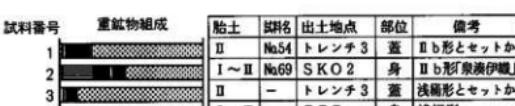
以上の分析結果を表1、図1に示す。

### 4. 考 察

今回の試料は、いずれもこれまでの江戸遺跡出土試料から設定された胎土分類である角閃石型に相当する。角閃石型は、これまでの分析例により和泉地域で製作されたことを示す胎土であることから、4点の試料は、浅桶形とされた試料も含めて全て和泉地域で製作されたものである可能性が高い。和泉地域で製作された焼塩壺の出土は、飯田城下町においても和泉地域で生産された焼塩が流通していたことを示唆する。なお、浅桶形の焼塩壺は、江戸遺跡では確認されていないという所見であるが、和泉地域で生産された焼塩に使用されていることとそれが飯田まで流通していることを考慮すると、今後、江戸遺跡の出土品の中にも確認される可能性がある。

今回の試料の中で唯一の刻印である「泉湊伊織」は、江戸遺跡出土試料における胎土分析では、I類

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レンン石	電気石	不透明鉱物	その他	会計
1	0	4	1	2	49	5	1	2	0	0	0	186	250
2	0	4	2	55	40	4	1	2	2	2	12	128	252
3	3	2	1	0	12	1	2	0	0	0	1	103	125
4	1	16	0	39	27	1	3	1	1	1	5	155	250



凡例 □ カンラン石 ■ 斜方輝石 ▨ 角閃石 ■ 酸化角閃石  
▨ 黒雲母 □ ジルコン ■ 不透明鉱物 ▨ その他

図1 土器胎土重鉱物組成

とⅠ～Ⅱ類およびⅢ類の3種類の胎土がほぼ均等に認められる傾向がある。今回の「泉湊伊織」の試料がⅠ～Ⅱ類に分類されたことは、この傾向から逸脱するものではない。ただし、矢作はか（1998）では蛍光X線分析装置を用いた化学成分分析を行うことにより、「泉湊伊織」の刻印をもつ身の胎土はⅠ類とⅠ～Ⅱ類およびⅢ類の胎土にかかわらず、2種類に分類される可能性があるという結果が得られている。したがって、今回の試料についても、化学成分分析および胎土薄片作製観察を行うことにより、さらに検討が加えられると考える。

身と蓋との関係については、今回の試料では、蓋の試料間、身の試料間で類似性が認められ、身と蓋との試料間では、どの組み合わせにおいても類似性を認めることはできなかった。身と蓋とが異なる胎土の組み合わせもあった可能性はあると考えられるが、当社におけるこれまでの分析例では、刻印や技法・形態などからセット関係が指摘されている身と蓋の試料は、胎土が類似することが多かった。したがって、今回の試料では、Ⅱb形も浅彌形も身と蓋のセット関係にある可能性は低い。

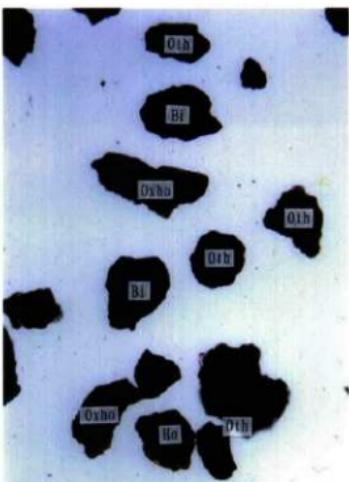
現時点で4点の試料の分析結果から考察できることは以上の通りであるが、今回の成果は、江戸以外の消費地における焼塩壺の分析データが得られたこと自体にあり、またそれによって江戸で消費されていた和泉地域産の焼塩が、飯田城下町でも消費されていた可能性が高いことを指摘できた。

なお、江戸では18世紀末以降ロクロ成形の焼塩壺に入れられた焼塩が大量に出回ったことがこれまでの発掘調査から明らかにされており、江戸における焼塩の流通・消費状況に大きな変化があったことが述べられている（桐生、1994；両角、1994など）。そこでは、同時期に江戸近郊の行徳塩田における瀬戸内産の粗塩の精製加工が盛んになったことなどから、江戸近郊における焼塩の生産があった可能性をあげている。胎土分析では、そのロクロ成形の焼塩壺が江戸近郊で製作された可能性が非常に高いことを、地質学的および他の江戸近郊産とされる土器類の分析例との比較から明らかにし、上記の所見を裏付ける成果を上げている。飯田城下町でも、このような時代による焼塩の流通・消費状況の変化があつたかを検討することは必要であろう。その際に焼塩壺の胎土分析は、上記の江戸遺跡における例のように非常に重要な資料となることは確実である。したがって、今後も江戸以外の消費地における分析データを蓄積することができれば、江戸時代における焼塩の生産流通事情の解明に大きく寄与することができると思われる。

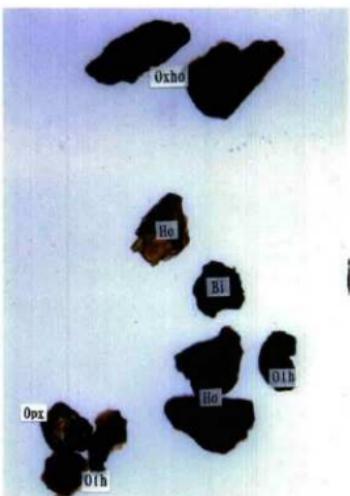
## 参考文献

- 桐生直彦（1994）「江戸」近郊の焼塩壺。江戸在地系土器の研究Ⅱ, p.105-125, 江戸在地系土器研究会。  
両角まり（1994）江戸在地系土器におけるロクロ技術の展開。江戸在地系土器の研究Ⅱ, p.29-41, 江戸在地系土器研究会。  
矢作健二・植木真吾・菅原道・中山経一（1994）焼塩壺の研究（その1）－胎土分析による問題提起とその検討－。日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集, p.93-94, 日本文化財科学会第11回大会実行委員会。  
矢作健二・植木真吾・橋本真紀夫・齋藤紀行（1998）近世江戸遺跡から出土した焼塩壺。PALYNO No.3, p.114-128, パリノ・サーヴェイ株式会社。

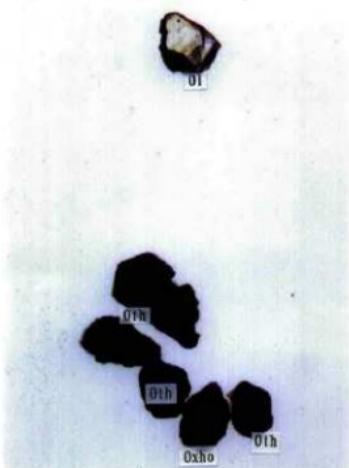
### 図版 胎土中の重鉱物



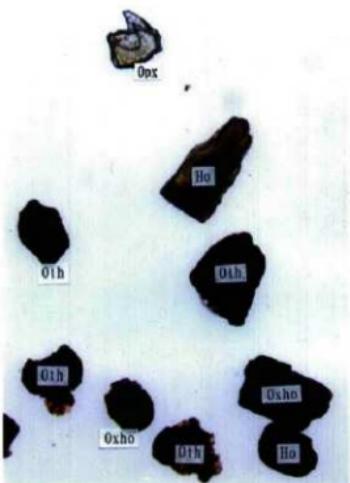
1. 試料番号 1 No.54 トレンチ3 000111 署



2. 試料番号2 No.69 SK02 000114 身  
II b形「泉塗伊織」



3. 試料番号 3 トレンチ 3 000111 蓋  
浅桶形



4. 試料番号 4 ZZZ 000127 身  
浅桶形

01: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Ho: 角閃石,  
Oxho: 酸化角閃石, Bi: 黒雲母, Oth: その他.

0.5mm

# 報告書抄録

ふりがな	いいだじょうかまちいせき							
書名	飯田城下町遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬場保之・藤原直人							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL. 0265-53-4545							
発行年月日	平成13年3月日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
いいだじょうかまち 飯田城下町遺跡	飯田市 本町 1丁目 13-1	市町村	遺跡番号	35° 49' 42"	30' 41"	平成12年 1月24日 2月10日	310m <sup>2</sup>	市街地再 開発事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
飯田城下町遺跡	集落址	縄文時代	方形周溝墓 溝址	縄文土器深鉢片 弥生土器壺・甕 土師器甕片 灰釉陶器碗		・近世城下町の町屋の一画を調査した。		
		弥生時代		1基	弥生土器壺・甕	・近世から近代にかけて4度の大火と少なくとも2度の溝水に遭っていることが確認された。 ・茶臼・壺・茶碗といった茶道具や、焼塩壺が出土し、上級商家の生活の様子が明らかにされた。 ・町屋の家並やスペースデザインが部分的に把握された。		
		平安時代		2条	土師器甕片 灰釉陶器碗			
	城下町	近世・ 近代	地下室	2基	陶器（瀬戸美濃系・京焼系 ・肥前系等）			
			井戸	1基	系			
			廁	4基	・肥前系等）			
			木戸	1基	磁器（肥前系）			
			塵芥投棄坑	1基	土器、瓦、土製品、金属製品、			
			大火灰掻き坑	15基	木製品、			
			その他	35基	石製品（茶臼） 動物遺存体			

---

## 飯田城下町遺跡

2001年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地  
長野県飯田市教育委員会  
印 刷 (株)新葉社

---

